川柳塔

平成九年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻八四三号

日川協加盟

四先生追悼川柳大会特集

No. 843

八月号

第9回兵庫のまつり——ふれあいの祭典 川柳祭

とき 11月9日（日）午前10時半開場
正午開会

ところ 尼崎市立労働福祉会館
（尼崎市東難波町4丁目18－32）

講演 「話しことばと書きことばのちがい」
俳人 木割大雄

題と選者 ＜事前投句＞（5人共選・各題1句）
黒川紫香・卜部晴美・小山紀乃
荻原金之助・藤本静港子
「眼」 平山繁夫・赤松隆男・来住タカ子
「未来」 春城武庫坊・去来川巨城
「座る」 泉比呂史・中野文擴・斎木敏子
田中 薫・小松原爽介

応募料 1000円（郵便小為替）

賞 文部大臣奨励賞・兵庫県知事賞ほか

締切 8月31日（日）

応募先 〒660 尼崎市東七松町1丁目23－1
尼崎市国際文化室・祭典実行委

題と選者 ＜当日投句＞（各題2句・大会出席者に限る）
「書く」 梶原サナエ 「貝」 谷口光穂
「空」 森田栄一

第4回 鳥取県民文化祭主催事業 第21回 鳥取県川柳大会

とき 9月28日（日）午前10時開場

ところ 気高町営国民宿舎「貝がら荘」（☎〇八五七－八二三三）
＜JR山陰線「浜村駅」（鳥取駅から米子方面5駅目）徒歩3分＞

兼題と選者 「めし」 柏原幻四郎選
「顔」 奥田みつ子選
「生きる」 長谷川紫光選
「恋」 和泉香選
「揺れる」 内田久枝選
「歌」 新家完司選
「光る」 門脇かずお選
「すっかり」 森山盛桜選

出句締切 午前11時半厳守（各題2句・席題なし）

欠席投句 9月10日締切（当日消印有効）用紙自由
〒689-03 鳥取県気高町飯里84－4 鈴木公弘あて

参加費 当日会費 2000円（昼食・発表誌呈）
欠席投句 1000円（発表誌呈）

夕食会 9月27日午後6時半から貝がら荘・5000円

宿泊 貝がら荘（先着30名）11000円（夕食会共）
◎7月末まで受付（満室後は旅館あっせん）

連絡先 〒689-03 鳥取県気高町飯里84－4 鈴木公弘
（☎〇八五七－八四－二八八六）

主催 鳥取県川柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県
後援 気高町・気高町文化協会・新日本海新聞社ほか

六月有事

橘高薫風

今年の六月は慌ただしいうち、あっという間に過ぎ去って行った。空しさと充実感がないまぜに打ち寄せては去る。まるで高波に身を預けたような一ヶ月だった。

七日は「男女雇用機会均等月間記念川柳大会」がクレオ大阪西の会場で開催され、高杉鬼遊、島村美津子両氏と私の三名が選を担当、男女平等キャンペーンの主旨に協力したが、今年は第四回で投句数も年々増加している。

その日のうちに近鉄で津市へ。日川協の全国大会の前夜祭には遅刻、翌日には第二次選者の責を果たした。ジュニアの部の表彰など新鮮な収穫と感じたが、二次選のあり方には考えさせるものが多いと思った。次回の開催を引き継いだ山口県萩市への期待は、観光行事とともに大きいものがある。

十日は句集『ほたる』が発刊になった。豊中市蛍池公民館の川柳講座をきっかけに月例句会が発足し、五年経ったら合同句集を出そうと何気なく言った言葉が実現したのである。三十六名の参加、会長井上直次氏とスタッフの人柄が光る。

十四日は古川柳研究家の清博美氏との会合を田中正坊、奥田みつ子両編集子に任せて倉吉市入り、翌日の平成九年度の「一県民一文化」事業である「とっとり文化指導者セミナー（川柳部門）開講式」に臨むためである。五年後の国民文化祭とっとり開催までに、六十二万県民の一人に一文化（趣味）を体得して頂くという壮大な企画で、川柳部門がその嚆矢となり、川柳指導者を増員するためのゼミナールである。開講式なので私の担当は基調講演ということだった。

二十二日は番傘川柳本社主幹儀野いさむご夫妻の金婚のお祝いの会、麻雀という珍しい題で選を担当させて頂いた。

宴会に移り乾杯をすませて清興の出る時分にそっと中座をさせて頂いた。

今ここに時実新子さんの書信がある。

「拝復　小出智子さんご逝去のおしらせにおどろきました。一時は、私が茨木時代に通っていた医院へ智子さんも通院されていました。あなたやうちの父と打たれた麻雀の音、智子さんのピシッピシッという高音が今も耳に残っていて、あの音に私は智子さんの芯のお強さを見た思いでした。」（以下略）

句集『蕗の薹』の出版を曽我さんにお頼みに行ったときのことであった。

祝典から通夜へ、私は板尾岳人君と暗い夜道を黙々と歩いた。

翌日の葬儀におだやかなお顔を見た。いい処へ行かれる、それだけでよかった。

二十八日は追悼川柳大会である。前夜からの台風情報に眠れなかった。

何より先ず簡素にということを指示して、今回は予算案から始めてもらった。法要は路郎先生の孫、西村哲夫師と西田柳宏子氏の演出であった。それぞれの責任者は適材適所、会の進行に尽力して予想を越えた参会の方たちから清々しく爽やかな会だったとの感想を頂くことが出来た。ありがたいことである。

「川柳塔は不滅です」その夜一隅で聞いた女性の声を私は生涯忘れない。

座右の句
胃半分肺半分の湯呑かな
私の句
冷やっこ四つの角に自尊心

（薫　風）

後藤黎之助

川柳塔　八月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　六月有事……橘高薫風…（1）
ひや汗談義……河内天笑…（2）
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選…（4）
自選集……（47）
川柳の群像　三宅巨郎……東野大八…（50）
古川柳歳時記『月　見』……清　博美…（52）
水煙抄……高杉鬼遊選…（56）
秀句鑑賞┌同人吟……榎本吐来…（54）
　　└水煙抄……藤井正雄…（79）
大空のこころ（79）……橘高薫風…（83）
渺湖抄……八木千代選…（80）
茴香の花……西出楓楽選…（84）

ひや汗談義

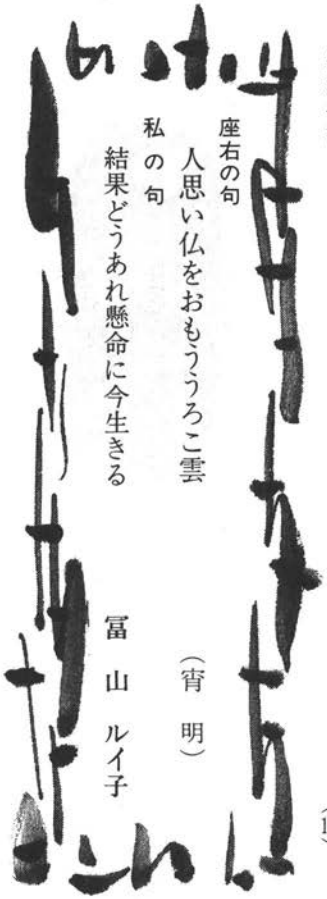
河内天笑

昭和五十五年五月、西尾某先生句碑建立の時の事です。除幕式の四五日前の夜、西尾家から電話がありました。奥さんの美与子さんの声で「ちょっと頼みがおまんねやけど」「はい何なと言うとくなはれ」「句碑の句を吟じてやってほしいんです。あんた何でも上手にしはるさかいと思ての頼みですよって聞いとくなはれや」という事です。一度も二度もお断わり致しましたが奥様の気迫にはどうしようもなくお受けするより他ありませんでした。

歌ならば演歌ナツメロ童謡ジャズポップスにハワイアンと何でもござれですが、詩吟だけは一度も経験なし。だいぶん昔、兄が出征する日町会長が詩吟なるものを唸っていたのをおぼろげに覚えている程度なのです。とに角何とかせなあかんのでその夜から月子に聞いて貰いながら道なき道を手さぐりで練習し始めました。ひと通り節まわしもついたところで西尾家に「これでよろしおまっしゃろか」と電話で「一歩出ずれば」を唸りましたところ奥さんが「まあまあそれで結構でんがな、おおきによろし頼みます」とOKの答。然し私自身気休めにもなりません。自己流の節をつけてのたった三日の練習です。我流もええとこです。しかし遂にその日が来ました。

首吊りですが背広はベージュの新調です。頭は角刈りで太い緑のストライプのネクタイ。

「　裏　」……池　森子選…(86)
一路集「か　む」……野口節子選…(86)
「あいまい」……河井庸佑選…(87)
初歩教室「入れる」……吐田公一…(88)
路郎・葭乃・生々庵・栞　**追悼川柳大会**……(90)
菱田満秋・寺尾俊平・政岡日枝子・木本朱夏・新家完司
エッセー　薬あれこれ……田中正坊…(101)
追悼　小出智子さん……(102)
西田柳宏子・八木千代・金井文秋・板尾岳人
河内天笑・桜井千秀・高杉鬼遊・東野大八
寺澤みど里さんを偲ぶ……青戸田鶴…(109)
各地柳壇（佳句地十選／宮西弥生）……(110)
柳界展望……(126)
八月各地句会案内……(127)
■編集後記……(128)



座右の句

人思い仏をおもううろこ雲　（宵明）

私の句

結果どうあれ懸命に今生きる　冨山ルイ子

これに黒メガネかけたらどこかの組の幹部みたいないで立ちです。たくさん人が集まって来ました。謡曲のセミプロ田中好啓さん。詩吟は師匠クラスの二宮山久さん。だんだん自信がなくなってきました。バス停に行って最後の稽古をしていたところ詩吟に堪能な堀内柳仙さんが通りかかりましたので聞いて貰いました。二三アドバイスを下さいました。

どきどきどきどきして来ました。つまり自信がなかったんです。が不思議にもバス停から会場へ歩いてゆく途中にドキドキは消えました。「思い切り声出したら何とかなるやろ」そんな楽観的な本来の自分にかえっていたのです。「一歩出ずれば吾れ旅人となる心」二回くり返しの吟詠は一瞬でした。

鏡割りの儀式もすんで升酒をぐいぐいいただきました。おいしかったです。田中好啓さんに「どないでした。ひや汗もんですわ」とお伺いをたてたところ「ええかったがな、あれでええ」と言ってくれました。お世辞でもこの大先生に「ええかった」と言われて嬉しかった。あとで気付いた事ですが失敗さえなければ上手下手はどっちでも「ええかった」のかもわかりません。しかし私には大変大きな経験になりました。つまり「おどおどと自信なさそうな姿は誰も期待してない。詩吟は無手勝流やが堂々とやろう」とバス停からの道で自分に言い聞かせた事を思い出します。

とことん我流　麻雀も生き方も　天笑

礒野いさむ氏金婚式の会の宿題「麻雀」で薫風主幹がこの句を秀句にとり上げてくれました。このののちも我流の生き方は変えられません。

橘高薫風選

今治市　越智一水

わがままに生きて老いなど知りません
ボタンかけ違え人生意地を張り
あせらずに落ちつけと言う雨が降り
仲のよい同居つばめは知って来る
八十八夜ふる里思い母思い
空が高い空気が軽いうれしい日

京都市　都倉求芽

殺人もマニュアルどおりの酒鬼薔薇
魚釣島　名前で聞けばリゾート地
血を吸って恍惚のまま蚊の事故死
修学旅行のだれもがアディダス　アシックス
洗濯機に残業させて寝るとする
明日こそは平安であれ蓮の白

吹田市　栗谷春子

たのしみは容赦もなしに皆外れ
つくづくと佗しきものは置手紙
おそるおそる一丁四方歩く杖
金木犀一部始終をみていてね
やれうれし秋田みやげのきりたんぽ
少々の降りにあわてぬ雀たち

米子市　光井玲子

北の部屋ひねもす空気動かない
傾いた家でも温い灯をともす
はぐれ雲昼の月とは馬が合う
蔦には太刀打ち出来ぬかもめなり
散る日までわたしの海を光らせる
さみしかろう独身貴族といわれても

唐津市　田口虹汀

目に見えて息吹き返す春の土
脳味噌も満腹すると働かぬ
悠然と鼠が猫の前を行く
五風十雨孫十二人曽孫九
氷噛む孫とひと息心太
中元の真芯に妻と二人居る

枚方市　八田敏

背にリュック車椅子押し妻と旅
庭に巣をかけた鳩から夢貰う
家事三年　妻も時には味をほめ
手足動く夢見たと妻いい目覚め
定年後着慣れた背広もよそよそし
酒よりもおはぎが嬉し古希の日々

弘前市　浅田隆樹

夕焼けや少年野球歯の白さ
おにぎりのぬくもり永久に母の影
ひと山のバナナ密航かもしれぬ
マスゲームしながら咲いた芝ざくら
裏道を何と無粋な高級車
女子寮の前はわき目もふらず行く

和歌山市　川上大輪

一枚の名刺でドアを開けている
梅干しが旨いやっぱり日本人
アンダーライン引いて覚えたことにする
放浪癖を人は羨ましいと言う
渋滞の辻は石蹴りした所
出棺へ背筋がピンと伸びてくる

松山市　宮尾みのり

キラキラとして三歳の好奇心
いい女いいママしてる娘へエール
ふっ切れてからは雑音だと思う
友が逝くコトンと小さなたが緩む
生きのびる方便ここは貝になる
二人三脚紐を解きたいのは女

京都市　山海友熙

古都に住み風と喋ってそうどすえ
夕暮れる古都は昔をよく喋る
まだ女捨てた訳ではない枕
女とは悲しからずや恋ありて
朝顔に水やる朝をよろこべり
女とや紅を落して熱帯夜

寝屋川市　堀江光子

戦友よ我より先に逝くなかれ
しゃぼん玉消えてゆくにも天を指し
海の風生れる涯の青思う

母の作るどこやら違う粥の味
桜貝タイムトンネルくぐらせる
その未練雪と一緒に払いけり

富山県　増田紗弓

住み慣れて山の緑を忘れがち
分身か小型がジイの膝にいる
性格がチューブに出てる絵の具箱
転んだら人情透けて見えてくる
ほんとうの友達にがいことも言う
駆けてきたリボンへ消えた待ち時間

鳥取県　土橋睦子

青春を栞に残す白い花
ライバルも疲れた背広干している
藁屋根に民話の煙たちこめる
ときめきが溢れ涙を拭いている
ジェラシーか真っ赤に割れたザクロの実
蓮如さまの五百回忌の縁に遇う

米子市　石垣花子

ひょっこりと噂をしてた母が来る
今噂してたところと迎えられ
紙一枚　親友蹴落す事になり
坂越えるまでは続いた胃の痛み
決めていた別れの言葉口に出ぬ
下り坂で手を差しのべてくれた神

砂川市　大橋政良

ばんざいの形で軍手干してある
夜会服鏡の中に虹が出る
太陽の真下に晒す怠け癖
告白のつもりで来たが言いそびれ
現役の靴が脱げない無位無趣味

黒石市　相馬一花

前立腺肥大か細い雨が降る
沈黙の春が長びく倦怠期
不動産をがっちり背負うかたつむり
五十肩知らずに今日も畦作り
生真面目に飲んだ薬が仇となり

弘前市　斉藤劦

そして静かに花びらを抱く大地
この土が好きで野良着を離せない
ひょっこりと友の畑に出た古墳
農高のラガー雨雲押してV
孫を待つ夏へ朝顔すくすくと

弘前市　高瀬霜石

勝ち戦　傘の雫をきっている
あせらないことだゴールはまだ遠い
騙すより騙されろとは言うけれど
最終回ドラマはみんな幸福に
ひとりよりふたり喧嘩のある暮らし

弘前市　一戸ツネ

妻も知らぬ仮面の下のデスマスク
残雪の岩木を仰ぐ田植え唄
ゆっくりと貴女の春のしゃぼん玉
埋れ家に紙の墓標と住んでます
拝む掌に命の深さ噛みしめる

弘前市　佐治千加子

牡丹百花　明日の告白など要らぬ
森を出てたどる人間くさき道
広い肩霧のロンドンみんな過去
泡だつ海　彼岸の夫とわが十年
袱紗ひとつむらさきの思慕たたみこむ

弘前市　高橋岳水

親離れ子離れすでに季は初夏に
双六の上がり忘れた賽を振る
息止めて水琴を聞く寂を聞く
決意まだつかず羊の群にいる
後ずさり出来ぬ高処に来てしまう

弘前市　相馬銀波

裏表書かれ安堵の再生紙
スタンスも昔に戻るクラス会
長梅雨に稲と不安な詰将棋
独酌のピッチ満足度の遅速
ブランクをさせぬ浴衣にするねぶた

弘前市　小寺花峯

白無垢の言葉は涙に染めてある
新たなローンが始まる娘が嫁ぐ
嫁にやる言葉を他人から貰う
夢ならば覚めよ娘が遠ざかる
二十歳の娘の写真は俺のもの

弘前市　蒔苗果林

人影が寄ると明るくなる外灯
正直に馬鹿つけられて生き残り
とくとくと喜ぶ水と田に這入る
田水引く爺に雲雀の応援歌
子のシャツのお下がり貰禄ついた父

弘前市　櫻庭順三

為信の像早起きに囲まれる（津軽藩主為信公）
為信の像懸想の春に火照ってる
為信の麾扇岩木颪を睨んでる
為信の像赤紙で征ったまま
為信像址陽炎ばかり風ばかり

弘前市　今生恵子

不順天候カッコー聞いてほっとする
寂聴の源氏聴きたく夜を起き
新聞を四コマから読み憂さが晴れ
今朝炊いたご飯冷凍保存する
胃カメラの結果　判決聞くようで

十和田市　阿部　進

倖せを窓皆開けて招き入れ
飽食におぼれ狂った血糖値
世話好きな嫁に気づかう老いの倖
祝い事タンスの和服待ちこがれ
北の旅野づらを渡る風さわやか

青森県　西谷大吾

恐山おんなの祈りいつまでも
恐山だれを待つのか風ぐるま
古里を胸に温めるホームレス
世を拗ねる娘にも夕陽は美しい
じょっぱり太鼓たたいて燃える津軽衆

青森県　諏訪柳々

愚者は愚者なり仏の眼に脅え
はまなすの色に棘あり風寒し
ちひろ展お眼々ぱっちり澄んだ風
勲章の重さに耐える細い首
さみしい娘抱けば小さな夜叉になり

仙台市　川村映輝

誰彼と差別をしない消費税
老い二人否応もなく一番風呂
好きな物だけ食べている一人者
酒の在り処探さなくともすぐ解る
禁煙もできぬ首相じゃ頼れない

横浜市　菱田満秋

ご先祖へ初孫が顔たててくれ
タクシーを並ばせうまいラーメン屋
恋をしていますと言えぬ年がある
夏近くおんなはさらに軽くなる
活造り誰も脳死にこだわらぬ

富士宮市　渥美弧秀

命の灯ともす点滴刻流る
弔問へただ無念のみ黒リボン
かゆみ止め妻の背にぬる風呂上がり
風薫る楫の揺れて刻進む
傘寿の夏　詩と音楽が杖となる

静岡県　薗田獏沓

兵営の基本体操まだ続け
畦に孫歩かせ稲作学ばせる
みほとけに梅雨のともし火仄暗い
宿をたつ客振り返るほととぎす
物語の鬼棲みそうな入道雲

富山市　島　ひかる

燃えさかる夕日あしたへ落ちてゆく
礼知信　母のことばを繰り返す
香水が使わぬうちに減っている
許されて許して和む旅なかば
良薬の苦さを知った仲でいる

富山市　舟渡杏花

ひょっとこがおかめに酷いことを言う
劇的な変貌　古希の鏡掛け
アリバイがやっと繋がるねぎ刻む
古希に挑む香水の銘を撰る
丁々発止居酒屋の脳死論

羽咋市　三宅ろ亭

胸中の身構えさりげなくにして
頼り甲斐メッタに口にしない信
五風十雨　農は雲行きだけ信じ
歳とれば妻の意見を半ばきく
ある日ふと無口の男にことばかけ

京都市　大河未佐子

甘い素知って蛍はもとの水
恋の木にあなたを縛り蝶になる
引っ越して安心もらう両隣
このままでいいと何時まで言えるやら
ゆっくりと生きよう眠る場所も決め

京都府　稲葉冬葉

五月雨や糖尿食にあきてきた
同室のいびきたしかに女なり
真夜中を走る乗用車の行方
つましくも心に花をたやさない
竹槍を信じた戦忘れかけ

大阪市　稲本凡子

退院へひにち薬を貰てくる
メンバーに話上手と聞き上手
一滴も飲めぬ親娘でよく笑う
落ちるだけ落ちて人間らしくなり
栄養のバランス崩す誕生日

大阪市　河井庸佑

子を叱る母の思いが分りかけ
正論が通らぬ訳をやっと知る
我を張って退く潮時を見失う
夫婦とは時計の針もそれで良し
正論に固執動かぬのも若さ

大阪市　西出楓楽

わたしと私どこで折り合いつけようか
滝の音　地球激しく生きている
夫　義弟　母まで病んで梅雨に入る
話わかる男にさせているお金
コーヒーを混ぜて捜している答え

大阪市　井上白峰

幾たびか修羅のり越えて共白髪
返球をそらして愛を確かめる
疑いを抱かぬ女の手が温い
すれ違い駅の出口が多過ぎる
笑うのはおんな泣くのもまた女

大阪市　津守柳伸

リゾートの粋　海山に鳥の声
生きてこそ喜怒哀楽の失楽園
タコ焼が匂う幕間中座の灯
働ける幸しみじみと居職の灯
満足な旅胃ぐすりを飲んでいる

大阪市　本間満津子

指の傷くらしのリズム狂わせる
サボル日はサボルのもよし無駄も良し
知らんけど知らんでもええ流行語
情報魔そこまで報すことはない
やさしい香りしゃくやく命短うて

大阪市　大塚節子

兄嫁の母に似て来た電話口
目をみつめ栞先生の褒め上手
色白がこちら様似と実家の母
川底の石はみいんな丸うなり
よちよちの歩幅に合うた祖父の守り

大阪市　小糸昭子

忘れ物一足違いでバスが出る
波が来る次の波まで気が弛み
盆栽を愛で過ぎ枯れて行く辛さ
母猫は心の中まで毛繕い
のめり込むたちで何時でも役者馬鹿

大阪市　板東倫子

梅雨うれし今年も会えた花菖蒲
耳鳴りは猟奇な事件聞いてから
白髪と茶髪の時差は半世紀
コロッケと煮豆が好きで達者です
プライドが子宮で物を言わせない

大阪市　神夏磯典子

正体がうろうろしてる永田町
ミステリー又もめがねとかくれんぼ
愛犬と濃厚なキスしてる妻
目立たない彩がやっぱり私だな
豆ごはん五月の宵の華やかさ

大阪市　川端・一歩

充実の日々朝の一歩が弾んでる
一日のずぼら三日の汗で追いつけず
ミルトンの失楽園は均一本
読心術覚えてからの不眠症
嵯峨竹林歩けば心洗われる

大阪市　渡部さと美

その違い叡山高野展座像
反りかえる癖か逮捕の車中でも
ドーム見学イチロー座ったとガイド
日本男児孫五ヶ月のパスポート
赴任地へとくとく抱いて孫行かせ

匂いたち下木の誇り白い花
私の地図には多い休憩所
大地への第一歩なる小さい靴
頷いたとたん主人と使用人
親友と向こうも思ってくれている

大阪市　玉置英子

おかたいで通るお人と昼の酒
幸せの美人妻にも秘密あり
クラス会　小野小町も老眼鏡
写経する心洗われ無我となり
耳かくし洋髪似合う母でした

大阪市　奥田良子

自分より保険会社が先に死ぬ
ふるさとは干上がりましたむつごろう
クジの金　行く先聞けば総会屋
危機管理いつもトラブル避ける国
僕よりも妻が時々午前様

大阪市　川内叭笑

魚棲めばニュースになっている河川
父の日に手習いうどんご披露す
無礼講そぞろ本音が酔うてでる
酒三合あれば天下はすぐとれる
ハートフル総会屋向け愛社心

大阪市　小林周信

負けつづき何でやねんとテレビ消す
止り木へ一度止ってかえる人
老夫婦じんべいざめに会いにゆく
退職の花束あせて区切りつき
母をみる妹の声明るくて

大阪市　黒崎恭子

おしぼりの袋ポンポン賑やかに
梅雨あけの宣言なしに熱帯夜
絵日記を一日で書き夏終る
映画館シルバー券で通います
佗び住居二つの名前書いてある

大阪市　松永会美

酔い醒めの水おしぼりの比ではない
おしぼりの気の利く店と利かぬ店
おしぼりを出す間に客は帰りはる
省エネのペーパータオル佗びしかり
めぐり逢えぬいまだほんとの金貨には

大阪市　田中節子

もうすこし読みたかったな待ち合わせ
紀伊国屋活字離れはどこのこと
酔い心地申し分なき酒と酒器
ああ余生酔生夢死が夢だけど
新世紀乾杯酔いも宇宙規模

大阪市　福岡雅楓

堺市　板尾岳人

父に逢いたい母に逢いたい二年坂
男にも女にもある深い池
紫陽花に相談したいことがある
どうしても忘れられない母の胸
八月だ乳房を狙う水鉄砲

堺市　柿花紀美女

お互いの長所見つめて老いふたり
子は父になってやさしくしてくれる
飼主がのん気で犬も芸がない
子のためにふかぶか頭下げておく
葉桜の少し疲れて散歩道

堺市　中野欅子

老いの身のガラス細工と思うほど
栄養価脚光浴びて新茶の香
入浴剤家に居ながらお湯の旅
年重ねても恐いものあり紫外線
生花にはどうにも勝てぬ絵の具皿

堺市　近藤豊子

ランドセルの下敷きになり泣いている
ランドセルはなれて寄って蝶のよう
ランドセル二つにふえた子供部屋
五年生豊子の豊を習ってる
蓮池のつぼみへ恭しき夕日

堺市　山本半銭

紫の風に誘われ花と逝く（春香さんを悼む）
蓮の台でことば遊びをいま一度
ほんとうを抱き締めたまま暗転する
つぶやきが時に華やぐ詩ごころ
夏近しレタスの青と仲よしに

堺市　志田千代

酔うてほしくない男酔わせたい女
薩摩切子きりりと冷えた夏の酒
結局は育児書よりもおばあさん
象さんはいないが好きな動物園
喜怒哀楽血圧計はお見通し

堺市　宮本かりん

齢ばかり積み重ねてる風の中
処世術ごめんごめんが口をつく
いたわりの言葉も時に針となる
のんびり屋ラストスパート間に合わず
生真面目に問うてジョークで逃げられる

豊中市　安藤寿美子

空っぽの虫籠孫は遠くいる
花菖蒲絵にはならない人あるく
よってくる鳩のご期待にそえず
水すましがんばっている滝の上
ほんまですシーラカンスの鱗です

豊中市　江口明光

金銭のけじめ友情つづいてる
朝顔の一番咲きを孫に見せ
セールスの鞄自立の夢を詰め
靴下の穴が見ている共稼ぎ
早起きの習慣米寿の今日がある

豊中市　吉田あずき

三度豆もいだ緑に息がある
子の白髪一本われの刻憶う
山椒炊く賑やかだった日の香り
出ぬ答夕陽とともに無に返す
豆の青さ好きで今夜も豆ごはん

豊中市　滝北博史

ぼくの父も二度目の妻に弱かった
人生に欲のない人味がない
妻だから碁でも負けるが勝ちかしら
ライバルも低血圧という噂
敵を知らずおのれも知らず敗戦日

豊中市　湯浅馬洗

峰と江下れば変わる水墨画（長江・三峡下り）
神女峰裳裾を洗う瞿塘峡
孫権より怖い水位が張飛追う（張飛廟水没のため移動）
杖買えば生涯の杖あると言う
長江も宜昌過ぎれば渺となる

豊中市　井上直次

本流に乗り損なって淀んでる
嫁姑価値観違う川の幅
吊り橋を渡る男は川を見ず
意地捨ててお早うさんと言う朝餉
古希の坂力抜くすべ知って生き

豊中市　田中正坊

七十五ひとはひとつずつ老いる
生と死と始めがあれば終りあり
定期預金わたしの余命ふと思う
人の死はゆっくりでよし脳死論
お互いに生きようといい別れけり

箕面市　岩津ようじ

降圧剤　上司に見せるように飲む
困ります医学が進歩しすぎます
ストライクゾーンの狭い国に住む
人間の狼お金見て吠える
アメリカの倭の奴の国じゃあるまいに

池田市　金崎峰子

ケーキ　ハム　みな手づくりと書く時代
親友も体重だけは秘密にし
廃線の枕木をふみハイキング
きびしかった亡父思い出す目はやさし
遠い友電話で遠さ感じずに

池田市　岡本吉太郎

咄嗟には嘘はつけない夫といる
パーキンソン平均寿命越え楽し
一呼吸おけば何でもない事だ
力にはなれぬと知りつつ聞く辛さ
辻説法くり返しすれば当選す

池田市　藤井計光

爛漫の花を咲かせた娘が巣立ち
全身にアンテナ張って結果待つ
嘘という武器女には手放せぬ
何故青い　空の青さを尋ねる子
花のいのちせめて心がなごむまで

池田市　栗田久子

控え目に自分らしさをそっと出す
尊厳死私らしく生きるため
義歯に慣れ独活サクサクと白い音
灼熱の陽にヒマワリは背かない
突然の告知家族は貝になる

吹田市　瀬戸まさよ

過去憶う未来を思うしずかな日
子離れのできぬ親子の理想論
冗談の通じぬ主婦の正義感
髪ばかりいじる女の性きらい
品のある箸の作法にある明治

吹田市　山本希久子

人間が好き人ごみは嫌いなり
行くと言い行かぬと言うて母牟寿
夏日けだるしまさかのことも起らない
鬱捨てる箱が少うし浅過ぎる
細胞も脳も活き活き恋してる

吹田市　古川喜美子

横の木のさえずりを聞く寂しい木
垣間みる謹厳な師の二日酔い
行間を読めといわれて借りた本
胸襟をひらくたんびに風邪をひく
捨てんならんものが仰山ある夫婦

茨木市　堀良江

電話よりマメで手紙の好きな友
春夏秋冬　金婚式が不思議です
何十年振り蛇の目の傘の香もうすれ
母の顔目尻のしわが好きでした
間違いなしコーヒー好きは母ゆずり

茨木市　藤井正雄

読む本と覚える本に多寡のあり
扇子ばたばた納得させる負け将棋
灯台の近くに穴場ある夜釣り
三面鏡春三倍にして嫁ぐ
延長戦ゼロが順序を変える風呂

茨木市　島元ふみ

ひと回り肥えて母親らしくなり
貧しさは知らずすんなり伸びた足
大正の酔って愚痴には事欠かぬ
墨をすることも久しい文机
不満でも礼言って出る美粧院

高槻市　川島諷云児

人はみな心に故郷の誇り持つ
耳に栓したその日から出るゆとり
余生とや身の処し方が難しい
齢だろうふと考える安楽死
平成も九年昭和も遠くなる

高槻市　井上照子

ぬいぐるみ犬猫何か言わないか
義姉入院兄の優しさ嫉妬する
鬼のよな人間の住むいつの世も
ゆずられた席で感謝と哀れさと
出おくれたスタート今は走るのみ

高槻市　芦田静江

失楽園命の賛歌信じよう
思わざり雨の晴着を選っている
いくばくの命ピエロに徹し切る（兄見舞う）
マスカットメロンが美味という救い
お多福の手描き病室春にする

守口市　森川まさお

リュック一つひとりの時間が持てる旅
片田舎　商いすれど無口なり
かくれ里お茶飲む店が見付からぬ
船着場白いたんぽぽそっと咲く
行く先の白雲　瑞兆かもしれぬ

守口市　結城君子

一部始終見てた蜥蜴は交番へ行った
老眼鏡かけて子蜘蛛を逃しおり
蟻の列にまぎれ凄いいじめに会う
テレビの猫に見つめられたアレルギー
ムツゴロウが演説を始めた聞いてあげよ

寝屋川市　江口度

門限を守る息子がたよりない
交通麻痺　高速料を返さない
合併を取止めさせたタマゴッチ
風船がふくらんだ時ほめてやる
野仏の影を育てる草を刈る

寝屋川市　岸野あやめ

スーパーで鰺いっぴきを悪びれず
無事家へ着くまで旅の続きです
同窓会先生若く生徒老け
元気なの？とっても！と子を笑わせる
税務署に油断をしてはなりません

寝屋川市　北岡波留吉

卑怯者と嘲笑された復員日
忠魂碑拝んで孫に平和説く
生き恥をさらして戦友の墓まいり
読む度に反省してる従軍記
満州の広野で泣いた暗い青春

寝屋川市　平松かすみ

手もみした新茶が届く里の味
半分に分けて三時のところてん
公園のバラも一輪車も笑う
見物も涼しさ貰う観覧車
来る度に孫はおニューの靴を履き

寝屋川市　森茜

いたずらに如雨露かけられ花になる
木もれ日のなさけ野良犬立ち止まる
手ぐすねをひくより一歩踏んでみる
たのしみと少し迷惑さそわれる
ひと声をかけるに反芻する言葉

寝屋川市　籠島恵子

スロースローそれでも乗れぬわたしです
草むしり残しておこうへびいちご
土曜日の夕やけゆるりみなゆるり
心ころころ変換キーもわたくしも
携帯で埋めるこころの渇きかも

寝屋川市　冨山ルイ子

五年目の家庭菜園板につき
虚心坦懐に物事を受取れず
優しい眼科医を探しています
寝たきりになる予感する今朝の雨
散骨をすると言う娘にそれもよし

寝屋川市　酒井勇太朗

おむすびが好きな女房でグルメ党
野茂ニュース　調子良くても悪くても
留学をさせたばかりに離婚沙汰
幻想が出てきた母が僕のこと
混濁の世界さまよう母哀れ

枚方市　海老池洋

その日まで花野に酔うた胡蝶の死
川の水みる決心派放心派
美人だと言えば酔ってるなと言われ
宿題をしたかと待っている夜店
香車のように走った父の風の道

枚方市　二宮山久

初孫が欲しい娘と長電話
酒乱まで行かぬがお酒がほんま好き
五十坂下り始めた日の早さ
あじさいも又よし旅の無名寺
衣替えどなたも美人に見えてくる

枚方市　前　たもつ

よく来たと声かけられる紀州富士（久しぶりに帰省して）
廃校の温度計まだ今日刻み
過疎流れる川の蛍の灯が青い
浮世のことすっかり忘れ里の膳
人情の灯消すには惜しいぼくの里

東大阪市　森　下　愛　論

ビヤホール泡の心を何と解く
ビヤホール星もビールも影生まず
事あればままよへそくり飲んでまえ
風邪気味へお代わりをする卵酒
指先で蟻を押さえてどうしよう

東大阪市　安　永　暁　子

みそ作り塩分ひかえ子に送る
お点前を振る舞う人形のように
味けないお茶で踊りの幕があく
都をどり真ん中の子にわけがあり
もどり寒余所見ざんまいする祇園

東大阪市　指　宿　千枝子

近頃は自分の歳も忘れそう
満員車隣は本を読むゆとり
酔眼に映る私は美人らし
酔う一歩手前で友が邪魔をする
仏さまに酒でも買うて帰ります

松原市　玉　置　重　人

飼主もペットも独り者どうし
影法師お前の芯も細くなり
八十の男結びに欲がない
ものさしの目盛り息子と食い違い
ハンカチの白さの中に妻がいる

松原市　小　池　しげお

長いのと短いのとがあるお経
奥の間へ通ると槍が掛けてある
名案があり末席を動かない
人生劇場ぼくの演技の貧しさよ
お神酒ほど注がれ謀叛を考える

藤井寺市　吉　岡　美　房

地震地震豪雨豪雨の嫁の里
睡蓮の花が動いて亀が浮く
終戦を一緒に泣いた古鞄
老兵にあれど世相をくやしがり
痛いとこ数え合ってる同い齢

藤井寺市　福　元　みのる

四人姉妹母の話で締めくくる
勇み足警戒しすぎ遅れとる
初恋は先ず実らない十年後
恋そめてから相性の本も読み
老いらくにほんのり恋と言うクスリ

藤井寺市　高田美代子

心ならずも横に行くカニもわたしも
弱点がチクチク痛む梅雨の中
ひまわりのひとり芝居を見ていたり
脱稿の辺りにすこし火の匂い
貧乏でよかったなどと言えますか

藤井寺市　鴨谷瑠美子

ほろ酔うて移り香もらう仲で良い
チョコレート革命の気にかかる本
打たれたい滝を男になぞらえる
我が茶碗　掟破ったように割れ
早鐘は抱き合う前に鳴っている

羽曳野市　吉川寿美

天敵に天敵　花も実もつけて
父の樹に耳あて亡父の声をきく
タイムカードさあ綱引きが始まるぞ
片方の乳房が病夫恋う人を恋う
どの窓に置いても似合う花の鉢

羽曳野市　田中透太

琴線に触れたく回り道をする
どっこいしょ右も左も影法師
一枚のカードの裏に運不運
歯ごたえのあるものが好き人間も
八起き目に挑む美学を持っている

羽曳野市　福田満州

溜飲がさがるねアンチ巨人たち
五時からは行方不明になりたがり
いたずらに朝寝ができるのも若さ
プリクラの交換たのし駅の椅子
プリクラに夫誘って吹き出され

八尾市　宮西弥生

ヒマワリが大きな大きな夏にする
まだやる気あるらしい目覚しのネジ
ライバルに負けたなと思う午後のお茶
ぼちぼちとゆくライバルと同じ年齢
腹式呼吸今日より明日へある自分

八尾市　宮崎シマ子

ダイヤ婚もろたダイヤをもてあまし
老醜を幾年さらし生きている
雷へスカッと晴れたストレスよ
梅雨もまたよし香をたきお茶を点て
金持ちになる皮算用の宝くじ

八尾市　内海幸生

不器用で真っ直ぐ歩く太い道
花つけぬ紫陽花もよし水をやり
天からの水を貰った花の彩
足踏みをしても遮断機自若たり
蝶になるまえをしっかり孫に見せ

八尾市　高橋夕花

倖せな女にあった月の暈
今日一日人形になれば事がすむ
お別れして甘夏コロリ食べ終る
テレビ消しひとりの夜はクラシック
咲く花も散りゆく花も世の情け

八尾市　吉村一風

新緑をたっぷり子らとピクニック
正直言うてまだライバルに負けている
とじ込めた言葉出たがる喉仏
愛されたい一心嘘もころび出る
茶柱が立って戸惑う通夜の席

八尾市　生嶋ますみ

話すことなくテレビが喋る老い二人
少女たちの笑い声まで流行語
医者へ行く決心つかずガラス拭く
地下街を方位感なく後戻り
スカートの丈を鏡の前で決め

岸和田市　高須賀金太

友達は毎日走ってはいるが
梅熟す失敗談を聞きながら
定年後タクシー乗ったことがない
ストレスが溜まって忙しない煙草
父の日は亡父と背比べをしよう

岸和田市　古野ひで

痩せたこと自慢のように言うて病み
生き甲斐の夢が支える八十路坂
梅雨入りへ心洗うて支度する
諦観を美学としてる老いの坂
窓叩く風は亡母の化身かも

岸和田市　岩佐ダン吉

一匹の蟻の命もあったかい
ゼロ四つあれば三度は飲める店
こみ上げる怒りはムツゴロウのこと
細い糸たぐり残留孤児がくる
光る目の男舞台の袖にいる

岸和田市　原さよ子

寄ればすぐ意見の揃ういい仲間
苗植えた夜にほどよい雨の音
梅雨近く農道俄かに活気づく
気の重い予定も書いてある手帳
来賓に近い席しか空いていず

岸和田市　芳地狸村

大きさに度肝抜かれたワイン樽（ハイデルベルグ）
夢を追う白亜の城が美しい（ノイシュヴァンシュタイン城）
お天気が晴雪雨と早変り
熊の旗振ってヤングのサッカー熱（ベルン）
人気呼ぶ人形仕掛けの時計台（マルクト広場）

岸和田市　田中文時

週刊誌人間不信煽り立て
絵にかいた餅で終った定退後
喚問で白黒付けた事が無い
若者が溢れる小樽小気味よし（北海道旅行　二句）
摩周湖の霧が一瞬晴れた幸

貝塚市　池田寿美子

震災を乗越え出逢う青葉風
宝塚ルーツを探る花の道
夜に咲く月下美人の謎を問う
メトロノームのように竹林揺れている
名曲の色褪せぬ音雨の午後

富田林市　片岡智恵子

なまぬるい巣箱を今も恋しがる
不信感あれから続く隙間風
にが手な人に逢いそうちょっと回り道
そよ風を入れてふたりのほどのよさ
古い手帳燃やして消えていった人

富田林市　松本今日子

楽しみをひそかに抱いて咳払い
無記名の投票だから棄権する
みられたくない顔もあり泰山木
五月晴れ墨を濃くして写経する
あとはもう散るを待つだけ花ぼたん

河内長野市　井上喜酔

温厚なだけにストレス人一倍
心ぶらへ新しい地図東西線
あの時に余裕があれば道選べ
擦り減った命で無茶はしたくない
背伸びして夢を見るより願いごと

和泉市　西岡洛酔

昨日 今日 明日へリズムテンポ良く
ぐい呑みに生きる我が世を謳歌する
天職に頼る生涯悔いのなく
おふくろの味を繋いで妻も老い
シナリオの無い一日が疎く過ぎ

和泉市　岡井やすお

報道が怖さ増幅する事件
人の輪を断ち切ってゆく核家族
良心も時と所により動く
細胞が減った分だけ皺がふえ
敵陣に入れば歩だって金に成る

大阪府　籾山隆盛

八月の暑気の最中に産みし亡母
鍬形の生きてる相場五万円
聖戦か名は商戦の殴り込み
一皮のむけた説には艶がでる
対局になると七目先見えず

大阪府　八十田　洞庵

闘病の鏡に映す衣替え
ある時は鼻持ちならぬその器量
茶だちした母には深いわけがある
背を押す風が吹き矢を持ってくる
子育てに母の時計は止まらない

神戸市　中村ゆきを

校則だ茶髪に性善説とらず
予科練も陸士の友も杖で来て
なんでなんでここでも女輪をつくり
タマゴッチ女子高生の安定剤
賑やかな通夜遺影も笑ろている

神戸市　山口美穂

足もとで愛犬快い寝息
老母は無言　四姉妹がよく喋る
愚痴も笑いもいいな生きていることは
今日も無事少しぬるめの仕舞風呂
明日千切る胡瓜へ水をたっぷりと

尼崎市　春城武庫坊

昭和史の闇まだとけず敗戦日
正論が光り出すまでじっと待つ
大器晩成そんな気配がまだ見えぬ
視力減退まわり奇麗に見えてくる
モラル壊滅老いの前途は闇の中

尼崎市　春城年代

丸腰でインドに遊ぶ孫の一人
娘を持って羨まれてるクラス会
気まぐれな人に出会ったばっかりに
あと少し共に生きたい寝息聞く
花作るにも相性があるようで

尼崎市　長浜澄子

忘れたいことありアイロンに夢中
静止画像あれこれ思うことばかり
想い出が愛しシャクヤク香る道
友情のしみた水茄子のどを越す
神様のイケズひとりを連れて逝き

西宮市　門谷たず子

負けた日も同じ陽の射す窓がある
焦点を絞ると亡母の貌になる
生き下手の流れに添えぬ葦でいる
冷や奴噂ばなしは聞きあきた
鐘の音遠く近くに住むほとけ

西宮市　西口いわる

雑音の中には花の私語もある
あんなものなんで好きかと酒のこと
とは言うてみんな使えば困る金
一行詩わたしの中の小宇宙
二日月寄らば切るぞと言う如し

西宮市　秋元てる

薄日さすその日を待って母子草
雑巾の絞り方にも一家言
階段までは颯爽と来た足である
口は出さぬと言うが話は聞きたがる
あの世への旅の仕度はシンプルに

西宮市　山本義子

峠みち笹百合に会いひざが癒え
ローカル駅　紫陽花の季は雨も良し
着ることのない着物また梅雨をこす
輪の中はいつも温いと限らない
ワープロにふやけて来たかペンだこよ

西宮市　菊池トミヱ

幸うすき亡母の形見の夏衣
オーケーの返事がほしく前に居る
背の荷物一つおろせば歩きよい
修理する亡姉の形見の古時計
水墨画ふる里の山しぐれてる

西宮市　牧渕富喜子

同じ速度で種を出してるさくらん坊
本日晴天急に小まめになっている
階段を上って気付く負けいくさ
家政婦と間違えている節がある
活き活きとせねば花まで枯れてくる

西宮市　奥田みつ子

病院への道も鶯からみどり
若葉の候　ペンが進まぬ見舞状
昨日ばかり追えばカラスに笑われる
字をさがす辞書と遊んだ小半日
本ばかり相手に淋しくはないか

伊丹市　小熊江美

手続きが面倒になり示談にす
偶然のような顔して駅で待つ
子にかけた夢は無情に砕かれる
言い訳はしないみじめになるばかり
母さんが居るから故郷に帰りたい

宝塚市　黒台伊佐武

春落葉窓際族も其処に在り
観光のツアーは総て姥ざかり
花若葉　波麗らかに三重奏
運不運五分と五分なら上出来よ
気が付けばあれこれみんな下り坂

宝塚市　上田佳秋

試行錯誤ばかりが続き雨季となる
親切ごっこ今日も虚しく過ぎてゆく
乾杯を済ませ主流派から抜ける
病床の友から馬券頼まれる
甘い水探しあぐねて舞う蛍

禁煙の注意いらいらして守る
休肝日友の誘いは断われぬ
友情の証ポケベル持ち歩き
電話口娘は出さぬ家風なり
おふくろは味の達人目分量

川西市　氏林洋敏

顔を出すだけで果した老いの義理
婆ちゃんと寝てませた子に育てられ
彼岸まで独りぼっちの杖をつく
ご先祖の田んぼに今日も鍬を立て
叱られることを知ってる影法師

相生市　中塚礎石

満天に夢描いてた少年期
歩き初め祖父母の笑い皺がふえ
好きですと確か聞こえた糸電話
長生きを願うが痛み見ておれず
あせるほど目のない石がよく伸びる

加古川市　吐田公一

野菜工場　洗わず食べるなっぱ出来
干潟うめて休耕田をまたつくり
角切りのすみし雄鹿の孤独なり
酒まわり八十年を語り出し
待つだけにこんな沢山いるパワー

奈良市　天正千梢

イルカショー中に似たよな落ちこぼれ（白浜アドベンチャーワールド　二句）
寝転んでいてもやっぱり虎が好き
自己紹介爪を隠している野心
クラス会入歯同士が弾んでる
潮干狩り孫の味するお味噌汁

奈良市　米田恭昌

奈良へ住みひとり歩きがまだ不安
新築の家並を花でかざり立て
母の日の花の命は短くて
本棚の隅に亡夫の古日記
あの世からがみがみ怒る夫の声

奈良市　吉田笑女

母逝き妻ゆきこの家に壁の多いこと
亡妻に倣って折込み見ています
その声が聞きたいだけの電話する
テロップが直ちに消える不況かな
春らんまん葩の哀れやエピローグ

生駒市　麻生アート

梅雨空に思案ひきずる日が続く
わだかまり捨てれば心軽くなる
やがて行く浄土と地獄地図にない
血判に血の濃い薄い違いあり
自分が自分を守る鎧着て

生駒市　北山悟郎

大和高田市　岸本豊平次

病名を隠せぬほどに転移して
叔父に次ぎ嫂まで逝った五月寒
万歩計つけた散歩が歩き足し
大方は昨日のテレビで見た朝刊
借景に金剛 葛城 二上山

大和郡山市　坊農柳弘

梅雨明けの太陽とっても嬉しそう
夏逃れ素麺流し貴船にて
自己洗脳奉納したり経百巻
手術してよくなる頭ならしょうか
同行二人札所巡りのフルムーン

大和郡山市　榊原彗心

音痴でも支払うべきか著作権
メニューより灰皿先にたのみます
夏がくる平和に感謝甲子園
ヒゲ残り髪染めていることがばれ
夕立を天気予報も当てかねる

奈良県　長谷川春蘭

誰よりも早く履きたい白い靴
しみじみと昔は遠し菖蒲の湯
若葉窓あとがきよりの読みはじめ
ソフトクリーム舐めては較べ姉弟
用もなく巷の初夏にまぎれけり

和歌山市　堀端三男

聞かずとも成否がわかるいい笑顔
メンバーに油断ならないのがひとり
病名を並べて町の役を逃げ
いたずらの機転が効いて好かれてる
政教分離英霊宙に浮く訴訟

和歌山市　桜井千秀

留守電に身に覚えないメッセージ
茫々五十有余年月は煌々
洩らされた秘密重たく抱いている
こともなげに全身麻酔告げる女医
豊富な話題武器にセールス殴り込み

和歌山市　福本英子

友情の厚さへたまる肩の凝り
蚊の音にお開きになる立ち話
どう水を向けても無視をされている
婦唱夫随娘らの世帯も板につく
タコ焼きの美味しい街へ途中下車

和歌山市　木本朱夏

むらさきの闇と流れてきた蛍
頬杖をついて桜桃忌の茶房
前世から腓返りをひきずって
家系図の隅でちいさく咲いている
メビウスの輪の中にいる逃亡者

和歌山市　福井桂香

白い帆が走るビールの泡の中
オムライス私を抱いてくれますか
失楽園みて「うなぎ」観て考える
スキャットと風が味方をしてくれる
ジェット機がとぶ満月の下あたり

和歌山市　宮口克子

狂い咲きええやんけとは他人様
束の間の夢か魅と魔のタッチの差
娘に贈る女としての心掛け
うたかたの恋でもすがりつきたい夜
出る杭の一つどんなに打たれよと

和歌山市　青枝鉄治

下積みのキャリアが嗤う机上論
権力の波に逆らうペンの意地
抜擢の歓び知らぬ雑魚の群
脱税のスリル味わいたい無冠
使途不明そんな余裕のない家計

和歌山市　山口三千子

通院から帰れば友の訃報待つ
永久の別れ友見送りて梅雨の傘
生きていく虚しさ亡母に会いに行く
思い遣る心をもたぬキリギリス
ロンドン塔　子に連れられた頃が華

和歌山市　堀畑靖子

かまきりの子をのせ揺れている木の葉
野放図な恋に走れぬ台所
丹波篠山ひと目で好きになった町
暮しからいつか消えてた浪花節
君を待つ至福を刻む花時計

和歌山市　岩本美智子

鏡の奥でみんなウインクしてくれる
歪む視界心が丸くないからか
臓器移植　脳死やっぱりわたし厭
目隠しごっこ二度童子にはまだ早い
大空の自由がほしい鳶一羽

和歌山市　古久保和子

訝し気に鳩に見られているベンチ
大部屋に病人のプロ一人居る
お手製の袋いっぱい診察券
街に住み擬態上手になってくる
鮎寿司と蛍で迎えられた宿

和歌山市　榎原公子

捨てたもの何かと問えば先ず若さ
オリジナル人生それでいて悔み
飛んで跳ね泣いて溢れるちひろの絵
食卓で遊ぶ義理買いのチケット
扶養義務　親インプットされてない

海南市　三宅保州

院長の回診というセレモニー
辞引よ辞引　至極尤もすぎないか
草を引くときは広いと思う庭
なれそめは通天閣のたこやき屋
お天気の話をせぬとはじまらぬ

岡山市　井上柳五郎

ジャンケンで決めた町議は旧い友
開発に待ったをかける竹のヘラ
豊作に梅酒梅漬け妻多忙
歯が抜けて唇への字頑固そう
青春をみ国捧げた遠い日よ

倉敷市　田辺灸六

肩凝りを仕事のせいにして昼寝
どのツボを押したらそんな嘘が出る
欺されぬように自分の灸をすえ
人はみな善人だよな葱坊主
七十になっても人が見抜かれぬ

倉敷市　小野克枝

空白の刻を消し去る同期会
感激を転がしながら歩く旅
短篇で終った愛の乱気流
酒がらみの一言男の本音です
三人の孫に三つの部屋が出来

岡山県　二宗吟平

日の目見た句碑が恥ずかしそうにおる
花持たす度量が今に備わらず
わが町の自慢　天領　名代官
今酔いが回ってきたと桜んぼ
昨日かと思う思い出一周忌

岡山県　江口有一朗

老いだとて容赦はしない向かい風
悲喜載せて地球は止まること知らず
空しさに徹し切れずにいる凡夫
落ち着きと安らぎブルーの色が好き
僕が好きだから母ちゃん怖い顔

岡山県　小林妻子

日本語の言葉遊びがくしゃみする
趣味ですがルールはルール五七五
破調ならあちらでどうぞお楽しみ
ご自分の都合でルール決めないで
前向きもいいが後ろも振り返る

岡山県　矢内寿恵子

人間を忘れる街に土がない
それぞれに残像追うて四姉妹
老姉妹生きる話と死の話
相剋の果ては虚しい風の彩
やさしさに触れると傷が深くなる

岡山県　山本玉恵

利口にはなっても所詮猿芝居
丸腰の男になって軽い飢え
まっ当に生きて運から見放され
鬼の面外すとどっと来る眠気
思い違いのまんまで笑顔してしまう

岡山県　福原悦子

階段の途中でネジを巻く余生
奔放に泳ぎ方向見失う
途中から聞き役となりお茶を替え
親切な顔で悪知恵抱いている
首を振る無口の中にある決意

岡山県　大石あすなろ

一枚の紙の重さを知る誓い
恋模様いたずら好きな糸で縫う
ちょいちょいは妻にも起きる乱がある
模索の森が今日もコトリと暮れて行く
傘たたむ少し未練が雫する

呉市　槇田英詩

孫誕生頭でっかちだと思う
仁王さん見れば帰ろと泣く子かな
老いて候近頃妻も愚痴らない
働き者の妻をドラマが離さない
D51を組立てた俺生き残る

竹原市　小島蘭幸

恋をしても大きな声で笑うなり
みんないるので散髪をしてきます
忘れたことはないおふくろの誕生日
私の掌の中の蛍よ妻よ子よ
お通夜から帰ると電話鳴っている

竹原市　森井菁居

失楽園読破虚しさだけ残り
経常利益出して兜の緒がゆるむ
余生坂　上手もないが嘘もない
金あらば援助交際してみたし
齢やなあ呑み友達も酒を断ち

竹原市　時広一路

水が流れるなんて知らない金魚鉢
週二日お隣さんの遅い朝
話また元に戻ってお茶を注ぐ
欲のない強さが背中押してくれ
漢字仮名やっぱり縦がよく似合う

竹原市　岩本笑子

見て見て見て長女も次女も夏気分
UFOに逢えそうホタル囲まれる
ダムできるまでの命と月見草
夫唱婦随心はいつもクリスタル
夾竹桃よ祈りの夏が来たんだよ

広島県　藤解静風

前立腺の話題になって会おわる
句三昧で済む色艶の顔でない
合掌を解けば人間くさい指
百点に近い夫と思っている
言うだけは言うてしっかり蓋をする

広島県　森川抜智

上限を越えた酒量も気にならず
元就のゆかりの土地にわれは住み
元就の教訓わが家の教訓に
飲みすぎた孫の合格祝い酒
頭髪の白よし黒よし無いもよし

宇部市　平田実男

掛け算のように光陰矢の如し
コンビニへやはり走った妻の留守
瞳孔を全開孫の初舞台
転ぶたび何か摑んだ立志伝
過疎は過疎なりに政官財癒着

美祢市　安平次弘道

一枚の白紙へNOとだけ記す
責任をとると大きく出たけれど
神の目が怖いやっぱり善人だ
サクランボが熟れると女かしましい
理想論やめれば縁談遠ざかり

下関市　石川侃流洞

物言えば入歯が落ちるから黙る
負けぐせのパチンコだけどやめられぬ
父の日のバラよりお酒老いた父
蟠りとけて篤の音を聞く
陽が落ちるととても淋しい休肝日

鳥取市　両川洋々

ライバルへ僕の刃こぼれなど見せぬ
クローン人間　神よお許しなされるか
浅い祈りへ神が耳栓しています
俺は俺過去を振り向きなどしない
温暖化地球もきっと不安でしょ

鳥取市　武田帆雀

大器晩成雫も細く長くなる
隣部屋妻のクシャミが面白い
紙屑をたくさん配る村興し
ある人は女傑と言っている悪女
可愛い子憎い子しない菊の水

鳥取市　西村黙光

幼児のはち切れそうな好奇心
稚孫抱き風爽やかに走馬灯
白髪と白眉が競う記憶力
時々は妻にお世辞を言ってみる
お世辞から二日酔いだとすぐばれる

鳥取市　美田旋風

ミニの娘へ目移りさせる初夏の風
成績の良い子がお世辞には弱い
平成のドラマ女を強くする
陽を当てて機嫌の悪い花がある
美しい花をナメクジなめ回す

鳥取市　春木圭一郎

中央の米寿の母がでかく見え
一族で米寿の母と船遊び
今も母ばかな私を心配す
孟母にも匹敵母の手が荒れて
ぼけて来た働きづめの母哀し

鳥取市　杉本孝男

子育ての失敗談を子に話す
災害があれば儲かる人もいる
時々は逢うがお歳はまだ聴けぬ
栄転をすると親から遠ざかり
作り芹何故か香りがいまひとつ

鳥取市　植田一京

古稀近い身も中年の気で遊ぶ
痛いこと言われてからの絆です
見てならぬものよく見える不思議かな
品行方正すこうし響くものに欠け
逃げこんだ傘も雨もりしはじめる

鳥取市　倉益一瑤

ひとひらのさくらが心から逃げぬ
無器用な芸を一生くりかえす
たくあんをかじるジェラシーかも知れぬ
正しいと思いこんでるから怖い
白鷺を描いて鋭い目に気付き

鳥取市　小谷美ッ千

大きな大きな貴男のシャツを着て眠る
街は他人で恋の岬に逢いにゆく
せつなさの花をこぼして逢いにゆく
大切な時間を温めながら行く
前を行く男の背なかとてもすき

鳥取市　坂田和歌子

やじろべえ病んだ夫が持ちかえる
明智にも秀吉にもなろう私
難破船美人が乗っていたらしい
追伸とすこし乱れた文字になる
花びらが散ると私も不整脈

倉吉市　野中御前

わたくしのクローンがいるよ三面鏡
血の絆ときには鬼も仏様
六月の雨に濡れてる七変化
玉葱を刻んだ涙にしておこう
ドア閉める音にストレスありったけ

倉吉市　野口節子

たった一言ごめんと言えば気が晴れる
イヤリング日差しを受けてよくしゃべる
殻付けたまんまで親になっている
忘れ上手にとぼけ上手の嫁姑
とどのつまりはこぢんまりした壺の中

倉吉市　松本よしえ

大輪の牡丹くずれてごみの中
クローン猿まんまるな眼で淋しそう
ファミコンを取り上げられた児の居場所
大様に育って覇気が今ひとつ
河川敷玉遊びする喜寿傘寿

倉吉市　山本玲子

乗りがいい話上手と聞き上手
不器用なパパ縦結びしかできぬ
福耳はイミテーションに気付かせぬ
衿足に風が落した木の雫
ドジな蛙柳の枝に恋をした

米子市　木村富美子

目を上げて空に助けを呼んでいる
敵側が正しいようで迷い出す
向こう側の亡父が護っている気配
覆水はかえらず妻はまた戻る
母さんの子供で後悔してないか

米子市　林荒介

窓枠に閉じ込められている故郷
眼裏の雪に埋もれゆく生家
屑籠に溜るてにをはの残高
円高円安に実感の無いくらし
落暉いまわたしを映すシルエット

米子市　林瑞枝

笹百合のひらく男の指の先
ひとつずつ飾る人形の目鼻立ち
にんげん公害包んでくれる深い森
湧き水に百年前を語らせる
花道でも一度にんげんを泳ぐ

米子市　青戸田鶴

幾重にも大内山の深き森
水気絶ち豊明殿につらなって
お言葉を賜ったのは五分間
一筋に道を歩いて今日の父
視力失う友の哀しみ胸去らぬ

米子市　政岡日枝子

馬鹿正直な誓いに一生縛られる
彷徨うているが誓いは守ってる
手のひらの窪みに意地が溜まってる
台所の意地糠味噌の床にある
トラブルの種子は引き出しから出さぬ

米子市　茂理高代

何もいらぬ命の糸を探したい
生き延びるための種なら蒔いてやる
さとられぬように廊下で涙ふく
目の悪さかくして頬をなでてやる
燃えて生き燃えて落ちてく寒椿

米子市　中井ゆき

かもめ一羽青く染めたい空と海
シャガールの窓に映ったのはどなた
この首が私を語る生き証人
目頭を抑える振りを猿もした
ファックスで子供の便りとんで来る

米子市　鷲見正子

とうちゃんをかもめが呼びに来て困る
肩で風切って元気と言うはがき
条件が揃えば僕も浮気する
娘の服を着ても十九にもどれない
八キロも太ってしまうふしあわせ

鳥取県　新家完司

内も外も見飽きた朝の窓開ける
子へ便りハガキいちまい埋まらない
結果論みんな正しいことを言う
ジャイアンツがまた負けている旨い酒
失敗は他人のせいにして眠る

鳥取県　幸家単車

共稼ぎ住いは猫が留守まもる
そのままで良いさ明日はまだ見えぬ
弱い者同士組織の中にいる
そのままの貴男が欲しいだけのこと
風向きが変ると味方敵になり

鳥取県　乾喜与志

晩酌がうまく寝たきりには遠し
デイサービス老いを一日若返り
老いの肩に見合う荷ばかり担ぐなり
杖は未だ背骨正しくして歩く
ご先祖と共にいただく早生の飯

鳥取県　さえきやえ

どじょうふないてもとる子ら居ない過疎
くわがたが無口な孫をしゃべらせる
肩のものみな取り去って軽い夏
返らぬを覚悟で貸したお金です
どんじりに控えてきょうも恙なし

鳥取県　上田俊路

いずれ無に還るいのちだ欲張らぬ
ひとりだけわかってくれる友がいる
初印象よすぎ期待が重くなる
震度5に積木細工がゆらぎだす
玉砕のドラマ哀しい慰霊塔

鳥取県　鈴木公弘

子育ての傷はいとわぬ腕まくり
半音が埋まればとてもよい夫婦
声変わり息子よ焦ることはない
正論の壁にまとわりつくかずら
火あぶりの上司肴に飲んでいる

鳥取県　谷口次男

頂上はまだその上と登る意地
環境にやさしい顔のおばあさん
パソコンの玩具になったおじん族
天国に眠りたいからボランティア
ニンゲンが安眠できぬ星にした

鳥取県　西原艶子

宝石にまさる小鳥を飼っている
ミニばらの朱ほどの愛と憎しみと
居間いつも居酒屋にして夫がいる
冷やっこ疲れた舌へ心地よい
肉じゃがを煮て休日が暮れていく

鳥取県　土橋螢

春蘭と万年青は土佐の土にかえ
人生の夕凪というお茶の味
薫風に悪が息切れしてしまう
夕焼けに向かって泳ぐ男いっぴき
ネクタイを緩めて汗をかいている

鳥取県　土橋はるお

せっかくの金だ一票だけあげる
婆ちゃんの腰も胡瓜も曲っている
十円玉がごつい啖呵を切っている
先生を今なら殴り返したい
こぢんまり畳一畳ありゃ寝れる

鳥取県　岩崎みさ江

二階から下りる答が出たようだ
振り返る顔のほころび繕って
貧しかった頃の寒さとあたたかさ
負の側に味方したがるＤＮＡ
うかうかと父みまかりし齢越え

鳥取県　林露杖

朝の香に夕べの匂い散歩道
好き嫌い言って居られぬ地方選
地方選妻が買収されそうだ
会者定離忽然として友は逝き
尾根に立ち「撃てッ」と号令かけてみる

鳥取県　乾隆風

洗面所にそうっと入れ歯とりに行く
悪友のさそう受話器をとる女房
尼さんも鮎の塩やき召しあがる
辛酸をなめた女のやさしい手
旅の汽笛がうしろから追いかける

喉元を過ぎても熱い消費税
カンニングしながら心経唱和する
ばあちゃんはゲーム音痴の落ちこぼれ
割り合わぬコメも子の為孫のため
午前六時有線放送寺の鐘

鳥取県　羽津川　公乃

標札をかけて新居の木の匂い
母と娘の会話キッチンから弾む
田植機があっと言う間にする青田
友情は嬉し手ぶらで尋ね来る
生きている幸せ孫と寝る日課

鳥取県　石尾　かつ乃

書くことの溢れる今日の日記帳
ごみを出す手を思い出が鈍らせる
いい腕を眠らせている機械彫り
濡れ衣も晴れて万緑浴びている
母上は僕の悪友気に召さず

鳥取県　石谷　美恵子

崖上で手が届かない白百合よ
子にかけた夢を再び孫にかけ
崖ぶちの松に満月ひっかかり
本棚に栞はさんだままの亡夫
気の弱い男背中に龍を彫る

鳥取県　太田　幸枝

将棋なら五　六手先が読めるのに
マルクスは今でも尊敬する一人
頑固一徹晩酌に冷や奴
三百六十五日毎日違う白
日々楽しく筆で摘み取る四季の花

松江市　柳楽　鶴丸

浮動票狙う握手の冷たくて
飽食の果てややこしいとこを病む
お世辞とは気付かぬ事にしてあげる
監視付き携帯電話持たしとく
町内にも愉快犯という総会屋

松江市　舟木　与根一

海図にはないメルヘンへ迷い舟
海猫へ今年も来たかと句碑が笑む
ベレー帽かぶり日曜芸術家
晩酌の為に動いている軍手
病葉は流さぬだろう虹の川

出雲市　尼　れいじ

物干しのござ満天の星を見せ
悲しみをかなでて蟬は夏を逝く
終電へ手負いの鬼がどっと寄せ
物言わぬ妻が手にしている爆弾
どの子にも愛の浮き輪を投げる母

出雲市　板垣　夢酔

出雲市　園山多賀子

一言が無駄でなかった茄子の花
感情線浅い女は御し易い
てふてふと書けば踊っている蝶々
苺の朱夫婦の綾とり未だ続く
健康で長生き誤算と思わない

出雲市　吉岡きみえ

あじさい寺日傘くるくるよく似合う
わたしらし長い助走をつづけてる
まるぼちゃの顔に老斑ばかり増え
ゆっくりとロマン求めるかたつむり
万華鏡あの世の先が見えてくる

出雲市　岸桂子

ヒントだけ与えて若い樹を伸ばす
灯を消して今日一日の軽いこと
熟年のまだ夢を追うネックレス
時として白寿の母にもらう知恵
美しい花のいのちは惜しまれる

出雲市　久谷まこと

のこり火は風になびいて消えもせず
先ばしる事から肩に荷がかかる
七転び八起き不幸を踏み台に
生かされているのも忘れ愚痴しきり
締め直す帯から決意新たにし

出雲市　竹治ちかし

ユーターン人間らしくなる緑
母の香りなくして海が病んでいる
善人の顔で迎える御来光
芸をする猿は早死にかも知れぬ
爆弾を地中に埋めて仲直り

出雲市　小玉満江

春落葉踏んで港の見える岡
ぶな林一本道でホーホケキョ
総入歯腕を鳴らした過去がある
手をつけて十和田の湖は水青く
奥入瀬の流れは早し初夏の風

出雲市　石倉芙佐子

流れ星たまたま御祈りしてた刻
なだれ込むように縋った友の胸
ゆうかりの木から聞こえる御先祖様
母さんと呼ぶ子が一人増えた幸
水嵩が増して女は渡れない

島根県　西村早苗

かくて朝がいつもの席にパン牛乳
聞き捨てにならぬみじめな私ごと
瞳の中に亡妻かも星が離れない
下着洗う男が洗う独りです
気の弱い男が風におどろいて

島根県　小砂白汀

生きのびて近乱遠視となりにけり
子と呑めば酒も魚もうまいこと
欲みんな捨ててしまった昼の月
どうしても勝てぬ相手だ戦わぬ
たぐれども底に底あり総会屋

島根県　堀江正朗

負けん気で生きて戦盲六十年
夢に夢積んで崩して闇に生き
摘み食い指の先から染みる味
頼られて力んで見せる八十五
お地蔵さんに挨拶をする別れ道

島根県　堀江芳子

これからが二人三脚だと主治医
金婚とか苦労は夢に似て笑う
おばあさん他人が呼ぶとおぞけ立つ
簞笥あけ母と娘の内緒ごと
はは母と書いても尽きぬ母の忌よ

島根県　松本文子

朝のビール一人旅なら許される
ゆっくりと空見る山見る一人旅
ひとが病む葉桜の下空仰ぐ
地球の裏から私宛に来る手紙
亡夫に叱られ今は息子に叱られる

島根県　伊藤寿美

初めての年金老夫に花を買い
旅で買う翡翠を老夫が選ってくれ
梅雨晴間紫陽花寺の夏帽子
古里の墓に忘れてきた帽子
人だかりわたしも後ろから覗く

島根県　森茂美

日本の戦時も斯くや避難民
花一輪痛さまぎらす歯科の窓
糠漬けの匂いの中に老妻が居る
手花火に祖父も割りこむ夏祭り
喜寿傘寿だんだん先が見えてきた

香川県　木村あきら

暖流を辿ると母の海がある
只管に海を目指している小川
ライバルに俺のファイトは伏せて置く
酸欠の街から抜けて丘に佇つ
句碑一つ建って我が家に彩を添え

香川県　工藤吟笑

ズブ濡れで帰れば家の灯がぬくい
タクト振る重み家族のハーモニー
一家繁栄陰で支えている笑顔
海千山千ハルバル越えて九十年
一面にコスモス揺れる休耕田

香川県　川崎ひかり

黒幕が動くと金の匂いする
涙かれ後はしたたる血のしずく
規約書が小さくちさく書いてある
ひょっとしてすれ違ったは福の神
今年また桜蛍と見れた幸

香川県　池内かおり

アイスクリン手に海亀と甲羅干し
妹といえど切り出しにくい事
カルチャーに頑固とぐうたら居て楽し
父の日は柿の消毒する日なり
ほとけ様用に夏菊寒の菊

松山市　丹下美津子

祝電に内助の功も書き添える
失言を取りなす友のおもいやり
降って湧いたようなお金のいる電話
孫連れてゆっくり雨の日曜日
順番は何時ごろでしょうエンマさま

今治市　矢野佳雲

余りにも目立つと困る正義感
喜怒哀楽どれも涙がついて来る
見所のない観光地花を植え
好きな色三つ混ぜると濁りだし
新聞に一行も出ず往生す

今治市　野村京子

音声多重おんな三人かしましい
生きること死ぬこと井戸の水が枯れ
いずれ故郷の絵の中に置く墓ひとつ
上弦の月にささされた刀傷
言い勝った女に風呂の湯がぬるい

高知県　赤川菊野

遺伝子か孫にも放浪ぐせがある
借金も財も残さぬ死の美学
着てみたい色は私にみんな派手
パスポート心のドアをノックする
立ち直る勇気をくれた岬の灯

北九州市　梅田宣司

戦中派病院食へも掌を合わす
病む妻に花を買い足す市場籠
大正一桁まだ贅沢を敵に生き
もう一人居てもよかった子の育ち
祇園太鼓男おとこの顔揃う

唐津市　久保正剣

モノクロの記憶の中の無蓋貨車
ワインでは様にならない地鎮祭
うるさいと彼女に言ったことがない
十八歳今しかないと臍ルック
ハネムーン笑顔で帰ると限らない

二割ほど予算が残る夫婦旅
お刺身が出て安心の山の宿
紺碧の空と対決した二十歳
学歴を杖にビリからついて行く
不思議にも商品券ならいただける

唐津市　仁部四郎

黒石を打つとわたしが弱くなる
他人さま居るからチャンと泣いて見せ
軍隊をつくろかクローン人間で
サボテンのステーキ食べてアイラブユー
結局は甚六損な役回り

唐津市　山口高明

ほっかほか瓢箪菊の師の絵文
芒種の夜蛍舞い込む佗び住居
母さんに続けカルガモ　トテチテタ
ムツゴロウ蟹も死んでよ国のため
死水を取りに続々族議員

唐津市　山門幸夫

綿入れを着込みホタルに逢いに行く
缶ビール空が気になる向かい席
歯車はくい違いつつ馬が合い
撒餌に子連れ雀が急に増え
あの世にも未来都市など夢見よう

唐津市　山門タミ

病院の待合室の人生論
方言のシャワーを浴びて駅に佇つ
棚田の美守った父に茜雲
便利さの陰で地球は病んで行く
茶髪には茶髪の主張街を行く

唐津市　市丸晴翠

大ゆれ小ゆれ風のタクトの葱坊主
喝采を知らぬエプロン干している
笛の音に闇が動くよ修羅の舞
見えぬ鬼が屯している木下闇
はなやかに光源氏の不倫記事

熊本市　永田俊子

親不孝悔いることのみ一周忌
騒音の街に育った無責任
週刊誌カタカナ辞典側に置き
靖国の恵みの平和守り抜く
先生を凡人にする孫が来た

熊本県　高野宵草

職業欄主婦と書いて泳いでる
嗚呼退化夕食すめば眠くなる
場所借りる代りに賽銭はずんどく
観客の溜息声になるドーム
田舎道飛んだ帽子が車止め

熊本県　岩切康子

天安門朱の色今も目に浮ぶ
五連敗テレビ写りが悪くなる
無人島昔の話もうご免
鞍馬石末は天下の松が乗る

弘前市　中山雅城

残像が犇く脳裏　葉月雲
余命表獅子座に祈る誕生日
猿が醸す酒に戯れ言沸騰す
割り切れぬ終章悶え反古の山

弘前市　岡本花匠

老夫婦元気で完投した気分
おみくじの花が年中咲きそろい
ステップも一緒に踏んで米を研ぐ
お見舞に医学辞典も見て出掛け

弘前市　須郷井蛙

湯花変え温泉巡りと洒落てます
中国に旅した妻が大らかに
郭公が起しに来たは暗いうち
生き様と書いて生き方探られる

十和田市　小笠原敏人

人生は楽し天国にも恋があり
葬式が同窓会なみ友集う
病気には勝てぬ覚悟だけ出来ている
天国の恋の相手を決めている

八戸市　島田昭治

成人病まだスーツ着て診てもらう
足つきの盤に湯呑みの跡哀れ
孫を囲む写真は呆けてはならぬ
ワープロの文字に囲まれ回り椅子

町田市　竹内紫錆

飼犬を褒め犬好きの顔になる
新調の傘は高めに差して行く
茶髪にも慣れて稚さ気にならず
生かされて今朝も洗濯二度回す

横浜市　清水潮華

みやま躑躅一際薫る母の閨
郭公の木洩れ日に聞く朝の景
山寺の梵鐘秋の風を呼ぶ
煩悩をゆさぶる僕の放浪記

静岡市　安本晃授

志功の画コピーなれども心和ぐ
老夫婦だけの菖蒲湯かしわ餅
四十を越しても女スヌーピー
象の目のなんと哀しげなることよ

大阪市　桝本蕗児

花みんな褒めてあげたい菖蒲園
蝶の気儘ふわふわ人に似ておかし
ばあちゃんを大事にピッカピカの薬剤師
さわさわと葉ずれ光秀をふっと（京都塔の会吟行）

大阪市　町田達子

懐かしきローカル線に国言葉
島かげに小舟潮風蟬しぐれ
夏盛りつり橋渡る太い足
快眠を願う風鈴熱帯夜

大阪市　松尾柳右子

麦藁帽とればてかてか汗光る
あれも良いこれも良いとて嫁の知恵
海開き待ってましたと子がはしゃぎ
盆踊り浴衣の似合う娘も交じり

大阪市　清水利武

年金のくらしの中に上中下
まだペダル踏める八十路のお陰様
ついて行くだけの道さえおぼつかず
塔伸びよ高野の山に倶会一処

大阪市　北勝美

勢いで父の会社を下に見る
眠れない悩んで死んだ人おらん
スピードくじすぐに損得短気向き
ドル箱になれば寝る間もないと言う

大阪市　寺井東雲

盆踊り健康法だとさそう友
まきぞえにされてベタベタ顔写真
本性と野性が闊歩してる街
よみがえるパーク通天閣もうれしそう

大阪市　藤田頂留子

メカを逃げ今日もあしたも五つ玉
生きのびるつもりに老いの日々散歩
きのう今日明日も見舞いに梅雨の入り
三回忌すめば切れぎれはぐれ雲

大阪市　清水絹子

プロポーズした日は嫁の誕生日
子の結納大和の朝は蟬時雨
泉湧く山の名水もくもくと
三途の川いずれは渡る走馬灯

大阪市　川原章久

はじめてのデートの場所に一人立つ
叱られて言いわけせぬ子のさわやかさ
腰すえていらちの叔母の見る歌舞伎
難問が片付いた日の茜雲

大阪市　中田あい子

あじさいが彩競い合い露はじく
朝のコーヒー飲んで倖せさくらんぼ
新しい傘ルンルンの梅雨の街
倖せは夕餉夫と飲むビール

堺市　黒田真砂

ハネムーン以来の旅で落着かず
ボケ防止家のローンがまだ残り
テープカット後で赤字が待っている
妻以上好みを知っている女将

堺市　吉本菁風

高石市　浅野房子

鍔迫り合いやがて火の粉はこちらにも
まんなかは何とはなしに空けてある
後遺症やがて出るだろ薬漬け
宴果て満足感と疲労感

豊中市　松岡久留美

美しい夕日に感謝今日の無事
久方の出会いに心躍る朝
花咲かす未来約した妻が待ち
片思い生涯胸に秘めて嫁く

箕面市　椎江清芳

一生をローンで縛り家を建て
借金を残した亡父を焼く煙
米櫃は無職たりとも減ってゆき
土用丑鰻悲しい目を向ける

吹田市　茂見よ志子

火種など無いはずなのにきな臭い
肝心な話になって言い淀む
さよならの前に辻褄合わす口
年輪の知恵もシャボンの泡のごと

寝屋川市　柴田英壬子

朝起きて補う必須栄養素
雑音の中でむりせず生きのびる
風見鶏立つ坂道のコーヒー店
猛者の手に持札がある鳩時計

寝屋川市　後藤黎之助

たまごっちさてこの次は何だろう
赤ん坊頬にいたずらしたくなる
時どきは子供の恐い目に出会う
着飾った三面鏡に犬が吠え

寝屋川市　太田とし子

雑音がないと不気味になる留守居
炭坑節どこで唄うか盆の月
5パーセント要らぬ賽銭投げ入れる
浄土から母が送ってくる絆

寝屋川市　坂上高栄

熟年の自分史にある懺悔録
考古学ドラマがドラマ掻きたてる
権力を今に伝えて厳島
棚田吹く減反の風幾何模様

枚方市　森本節子

えもいわれぬ香り蜜柑の花と知る
被写体に穿った題の写真展
身を潔め神の化身と獅子の舞う（ふるさとの伝承みて）
誦すだけの般若心経意味しらず

交野市　福崎しげお

学歴は無いが学士の子を諭す
枯木にも風雨に耐えた歴史あり
生命線燃え尽きるまで夢を追う
極楽を予約する気の集印帳

藤井寺市　中島志洋

蟬時雨聞いていらいら待ち惚け
いい夏の思い出肌の水着跡
エスカレーター　ミニに戸惑う老眼鏡
湯上がりの素顔に見入る釣り忍

羽曳野市　酒井一壺

土壇場で半端な返事困ります
衣食住足りて安眠しています
最後までゆっくり聞いてやめにする
相手見て断る言葉持っている

八尾市　高杉千歩

命綱　妻も歳をとりました
お遊戯がダンスに変わる二年生
クリスタ長堀　船場そだちの亡母憶う
本物でなくても亡母のアメジスト

八尾市　大内朝子

八月や老いない戦死した兄よ
咲きたての朝顔とあういい予感
艶のある誤解をされている弾み
抱きあえばこころやすらぐ海の音

岸和田市　藪野けい子

連休の父さん運転ぼく助手席
年金を日生保険に掛けてます
隣から妬かれるほどに若い婆
カアーカアーと鳴かれて年より身がまえる

寺和田市　寺田甚一

定年バンザイ没頭してる趣味がある
ちょっぴりとぜいたく過ぎるいま余生
相部屋のよさ期待して行くツアー
なんとなく決って過ぎて行く恐さ

岸和田市　長谷川呂万

あちこちに血圧計のある不便
連休を外しのんびり老いの旅
白球が緑に映えてウッズ勝つ
さりげなく洩らす秘密にかけた罠

岸和田市　井齋一齋

麻酔醒め生きて戻れた一人部屋
どっさりの赤字引継ぐ新社長
ぽっくりと逝けたら貯金したくない
同じ値で売っても隣よく売れる

河内長野市　植村喜代

一年が早くて遅い夫に付添い
暇あって四季を感じる暇がない
昨日泣き今日は笑って日が過ぎる
病院出て歯医者へ押して車椅子

神戸市　池田善守

定年後みなごもっとも妻殿に
甘くない指には誰も集まらぬ
神戸やなあ寝床で汽笛聞いてます
笑い声初孫出来た隣から

六甲に緑かがやき梅雨やすむ
つゆしきり豆飯を喰む六月よ
子なき家枇杷だけ実りつゆさ中
泰山木すさまじき年止めと落つ

西宮市　久保まさお

放置自転車ポストに葉書届かない
嫁がない産まない娘らのたまごっち
ガラス戸の向こうに蜂が翔ぶ初夏よ
バイクの音聞き分けている雨しとど

西宮市　亀岡哲子

母娘とは斯くも話題のあるものか
友の絵に一句を添えて心足る
友の訃報元気な手紙読み返す
正月がこんなにうれし孫二人

西宮市　刈田泰司

夜店には昔の私おいてある
長々と夜の手紙を書いている
パフォーマンス自分に酔っているらしい
このままでいいこのままでいい運命線

芦屋市　黒田能子

ふんぎりを迫る電話が鳴っている
逃げきった金魚にもある自尊心
迂闊には乗るまい嫁をほめられる
はからずも通天閣でカツを食べ

宝塚市　嵯峨根保子

湯の町でガジュマル炎える同窓会
舌とろり手もみの新茶里の味
初夏におう鰺と焼き茄子裏通り
靴脱いで足のため息梅雨曇り

伊丹市　山崎君子

饒舌の息は隙間を見逃さず
ため息をしてから膝に話しかけ
酒臭い息に混じった過去のシミ
おいしいと息吹きかける総会屋

川西市　松本ただし

中毒と決めつけている呑んでいる
無茶のみをしなければなと医者も好き
幸せは年金酒にそそいでる
家でのむお酒ぐらいは安いもの

奈良市　宮口笛生

香港の灯は返還で闇の沖縄
スポーツも個人もギャンブルに頼り
スライダー空振り三振ジャンボくじ
流行にとびつき買わされ置いたまま

奈良県　中原比呂志

成る程へ時間のかかるピカソ展
梅田地下帽子を被る吾一人
郷愁の石を踏み踏み古道往く
月も星も見つめる中の清い恋

和歌山市　池永正匍

和歌山市　細川稚代

蘇生する雨を待ってる花菖蒲
世渡りへ草書楷書をないまぜに
恐ろしいニュースが続く雨しとど
日本列島どこかで余震の音がする

和歌山市　玉井豊太

パチンコ天国で損は程々に
喜びを頬に浮かべて式の母
定刻に出る癖いまも時限ベル
束の間の喜びくれた遠花火

和歌山市　山田高夫

贅沢な悩み聞くほど暇でない
父の背は生きた教科書だと思う
約束を果たした後は眠るだけ
泣き寝入りするのはいつも太郎冠者

和歌山市　川上富湖

ホッチキスで軽い男を止めておく
扁平足人を踏むにはいい形
蚊を燻るゆらりと夏の夜の処刑
リトマス紙内緒ないしょが浮いてくる

岡山市　時末一灯

清流をわがものにして香魚食う
爽やかな記事に活字が匂いたつ
隊列の尻尾のあたり色がない
潔の字はバカの代名詞で残り

岡山市　川端柳子

晴れ姿記憶は宝石箱に在り
しあわせは授かるものとして受ける
ガンもいや痴呆もいやでは何にしょう
空想が羽根を広げて空に消え

岡山市　花田たけ志

汗出さぬ結果に歓喜の涙なし
失望で終わりたくない意地を見せ
終わりまで聞けば火の粉がかかりそう
説教を子供にされて亡父しのび

岡山県　荻野鮫虎狼

昼寝する時極楽の夢があり
騒音の道避けて降る古都の雨
美しい女カメラの中に居る
ゆっくりと時が流れる鳥の唄

岡山県　福原辰江

訴えをいつも夫の受皿で
花の余韻いっぱい抱いて葉がのぞく
無口でもいいのみどりの風とゆく
巣立つ娘が心配の種ひとつ置き

広島市　森田文

風おちて凭れ合うてる鯉幟
トンボ一匹止まり風情のある小庭
飛石に苔を植えればほしい池
解体の轟音絶えて雨の音

廿日市市　林野甦光

コマーシャルの美女にはすぐに妥協する
考えはみんな同じの儲け口
美しい笑顔隣の娘も十五
寝たきりも考えている季節感

竹原市　古谷節夫

八月の暦に消えぬ原爆忌
梵鐘が日本の音色告げて秋
ワンテンポ遅れて群れの雑魚で生き
限りある命へ傘を張り替える

柳井市　弘津柳慶

平手打ち母の愛がこもってる
年金のくらしにけわし消費税
余生から人生の底のぞいてる
どん底からはい上ってる男意地

鳥取市　岩原喬水

老化した脳も童話は覚えてる
金見せて妻の黙秘がやっと解け
連休を番犬にされゴロ寝する
更年期似合うカツラが見つからぬ

鳥取市　前田一枝

休刊日何かぬけてる朝の味
花もよし団子またよし酒もよし
昨日まで暮した古巣ブルドーザー
甚六の嫁とり村中総がかり

倉吉市　最上和枝

番犬が吠えず男に尻尾振る
許し合い二人で抜いたバラの棘
人間の驕り地球を狂わせる
こっそりと欠けた茶碗を継いでみる

倉吉市　淡路ゆり子

盆栽の束縛に哭く松の枝
三猿を貫いた老母誇りです
私らしく可もなく不可もなく生きる
普段着になって落ち着きとり戻す

倉吉市　米田幸子

嫁して三年妻も糠味噌臭くなる
羽衣を松の小枝に干し忘れ
ゆずられてからの桟敷が温かい
花ばかり追って足許すくわれる

米子市　澤田千春

目の上の瘤がこのごろやさしくて
恋人がみつかったのか奴凧
ストレスをコーヒー館において出る
ふんぎりがついたかもめの急降下

米子市　野坂なみ

衣ずれの音天国の階のぼる（寺沢みど里さんご逝去）
亡父の松移す浄土は緑濃し
蛍の乱舞初夏へ向かって一散に
何故かしら旅では軽く歩けるの

米子市　白根ふみ

鮮烈な夕日あしたを直訴する
逆縁にしばし八方塞ぐ雨
あじさいに溺れる雨季のあそび方
お誘いを受けて存在たしかめる

米子市　木村春枝

初恋が美術館からついて来る
アイロンかけ単身赴任腕はあげ
重態を見舞い一日やっと暮れ
いやな癖いつしか母に似て来ます

米子市　永井三津子

人生の大旅行今父は終え
乾ききる地球に愛の花を植え
巡礼の鈴胸に澄む寡婦の旅
通帳が抜きさしならぬ今を告げ

鳥取県　津村八重子

口ずさむ鉄道唱歌鍬はずむ
吹く風にまかせ静かに余生いき
粉ひいた石臼今は庭かざる
行きずりに香水匂う夏まつり

鳥取県　黒田くに子

嫁ほめて今夜良い夢見るかしら
手作りをほめて余分に貰って来
係累は胸に納めて嫁貰う
人垣が崩れて夫がさらわれた

鳥取県　西川和子

こぢんまりと庭には池も松もある
こぢんまり生きるリズムを乱せない
哀しみを彫れば力が湧いて来る
この顔を認めてもらうまで彫ろう

鳥取県　田村きみ子

押し花の栞をくれたのは恋か
コンタクト探す姿は獣かも
鉛筆が折れた愚かな事書いて
残り火に恋のかけらを一つ抱く

鳥取県　橋本多哥由

老いてなお死ぬことなんか考えぬ
暇だから悩みと向かい合っている
本当の敵と味方を知っている
アルバムに張るとやさしい過去となり

出雲市　小白金房子

平穏なくらし感謝の数珠をくる
コーディネート女心の初夏を買う
笹巻きに遠い亡母の香がしみる
ふりむけば農一筋に生きた皺

出雲市　富田蘭水

性善が怪しくなって来た此の世
ライバルへ何時でも花束用意する
人間のエゴの固まりカスミ網
相性がよくて入院までいっしょ

島根県　佐々木　鳳笙

庭を掃く草のいのちを抜きながら
恋ひとつ山の端に消す流れ星
いつもので通じる店が一つある
襷にも帯にもなれぬ紐でいる

島根県　藤原　鈴江

詩ひとつ残す生き甲斐かけようか
爪先で歩いています現代娘
新ごよみはや半分を残すのみ
歳なんか気にはならないたかぶりよ

香川県　成重　放任

ボク漫画じいちゃんばあちゃん時代劇
たい焼の心も分かる海の中
人柄は良いが笑顔の出ない女
お金とや寂しがりやか寄ってゆき

香川県　永峰　伽名子

母犬だけにそっと団扇の風をやり（愛犬のお産に接して　二句）
おおらかに七匹産んだははの顔

華やかな宴に老いも花となる
優しさを沢山に有難う安らかに（米寿の長姉逝く）

香川県　山地　マツヱ

まっすぐなレール走って来た孤独
喝采はあてにしてない母の独楽
かけ引きの笑顔と知らず妥協する
カキ氷くずして幼き頃の事

高知市　北川　竹萌

紫陽花の白大花に技を練る
自家菜園故郷の粋な味に凝る
無農薬里の自然の粋な味
卯の花の揺れる緑の里小道

高知県　小澤　幸泉

父の日も父はやっぱり独りです
妻の愛そんな言葉が消えそうな
贖罪をまたくりかえす地球号
五月晴れ始めて知った土佐の夏

西条市　片上　明水

看護婦の手に真白い薬包紙
鮫の歯のようにトンガル心電図
病院食家より小さい目玉焼
点滴のしずくが痛い音で落ち

唐津市　浜本　ちよ

そっとおしゃれして行く病院も又たのし
一人だけのテーブルなれどスープの湯気
油断すな敵はお前を乗り越える
年よりに無駄な物なしボロ溜める

第20回阪神文芸祭作品募集

雑詠二句以内を原稿用紙に縦書き。参加料1000円。締切**8月31日**。10人共選。宛先は〒660尼崎市東難波町5丁目21―8　兵庫県阪神県民局県民課内阪神文芸祭実行委員会事務局

自選集

風格がにじみ出ている筆の跡
身に付いた芸がやっぱりものを言う
脇役で終る痛みがいとおしい
素直には満足しない腹の虫
やりくりも八方美人で困ります

奥谷弘朗

たっぷりと愛情のある言葉選る
あたり前のように見送り手を振って
どの色をたしても自分の色でない
ひっそりと暮らして自分を失わず
善人の顔して人間みななら ぶ

正本水客

総会屋　裏取引きに唖然とす
平和日本　裏の事件も多岐多様
歳に似合うたくらし医師からの注意
年寄りの負けん気そろそろ返上か
風に迷うている風船の片思い

藤井明朗

老い口惜しインターネットに馴染まない
親友が禁煙決めたので困る
老耄が若い尼僧に訓えられ
運命と妥協老耄覚めてくる
凶悪犯も愛した家族きっと在る

野村太茂津

父の日も父ご馳走さん茶漬け
採算を考えたことない農夫
憎しみが少し薄らぎ腕を解く
時々は妬いて女がまだ少し
懐が淋しい時はジョーク吐く

月原宵明

焼鳥の匂いと汗のシャツ戻り
誰とでも歯車の合うカスミ草
星空に小さな意地を笑われる
一瞬の沈黙　噂のひとが来る
世話好きの口の軽さを惜しまれる

藤村〆女

他人の幸を集めてみては苦笑い
理想論ときどき返り討ちに合う
決断の二の矢へリズム崩されぬ
もぞもぞと本音吐くうち虹が消え
もめ事が多くて困る陸と海

小西雄々

もうそこが遠い田舎の道を行く
ホテルでも間違い電話聞かされる
よく出来た人だと親近感を持つ
旅慣れた鞄に入れていた句帳
携帯電話ボクの鼓動も伝えてる

黒川紫香

うつむけばうつむく影の美しさ
立ち眩みこのまま許してくれますか
いい出逢いだった　余韻を抱いている
風車　だんだん猫背の父になる
したたかな顔に手古摺る黙秘権

波多野五楽庵

愛嬌よく犬が迎えた里帰り
隅っこに僕の名がある寄進札
タイミングよいお銚子が来て困る
爪赤く染めたのも居る遺産分け
過去のある妓と話が合う飲屋

辻白渓子

筆跡と依怙地な脳が冴えてくる
老骨は疎いとカタカナ語が嗤う
大正にイメージがある子沢山
血色がいいと褒められ有頂天
先生と呼ばれ背中をくすぐられ

恒松叮紅

何げなくおはようさんと言える朝
一号線ひととこ九条ねぎの青光る
話す　待つ　読む　人生の縮図か喫茶店
ああー此処にも建つか木造三階が
八十路もうだあーれも相手にしてくれず

松川杜的

杖ついてよろよろよろと行く散歩
思い出の道今日は通りたくない散歩
一句得たところで散歩終わりとす
妻はもう腕など組んでくれません
孫が来ない日わが家は静寂にして空虚

野田素身郎

遺書を書くほどの事など何もない
難聴へ電話商法引き下がり
趣味のあるのも知らず退屈でっしゃろう
若う見てくれる背骨は曲げられぬ
騙されても盗られてもよい金は欲し

金井文秋

寺澤みど里さんを悼む

木の下闇かすかに花の匂いする
喪の庭の紫陽花きよらかで艶で
夕月のようナチュラルな死化粧
最後まで聖女わたしと大違い
小暗闇あじさいの白しろきまま

八木千代

ひとりとはこんな淋しい冷蔵庫
札束の方へ握手の手が伸びる
一病を持って泳ぎがうまくなる
紫陽花がしとしと濡れている空屋
あとを頼むとどん底にしておいて

遠山可住

あじさいが届くあの世の思いかな
からくりの一つ男が逢いにゆく
再逮捕こんどはどこをくくるのか
割り勘にします機会均等法
さよならも言わずに逝っていいですか

高杉鬼遊

叱るより賞める言葉を選っている
平凡な仮面かぶったまま定年
人間に飼われた野性の不倖せ
梅雨空へ定退怒り易くなる
疑えば妻の目ばたきさえ怪し

西田柳宏子

チューリップの鉢を落とした踏切だ
護岸してから葦が消え魚が消え
結婚も離婚もののはずみなり
池さらい単車自転車冷蔵庫
安らかに眠れや塔のお母ちゃん

河内天笑

あじさいのふっくらさんとてんと虫
あじさいは姐御肌ともいう噂
あじさいの七変化して不垢不浄
藍に終わり鐘の音に果てあじさい忌
あじさいのはや明くる間に空の青

橘高薫風

大阪川柳の会

とき 8月2日(土)
ところ サンケイビル本館322号室
宿題（各題2句）
「あくび」
戸井田慶太選
「ふたり」
天根夢草選
「スタミナ」
黒川紫香選
「読む」
礒野いさむ選
会費 500円
締切 午後6時
○席題なし

「こけし川柳大賞」の作品募集

課題「こけし」二句をはがき大に住所・氏名・電話番号を付記、小為替五百円を同封左記へ。六人共選。締切**8月31日**。
〒036—04 青森県黒石市大字袋字富山72の1 津軽こけし館

川柳太平記（231）

川柳の群像

三宅巨郎

東野大八

三宅巨郎と言えば、筆者には忘れられぬ思い出のワンカットがある。満州時代の親友で版画家の太田耕士と終戦直後のこと、彼の友人で同じ版画家の畦地梅太郎が留守を幸い上がり込み、満州奉天でスケッチしてきた京劇の舞台を二、三枚刷り上げ、銀座の顔役菊岡久利の許へ持ち込んだ。

久利は表向き下駄屋だが、裏では敗戦後の銀座裏を縄張りにしたインテリやくざの親分格であった。耕士が携えてきた京劇の版画の売り込みを依頼、その話中に、ドヤドヤと二、三人の角刈り風が現れ、「兄貴預かってくれ」という。二つ返事の久利が、向かい合っている筆者の足許にある引出しを抜くと、そこへガチャガチャとほうり込まれたのがなんと拳銃である。

復員引揚げ者のこちらは別にはばからなかったが、その引出しを片足で押し込むなり、ヒモつきの大きな布細工の財布から二、三枚の紙幣を抜き出して耕士に渡した親分だ。

「いや、どうやらこれで酒手になった」とニッコリしたあと、耕士がもう一軒というその相手が本郷菊坂に住む三宅巨郎だった。

長火鉢の向こうに粋な半纏姿のこの壮年の男が、こちらが川柳人という耕士の口火をアッサリと引き取り、ロクに挨拶もせず、「大陸の川柳誌もきていて、あんたの名は知っていたよ。近く日本川柳協会を再発足するが、ぜひ入って下せえ」ときれいな江戸前で口を切ったのには、当方いきなりのことでおどろいたものだ。

「…一見のんき者にも見えるが、細心なところもあって、人なつっこいその性格は川柳でもそうで、父の代からの仕事でもある料理屋の主人、みんなからタツちゃん、たつちゃんと呼ばれて誰からも愛されていた」（『川柳春秋』神田仙之助談）

本名は三宅辰雄、明治40年12月10日東京の神田生れ。父は俳諧畑の粋人で知られた三宅孤軒である。大正9年4月創刊の『川柳きやり』同人で、柳号巨呂平を名乗った。のちに昭和に改元後は、この誌の添削講座で売れて同誌編集長にもなった。父譲りの全国料理新聞の編集がまともな肩書き。それだけに料理関連の玄人筋の句が得意。

お銚子のない河豚サシで座が白け
菖蒲湯へ今夜の膳は銀づくり
包丁を巻いて板前恋を捨て

筆者の聞いた日本川柳協会は、昭和16年スタートしたが、二年後にはその書記長にもなっている。この日川協は、戦後も昭和49年に堀口塊人の奔走で、同年暮れ再結成されているのだが、その初代委員長は前田雀郎。後発

の日川協は藤島茶六など、関東系が目につく。

巨郎の川柳畑の足跡の第一は、昭和18年に生れた戦時下の日本文学報国会俳句部会川柳分科会で、その事務長になっていることだ。筆者が巨郎と初対面の折は、すでに『川柳長屋連』『川柳クラブ』の発起で奔走中で、前者は今も残る関東川柳グループのメッカである。したがって彼にとっては、一にも二にも川柳、川柳で関東川柳界切っての実践行動派であったわけだ。

「わっちにはな。川柳こそ神サマ、仏サマ以上でな。川柳のためなら家・女房もほうり出してしまう」とは、耕士同道の折の長火鉢だんぎだった。

このころは戦後早々で、関東一の老舗『川柳きやり』も出版物統制を『川柳きやり通信講座』でしのぎ、きやり川柳を守りぬいた挙句、どうやらもとの川柳誌の面目を取り戻した意気軒昂のころだったと思う。江戸弁で大島つむぎの部屋着でまくしたてる巨郎の姿を今も忘れない。

納豆は欠かさぬ男朝湯会
三ヵ日市電の遠い音をきき

「ヤッコさんは、イナセな江戸前を気負ってはいるが、酒はからっきしなんだ。せめてチョコの味でも知ってれば、コップ酒ぐらいは出してくれたもんだが…」と巨郎宅の帰途、耕士が無念そうに、そうぼやいていたことが耳底に残っている。

「そんなことはないよ。日本酒はやらんが大のビール党でね。大ジョッキで二杯ずつ飲んで、大層ヤカましかったものだ」と懐かしそうに、日本ライン下りの大陸同窓会で阿部佐保蘭はニタニタと話していた。

昭和41年2月5日狭心症で没。享年58。

「戦後は『川柳長屋連』を数人で発足させ、自由かっ達な川柳を、最初は八人ぐらいで持ち寄り、大いに楽しみながら句座を持ったものだ。戦後は大阪の岸本水府番傘主幹を迎えたりしたことから、東京柳人の横の連絡をとるべく、おれの肝いりで昭和22年に西島〇丸を代表に、川上三太郎・村田周魚・前田雀郎などのお歴々で『川柳人クラブ』を作ったんだ。こういうことはおれの得手で、川柳のことに関する限り、生命を賭けてもやる気でいるんだ」という書信がいま手許に残っている。

きやりは、この川柳世話焼きの巨郎が、周魚主幹のあとをうけて、主幹は巨郎がキマリとばかり、社中の誰しもそう考えていた。

このきやりの絶頂期は、同誌が二十周年を迎えた折で、この年の昭和15年は紀元二千六百年で、国中が大騒ぎをやっていた年に当る。この二十周年大会の音頭とりは、きやりの大御所八十島勇魚のはずが、その行事の前に他界され、巨郎がその代りに社中一統の代表格で盛大な音頭とりをやったもので、その思い出を太田耕士と、大陸引き揚げ直後の筆者が承ったのも、本郷菊坂の長火鉢だんぎの中だった。

巨郎は、徹底的なきやり調の伝統川柳であった。著書には『料理相談』（昭和三年刊）のほか、巨郎没後に実子夫人の手によって発行された三宅巨郎遺稿集『葭のずいから』がある。以下、そこから抜粋した遺句。

胃袋へまっすぐ酒のない夕餉　巨郎
金策も百万となり奥座敷
空気にはまだ税がない深呼吸
窓に在る母の姿を児はたより
葉桜へ気心を知る友と立ち
新しい下駄花道に似る歩道
爪弾きがすき姐さんは雨が好き
〃　〃　〃　〃　〃　〃

▼次号は「**岸田万彩郎**」

古川柳歳時記 8

『月見』

清博美

『徒然草』の一節に、「秋の月は、限りなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひ分かざらん人は、無下に心うかるべき事なり」とあり、また「八月十五日、九月十三日は、婁宿なり。この宿、清明なる故に、月を翫ぶに良夜とす」とも記している。

秋は月が冴える。その秋のなかば、八月十五日に月を鑑賞することが行なわれた。団子や薄を供えて月を愛でるのである。そして、家での月見に満足出来ない人達は、月の名所といわれる場所にわざわざ出かけて行った。江戸では、隅田川をはじめ、綾瀬、真崎、三股、洲崎、鉄砲洲、小奈木川、芝浦、高輪、品川、不忍池、中川など、いずれも水辺を月の名所としたようだ。

「○元禄の頃迄は、良夜に三派の月見とて、船にて大川へ出たのしめる事あり。此夜に限り、官のゆるしを得て花火をともしけるとなり。享保の頃にいたりては此事少かりしよし、『江戸砂子拾遺』にいへり。○中古迄は麻布六本木芋洗坂に青物屋ありて、八月十五夜の前に市立て芋を商ふ事夥かりし故、芋あらひ坂とよひけるなり。近来は坂上に市立てり」とは『東都歳事記』の記すところ。

『ひともと草』には、「高田月見」の一文が収録されていて、「秋もなかばのころ、月見むとて、さのみ世はなれたる所にはあらねど、ゆくほどに田のあぜ山かげ過て、めなれぬさまぞ、いとおかしうおぼゆ、名にめでし高田の原は、千ぐさの花をつくし、ことの葉しげくをく白露にうつり、月はさしのぼり、光にかぎりもなく見わたさる、物から、名にしおふ外山のかしこき木立などおひしげりたるけしき、えもいはむかたなく、……」などと綴られている。

『絵本風俗往来』には、「○十五夜観月　十五夜の観月は明夜の陰晴はからられざるより十四日の夜月見の宴を開き詩歌連俳を催すあり。扨又市中おしなべて団子を製して月に供ふ。柿栗葡萄枝豆里芋の衣かつぎを三方盆にうす高く盛あげたり。団子は大きさ径三寸五分位より小さきは二寸余とす。此団子に尾花女郎花等を添へたり。当日前より米を白にて引き団子の粉を作り十五日朝未明より家内打揃ひて製し一人に付数十五箇づつに柿栗等を添へて配分するより家中多人数ある家にてはいと沢山に製したり。去れば手伝ふ人々多きまゝ、台所は随分の喧ぎなりしも是相かわらざる家例とて目出たかりける大江戸の繁昌又今日は江府に尤多く祭られける八幡宮の祭礼にて遠くは神楽太鼓の音相響毛近くは幟の見ゆる所彼所此所にありて賑はし」と、その賑やかなさまを書き連ねている。そしてまた、供える団子に付いて、『守貞漫稿』は「八月十五夜賞月　俗に月見と云　三都ともに今夜月に団子を供す。然れども京坂と江戸と大同小異あり、江戸にては…机上中央に三方に団子

数々を盛り又花瓶に必らず芒を挟て供之。京坂にても机上に団子を盛り供すこと江戸に似たりと云ども其団子の形…小芋の形ちに尖らす也。然も豆粉に砂糖を加へ是を衣とし又醤油煮の小芋とともに三方に盛ること各十二個閏月のある年には十三個を盛るを普通とす」と書いて、上方と江戸では団子の供え方にも微妙な差があったことを記している。

また、片月見といって、十五夜の月見をして九月十三夜の月見をしないのを忌み嫌う習俗もあった、再び『守貞漫稿』を引くと、

「江戸の俗、今日若他に行て酒食を饗さる、歟或は宿することあれば必ず九月十三日にも再行て今日の如く宿す歟或は酒食を饗さる、こととする人あり。不レ為レ之を片月見と云て忌むこととす。俗諺の甚しき也。片付身と云ことを忌むなるべし。此故に大略今日は他家に宿らざること、す」と書いている。

さてまた、この月見の遊興を嘆かわしいことと慨嘆している人物も居た。小川顕道はその著『塵塚談』に次のように記している。

「〇雪月花といふて、古へ人の心を月の光明と雪花と同じく遊覧すること浅からず、唐土にて、唐の代より盛なる事の由、顕道思ふに、日月は天地の中の至尊なれば、尊奉し拝礼すべき事也、然るに、古へも詩に賦し、歌に詠じ、翫物とせし也、是、天を軽侮するの甚しきといふべし、中秋十五日を月見と号し翫ぶ事、延喜の時始りし由、久しき事也、人の賀するにも、祝するにもあらず、貴賤とも遊興の楽み也、近年、安永、天明の頃は甚敷、貴富は人を大勢集め招き、ほしゐまゝに宴飲とせり、願ひ望みある人は、権貴の家へ月見に付込、台の物を捧、食物は、台といふ言訳に少し計にして、金銀を費し、端物、キセル、たばこ入、翫具の類を積かさね、月見台と称し贈る事也、天明八年申の頃より、此事少薄ろぎし様なり、たうとみ拝すべき尊き物を楽しみ、翫物となす事、、返〳〵も恐れ多き事ぞかし」と、月見の賑いを憤慨し、水を差している。

さて、小川顕道の論はさておき、この月見は吉原遊廓でも重要な紋日だった。遊女は客を引きつけるのに躍起となり、客はこの紋日を逃れんとして、遊女と客の間でその攻防が展開されたものだ。『北里見聞録』には「八月十五日夜、九月十三夜、何れも翫べる中にも、此廓の興は又いはん方なく、軒近に小き提灯数をしらずともしつれて月光を添へ、かたへは歌舞のさま〴〵、夜もすがら舞うたひてあたりを払ふ」とあるが、この吉原の月見に関しては改めて別の機会に紹介したい。

*

月見客筆をかミ〳〵扨出来ぬ　明三義4
—一句如何ですかと言われたが、なかなか出来ず苦吟の態。

しうとめに月見ひかせる気のとくさ　六10
お月見をていしゆに十五丸メさせ　四6
—経水中の女性は粉を焼くことも団子を作ることも遠慮しなければならない。そこで姑や亭主が代行する。

御先祖の哥学を咄す月見の夜　明八天1
—御先祖に和歌に堪能な人物が居たのであろう。

安ス月見薄一片窓へ出し　五四25
はなしでもしなハさみしい月見也　一五13
ねるハさておしいとけちな月見也　一九21
ふけへきな月見兎の論ではて　五八26
—家庭の月見はえてしてこんなもの。

家内安全女房と月見なり　三四14
ナア嚊ァ月見ハ内でするがい、　一五八10
—亭主としては吉原に行けず残念の気持。

月見にはひさうな松も邪魔に成リ　四九33
松のかけ畳の上て月見也　六〇8
—「ひさう」は秘蔵、自慢の松も月見の時には邪魔になる。

いいむすこ母の丸めた月見也　四　五四3
—友達連中は吉原へ。

秀句鑑賞

同人吟　榎本吐来

―7月号から

私が川柳に出会ったのは昭和四十三年の春でした。当時羽曳野病院に月一回の句会指導に来ておられた川村好郎先生にお目見得したのです。あれから約三十年に近い歳月が経ちました。仕事の都合等で少々さぼったこともありますが、概して直面目に取り組んで来たつもりです。作句の難しさは改めて言うまでもないこと、句歴二十年だろうが三十年だろうが、ほいほいと面白いように佳句がというわけには行きません。たしかに一般的には年期を経る毎にモチーフが微妙に変化していく。これを進歩と呼んでいいと思いますが、作句には客観性が伴います。作品の大半が句会を通じて世に出るのだからこれは当然のことと言えましょう。言い換えれば、作品は選者と対峙して生まれるわけです。私は最近、この選者の重さを痛感しています。殊に本欄のような三百人を超えるベテランの句に接するときの思いは格別です。無力ながら懸命に取り組みました。皆様の引き続いての精進、並びに川柳塔へのご協力をお願い申し上げます。

まちがい電話ちょっとおしゃべりしませんか

西出楓楽

間違い電話が多い。一番頭にくるのは、こちらに応答させて一言もなく切ってしまう輩だ。この句、そうした中で、「どうも大変失礼しました」と丁重な断りを述べる相手への思いであろうか。着想、表現に讃。

病院でビールのことはまだ問えず

栗谷春子

わかるわかるこの気持。でも本当は自分ではもうとっくにいけると結論を出しておりながら、半分は医師へのテストなのかも知れない。その誘惑をあえて抑える当人は、きっと模範的な患者なのでしょうね。本音とユーモアを混じえた傑作である。

せり勝った椅子でひとりの風を知る

上田俊路

本来なら陶然とするはずのせり勝った椅子が意外や意外、侘しくも孤独な椅子であろうとは。だんトツだった棒グラフがかえって恨めしい。サラリーマンの哀切の一齣である。

腹にいる児が胸張って歩かせる

菱田満秋

初めて人の母となる女性であろうか。心配も皆無というわけではなかろう。しかしそれにもまして歓びは大きい。そしてもう二人に朝な夕なの会話が繰り返されていることは想像に難くない。ほのぼのとするユニークな句である。

その昔憎んだ夫の顔でなし

神夏磯　典子

世間並に愛情を重ねてきた夫婦である。売り言葉、買い言葉に思わずいきり立った日もあったが…。それが近頃の容子は一体？　六十路を越えた男の内奥は決して生半可のものではない。それをにんまりと包むのが賢夫人であろう。この句、その辺りのニュアンスを言わず語らずほのめかしている。

集会に温和な仮面つけていく

井上白峰

隣近所、町会の集会であろうか。金のこと、体裁のこと、本音の話はなかなかに厄介である。とかく世間は住みにくい。当人はその辺の呼吸を百も承知の温和な仮面をつけての参加であろう。紛糾したときのポーズも弁えているに違いない。処世のいろはをユーモラスに淡々と詠んだ。

アバウトが好きにじみ出る人間味

井上直次

読んで字の通り。アバウトとは気取らず、肩を張らない大まかなさまである。ところがこれがなかなか難しい。甲斐性、見栄が濶歩する世間で自らを売らないこのアバウトさんは、恐らくアバウトの反語に近いデリカシーの塊であろう。

スジ論を青いと思いつつ黙秘

瀬戸まさよ

会議ではしばしばあるシーンである。得意気に滔々とまくし立てる論調。しかし、どこか大まかで青くさい。このまま決まって終えば問題だ。かと言って直ぐに反論するには少々心もとない。さて、この後一体どうなったのでしょうか。気にかかります。

ばら咲いて棘ある人を懐かしむ

茂見よ志子

一風変わった句風である。庭の薔薇の花が美事に咲いた。ああきれいだ！しかし、よく見ればあたかもその花を支えるかのような鋭い棘があるではないか。その棘に思わずかつての人への懐かしさが甦る。だが、そこにはあれから刻んだ幾星霜の人の世を見究める叡智が潜んでいるのだ。若かりし日には及びもつかなかった思いが…。

妻の乱掃除洗濯ばかりする

玉置重人

「おい、ちょっと出ようか」。「何言ってんの。あんたと違って、わたし忙しいのよ。見たらわかるでしょう」。この一両日、二人の間に何かあったらしい。やがて数日も経てば何ごともなかったように、けろりと元の二人になるのでしょうが…。掃除、洗濯は女性の武器。それを見事に駆使した句である。

葛藤が始まっている軽い嘘

高須賀金太

これは夫婦の乱なのか、それとも、ときにライバル、ときに同志となる極めて近しい友とのちょっとした行き違いなのか。ただ、軽い嘘で終わるのか、かなりの葛藤にエスカレートするのか、その先が見たい。ニュアンス豊かな句である。

死に神に仲良しばかり攫われる

福本英子

そろそろ古稀に足を踏み入れると、さすがに友人、知人の鬼籍への旅立ちがふえてくる。ああ、あの人が…。まあ、あの方がと悼みは尽きない。丸くなった心には仲良しばかりと写るのだ。そしていずれそのうちに…。縁起でもない！英子さん、あなたは大丈夫。いつまでも頑張って下さいよ。

腹芸に長けてリストラ免れる

青枝鉄治

不景気に対する企業再構築策、リストラクチャリングが馘首と同義語にまでなってしまった日本である。しかし、ここにも達者な男がいる。そしてそれは決して生半可な追従などではない。逞しい腰の据わった腹芸なのである。ユーモアを買いたい。

網棚に土産忘れて旅終る

小熊江美

実体験の句か。失礼！でも往々にしてあり得ることだ。そして最後は無事に引き取ることが出来たのかどうか。そんなことまで気になる句だ。悠揚迫らぬ結びが見事。楽しかっただろう旅行への満足感がじわじわと伝わってくる。

だまし絵の中を出這入りして家族

林荒介

小さい子供を抱えているときはなかなかこうは行かないものだ。しかし、子供が成長していっぱしの口をきくようになると様子はぐっと変わってくる。家族ぐるみのウイット合戦とでもいうべきものだろう。それは決して陰うつな嘘や隠しごとではない。まさしくだまし絵。笑いに満ちた楽しい一家の雰囲気がそぞろ伝わってくる。

高杉鬼遊選

河内長野市　大西文次

口髭で威張るぐらいは知れている
へそくりが溜って笑い止まらない
相合傘　付馬だとは気付くまい
鉄塔で一休みする昼の月
虫食うた柱重要文化財

東大阪市　谷口義

断りに行って相槌打っている
誘惑に負けたふりしてついて行く
妻の手に渡った金は戻らない
逃げて行く男に鈴がつけてある
雲は流れわたしも一つ齢をとる

西宮市　古谷ひろ子

携帯に産声とどく深夜バス
均等法ミニさっそうと五月晴れ
トンボ羽化　少年が見る夏の精
うたた寝の老妻のメガネを取ってやる
濁流にさからう父の頭蓋骨

八尾市　篠原いつふみ

母親の音痴を笑う子も音痴
白衣から母に着替える夜勤明け
虫なりに考えた末死んだふり
打ち解けて嫁に教える隠し味
あの時の父の言葉が今分かる

和歌山市　木村初子

新茶いれ白い時間の中にいる
一喜一憂CT終えて熱いお茶（胃腸のCT検査）
セピア色にしあわせそうな顔二つ
一瞬に賭けて悔いなしシャボン玉
シナリオは書かぬ余白は茜色

横浜市　川島良子

ポケベルで人生論は語れない
夫婦です顔がだんだん似てきます
惣菜屋の味に負けてはいられない
ジャンケンで夫はいつもグーをだす
どうしたら可愛く老いていけますか

風鈴に呼ばれたらしい風が来る
公園の隅にしょんぼり三輪車
殊の外煙草が美味い喫煙車
ギャンブルは妻に内緒の別口座
仮設からスーダラ節が洩れてくる

河内長野市　妹背尽呂久

芥子の花禁断の実は魅力的
残飯を捨てられなくて病んでいる
ジャンボ機の中の運命共同体
通販に心の隙を狙われる
熟すまで待たずに青い実が落ちる

富田林市　藤田泰子

人災を逃れるすべを思案中
生き変り死に変っても柳樽
何となくすること無くてひげをそる
強引に許可した裏がきなくさい
国のため年金医療がまんする

鳥取市　西村半畳

逆転はもうない亀に負けそうだ
蓄えて他所行き着れず捨てられず
ゆるやかな坂を安心して上る
満足と言えるほどでもないけれど
見て聞いて言うて流れに身を任す

高知県　百田幸

必ずと約束できぬ根なし草
お互いに身を思いやる無口なり
ファックスに一喜一憂する母娘
気まぐれも生真面目もいて盛り上がる
若者を陽の目にあてるお膳立て

倉吉市　山中康子

ボロボロの巨人応援したくなる
妻病んでゴミを出す日を教えられ
ストレス解消時々金魚逆回り
欲すててから肩こりが消えました
ぼろぼろの家で安心するツバメ

今治市　渡辺南奉

日の出日の入り波がお化粧する時間
似合っても似合わなくてもペアルック
片思い胸のシグナルまた揺れる
旅三日必ずお供する薬
子育ての烏に情けかけてやる

米子市　猪森スミヱ

どっこらしょ膝が痛んで雨期に入る
逢えた日は恵みの雨と書く日記
向日葵が立ちくらみした炎天下
捨てられる句もそれなりの自負は持つ
置き床にちんまり活ける季節感

鳥取市　藤ふうこ

和歌山市　松本　良

何万回食べて飽きない妻の飯
A型でなんとかなるが身につかぬ
嘘言えぬ男でどうも頼りない
同じもの食べても粘り違う妻
あれこれと迷ったあげくマイウエー

伊丹市　樫谷郁子

車内販売あなたを憶う一人旅
久し振り会う娘は達者よく喋り
み仏がおわす五重の塔しずか
梅の実を愛でる人亡く梅雨に入り
十薬が医者に負けじと花をつけ

八王子市　井上京一郎

駆け込みへたたらを踏ます改札機
いいことがあった日傘がよく回り
黒帯が受ける教育的指導
風見鶏あさって向いたままの恋
人事部が一人混じって酔えぬ宴

和歌山市　杉山精子

通り雨少し間延びのした会話
どこまでを友情とするマグカップ
女から見れば男の美学など
コンビニへ夫預けて外遊に
悠久の空よ未来はありますか

綾部市　藤田芳郎

ときめいて薔薇の深紅を買い被る
脳みそに効くというからまぐろの目
減反へパン売り切れる村境
走り続けて四コーナーでまだ迷う
満願の朝に二合の小豆買う

今治市　塩路よしみ

ことなかれ主義でだんごも花も好き
カードばかり使うくらしを危ながり
子に残す道はきれいに掃いておく
未来図を持たず凡人明日は明日
そっとしておくいたわりに気がつかず

今治市　渡邊伊津志

生きようとする人間の目が光り
順番を譲って温い陽にあたる
裸婦像の胸の辺りが陽をはじく
お世辞だと知りつつ雑魚も演技する
職退いて見渡す海の広いこと

今治市　村上久美子

何度でも出直しますと陽が昇る
戦い済んで首が揺れてる終電車
風葬もいいな行きたいとこがあり
男ってそんなものヨと似た話
カイワレ菜土の情けと日が恋し

吹田市　石原靖巳

有り難う言えば世間が丸くなる
大層に生きた死んだは囲碁のこと
手の内は味方にさえも明かさない
派手を着る何時も若さが欲しいから
落ち葉にも大樹支えた自負がある

大阪市　立蔵信子

砂浜にきらいとかいて忘れよう
海外の土産もらうがあてがない
信じても信じなくても手を合わす
おわびする記者会見に芝居あり
貧しさを知っているのもお金持ち

犬山市　早川盛夫

新しい機種には従いていけぬ齢
ばらばらのようで一つになる家族
痛烈な非難シャワーのように浴び
二人ならきっと楽しいコンサート
隣とは赤の他人のお付き合い

横浜市　田中笑子

車座で開く弁当のぞきあう
朝食を見つけたカラス仲間呼ぶ
五月病峠を越える梅雨近し
窓拭きをやめる予報のせいにして
雨あがる森にコーラスよみがえる

今治市　野村清美

胡瓜 茄子 初なり見せた御仏壇
雨の日にせめて明るい薄化粧
登頂に憂き世忘れる風がある
コーヒーの匂いに和む朝のパン

高槻市　傍島克治

保安協会妻のヒューズを診て欲しい
銭湯で大きさ競う手術痕
戻りたくない時もあるブーメラン
風通しよくて休めぬ風車

八尾市　平川幸枝

下りられぬ猫に梯子の救助隊
余生にも予定があってはしご酒
好きな絵があってため息でる値段
美容院心配しても始まらぬ

秋田県　湊修水

医者通い老いは天気と根くらべ
コンバイン牛追唄が聞かれない
政治屋もギャングも甘い汁に酔う
バブル禍の張本人と見つけたり

横浜市　鈴江純子

人形のようにリハビリ操られ
桜から菖蒲になって病癒え
子育ての失敗嫁に見破られ
風呂掃除手抜きではなし節水日

海南市　谷口義男

年寄りと見れば猫まで馬鹿にする
居直って居れば死神寄って来ぬ
英才に育てた息子親を捨て
公僕と言われた時代回顧する

大阪市　三浦千津子

生活のスタイル変える軽い靴
ひたすらに走る忘れるため走る
自惚れが崩れだしたよ肩たたき
本心を知るしっかりと手を繋ぐ

静岡市　大村正雄

人生をパノラマで見る歳になり
飽食で米の大恩忘れてる
効能書どの病気にもあてはまり
電話口営業用の声となり

鳥取県　藤山弘子

苗床の管理まかせるほめ言葉
花苗をあれこれ植えて楽しませ
田ごしらえ苗にあわせて動き出す
生ゴミをリサイクルする花作り

鳥取市　岸本宏章

公平なサービス自動ドアがくれ
占いを当てにはせぬが気にもなり
戦災がお伽噺になってくる
夏の夜は宇宙のはなしして寝よう

和歌山市　福重美子

逆立ちの足が大空支えてる
世話すれば答えが返る鉢の花
母の日に去年の花も咲いてくれ
嫁が来て男世帯に花が咲き

羽曳野市　三好専平

おたがいに一つ二つの隠しごと
信号が青になったら渡ります
低金利新手の詐欺にひっかかり
難病は症候群で片付ける

富田林市　中井アキ

噂から私が魔女と知りました
折角のお誘いだからお供する
そんな目で視ないで風が騒ぐから
こめかみに雨降るような話来る

鳥取県　山本正光

逢っている時は無口で燃えている
神様の森に道路はつくらせぬ
御先祖のまた御先祖は猿らしい
浄土まで電話かけたい用がある

和歌山市　武本碧

転勤へ住めば都の妥協癖
困ったらママの浮輪が飛んでくる
忍んでも逢いに行きたい土踏まず
土壇場で身を翻す黒揚羽

八月の鯨また見る老い生きて　河内長野市　木太久　正一
杖ついて訪ねてくれし妻の友
宅急便玉葱送る千葉の娘へ
欧州に社民の風が吹いている　沖縄県　杉谷一栄
喜んで良いのか墓地を買うてある
杖なしで通院少しおしゃれする
おしゃべりは昔のまんま姉の家
ひい孫に一番やさしい顔で会う　富田林市　山原昭水
留守電に呑みすぎないで孫の声
幼稚園松ボックリも宝物
母元気故郷の味また届く
二日酔通天閣が揺れている　大阪市　小泉久子
一人ぼっち電話のベルを待っている
よろこびを素直に出せぬ昼の月
一言の重さを抱いて夜が明ける
ウイークに行く当てもなく歩く午後　羽曳野市　川田晋
行くゆくは破産を予定した養子
コンピューター時代に通う珠算塾
肩書は会長という世話係
即興の一句控える箸袋

長電話　丑は丑連れ聞いている　寝屋川市　井上すみれ
忘れもの届けて貰うまで忘れ
押しピンよ君も老いたか鈍くなり
両隣三階建てにするうわさ　吹田市　西岡豊
外地から女児誕生という電話
プロポーズ受ける予感がするデート
六月八日喜寿の花咲く誕生日
痒いとこ上だ横だと老い二人　交野市　山川日出子
真剣に親子が習う護身術
猿たちは携帯電話まねしない
生きている形見の母の裁ち鋏
梅雨車内レインシューズはただ一人　高知市　細木子龍
初鰹ファッションすでに冬の章
夏を着る恋に七日の蝉しぐれ
高く買い安く売ります七不思議
四万十に恋のホタルが飛んでいる　八尾市　村上剛治
土壇場で神社軒並はしごする
損をした競馬は他人に話さない
血の通う手当に点るいのちの灯
ここだけの話を風に盗まれる

兵庫県　北川　とみ子

気まぐれなセリフまさかと思われる
友情の嘘辻褄がきれいすぎ
肩の荷を下ろせばきれいな灰となる
働いた先祖の積木子が崩す

米子市　大野　蒼流

野良犬も生きねばならぬ雨に濡れ
子育ての視野一ぱいに母の傘
長靴の底から洩れるのは挽歌
妻昇天ぼくの地球儀回らない

八尾市　村上　ミツ子

病室の元気良すぎるのも不安
がんばれと逆に母から励まされ
ライバルのため息きいてから昼寝
捨ててからプラスのカードだとわかる

八尾市　神原　まさと

借金で家を建てたら資産税
アルバムに初夜のホテルの箸紙も
結婚の予定を聞けば貯金ゼロ
友情に賞味期限はありません

鳥取県　原　みさを

ゴム長にかえて定年後を歩く
開運の水晶玉が効いてきた
地球儀のうらでおなかがすいている
古稀すぎて刻の流れる音がする

横浜市　山下　省子

生活費金持ちになる月始め
少しだけ余分に持って町に出る
月末は財布も痩せてすぐ怒り
墓のこと親子で話す昼下がり

羽曳野市　森田　四三郎

病床にふわり舞い込む見舞蝶
退院の花束嬉し車椅子
友の減る佗びしさ経を口ずさむ
パンの匂いで歩速が鈍る万歩計

大阪市　杉澤　汀

五位鷺のあとへは退かぬ呑みっぷり
老人ホーム今日も明治の話聞く
四代の御代を生きたと空ろな眼
菖蒲園見る人描く人写す人

寝屋川市　瀧本　八十八

芸人の話芸を磨く通の客
鴨川の水で磨いた鱧料理
木のいのち匠が活かすかんな屑
解禁の鮎とスリルの知恵競べ

横浜市　伊藤　ふみ

蟻の列組織の掟あるように
病院を変えて病名変わらない
預金帳自問自答の残がある
梅雨晴れが夫婦喧嘩を忘れさせ

横浜市　秋元和可

目が覚めて今日は何日何曜日
まずテレビつけて一日始動する
お日様の匂いを吸って布団肥え
誰も居ぬ部屋でテレビが笑ってる

札幌市　三浦強一

頭ひとつ下げれば流れ変り出す
予報官にこにこと出す晴れマーク
ぶきっちょな男の折った千羽鶴
ぶきっちよな男で幕がまだ引けぬ

豊中市　石川勝

寂しくて狼きたをくり返す
仕事です　お礼　とんでもありません
おどろいた振りで聞きだす子の内緒
地下に寝る訳は聞かないのが情け

鳥取市　岸本孝子

年金が入ると財布元気づく
怒らせる喜ばせるも同じ口
日記にはいいことばかり書いておく
価値観がごみと宝を同居させ

今治市　越智青園

母の姿に自分を重ね苦笑する
笑い薬のまされ落語聞いている
寺に住んで金魚は経を聞きあきる
花菖蒲一つ一つがよく競う

大阪市　和田和風

国民につけをまわせば済む政府
均等法女も過労死させる気か
国民に無理矢理食わすトコロテン
二時間も待って歳だというカルテ

大阪市　中澤孝子

鳩ポッポ教えた孫の反抗期
その土地に住めばその地の顔となり
ほどほどに薄情にされ元気出す
離れない私の影に跳んでみる

泉佐野市　稲葉洋

透明にしたら頂点崩れだし
ワンバンドあとゴロだった出世道
内心は互いに老けたなと思い
壁であり鏡でありし親偲ぶ

高槻市　乙倉武史

あきらめの世に消費税喉を過ぎ
夏形に散髪もして衣替え
一万歩歩いた汗で旨いお茶
父の日は自分で欲しいものを買う

和歌山市　楠見章子

合同句集パッチワークの面白さ
輸入大豆らしいが美味い冷や奴
ヒロヤマガタ買ったローンが残ってる
法律相談したい時には無いチラシ

バーゲンの戦場抜けた妻の汗
三猿になれない妻のお世話好き
ヘルメット母の記憶の鉄かぶと
ふくらんだお布施に熱が入る読経

大阪府　奥野義夫

よい町になれそう運動員の声
一票の効き目を四年待ってます
びわ湖畔わが家に続く水を見る
保証人ある銀行を探してる

尼崎市　軸丸勝巳

新鮮な野菜が笑う台所
通学の安全家族みな祈る
姑の忌に初のそら豆供えます
つまずいた痛さ夫を笑えない

鳥取県　高尾京

提げて来た袋みやげと思い込む
両の掌で包んだ螢　火が匂う
空も海も愁傷の目に青すぎる
工場で作ったような胡瓜買う

兵庫県　大谷幸次郎

低金利いよいよ壺の出番だな
屋根工事持って死ねんと思いきる
電気代払うのは俺消しておく
歯医者さん自分の治療誰がする

大阪市　中井正秀

目の黒いうちにと思う事あまた
ノックなど要らぬ二人の生活です
猫の手の代りにわたし狩り出され
慰めに行って慰められて来た

島根県　武島ちよえ

政治不信臭い話が多すぎる
枝豆とビールやっぱり夏の顔
年金の夫婦にカビが生える梅雨
想い出の曲を鳴らした清掃車

八尾市　與田明

紫のシニア茶髪に負けてない
肩車してくれるからパパが好き
肩の力抜こうと力入れている
蟬も黙祷八月十五日正午

羽曳野市　徳山みつこ

小火騒ぎ知らない人と口を聞き
あきられてココアが棚の隅にあり
日々是好日この世そんなに甘くない
あじさいの名所ついでに掌を合わせ

横浜市　金森徳三

蹟きは自分でゆるす国の咎
歳を言う医者に余命をみな委せ
眼ぐすりをさして気が付く枯れ榊
コピーでも温み伝わるボールペン

富山市　酒井輝

休肝日まわり道して厄をよけ
仲直りしろよしろよと影法師
つけたくも鈴が嫌がる猫の首
黒檀に書いた表札字がびびり

島根県　福間博利

リモコンをつけて置きたい孫の守り
立腹の訳を後から考える
カルシウム不足無性に腹が立つ
愛も恋も言わぬ夫婦で共白髪

羽曳野市　安芸田泰子

ご近所にない物はない店が出来
すみっこで歪な日本見て嗤う
一生の不作を二人共思い
高速に消える先祖の眠る丘

香川県　神保坊太郎

上ニギリ課長と食べたことがない
大都会怖いところと聞かされる
今日までの顔雑巾で拭いておく
釘一本打てない男用がない

米子市　池尾保子

誠実に生きて子宝　友宝
ローン終え夫の背中に手を合わす
陽だまりを歩き始めたペアシューズ
二人三脚ひも締め直しユーターン

大阪市　二宮紫鳳

週刊誌濡れ衣きせて知らん顔
袖口をひろげ代官水心
公約は当選までの期限付き

唐津市　林公一朗

どうしてもノーと言えない母ゆずり
嫁姑解ったつもり仲がいい
旅に出て旅する顔になっている

八尾市　砂田八寿子

天災も人の心は救えない
年下が後輩でない年の順
情念のやり場がなくて天を突く

尼崎市　長谷川佳山

明日よりも一日若い今の刻
気の合った同士で食べる値引きずし
今年また歳を重ねて梅漬ける

和歌山市　吉村さち子

新聞の切りぬきたまる部屋の中
じいちゃんを追い越す孫の背の高さ
あれこれと行事が多いメモ用紙

熊本市　北川一進

気が楽になったら声も軽くなり
幼児の笑顔になぜかホッとする
旨いそば食べて土産はそばを買う

堺市　井崎ミサ子

梅豊作焼酎漬けに五六本
梅豊作友にも少し分けてやり
手放せば思い出もある分譲地

熊本県　増田一乗

深夜ベル朗報を知り気が和む
一つだけ夫褒めたやさつき鉢
子三人　理系　文系　体育系

米子市　小塩智加恵

許せない私観音様でない
聞かザルに見ザル言わザルくたびれた
ケアー付き浮世はなれたわけでない

東京都　結城明玄

香水の強さ咎めてくれるひと
ペースメーカー電池まだまだある元気
考える余裕も持たずプッシュホン

横浜市　豊田羊子

臆病な恋を外野がそそのかす
照る日曇る日　走りつづけて来た昭和
梅雨の鬱ただもんもんと人を恋う

岡山県　国米きくゑ

菜種梅雨一病抱いて花遍路
陳情の鞄の中にかにを入れ
風に乗るひとときを待つ果報者

伊丹市　延寿庵野鶴

蛍火の青さ逢う瀬をかきたてる
安売りの卵の値段鶏知るや
雨の日は地図の上での旅たのし

宝塚市　飯西ミサヲ

昔むかしを売る店にいる茶髪の子
追ってくる歩幅見越している歩幅
土壇場の藁一本は譲れない

羽曳野市　芦田絢子

残ってる筈だと上戸よく覚え
出雲から行く先々で茶をよばれ
ボクの嗜好毒ばっかりか酒たばこ

倉吉市　田中八太朗

酔うてはるまた聞かされるおけさ節
雨止まず猫とタンゴを聞いていた
喜寿になるたった一つの顔で来た

大阪市　亀井円女

三面鏡飽かずに見入る退院日
咳込んだ母の背中に老いを見る
月末の数字に弱い妻のペン

兵庫県　森脇和子

痩せた肩苦労を詫びて揉んでいる
今日生きる自信のペダル漕いでいる
嘘ついたことが気がかり眠れない

益田市　岡田たけを

河内長野市　水谷笙子

エスカレーター大きな欠伸降りてくる
鳥たちに食われる野菜もとをかけ
雨の日は同じ思いで歯科が混む

兵庫県　円増純子

定年を待ってたように医者通い
不器用な人生だった悔いはない
老人と言う大学へ通ってる

高知県　桑名孝雄

おじいちゃんなんと響きがいいだろう
この辺であきらめなさい試着室
人間でなくてよかったムツゴロウ

兵庫県　倉垣恵美

山椒の煮かたたずねて来られても
ものさしがちょっと狂っただけのこと
童謡へおれはすてきなバイキンマン

大阪市　中橋恵美子

怪しからぬ年相応の服をくれ
改札で礼を言ってる無料パス
都合いい時老人にさせられる

新潟県　高野不二

今更ににくいと思う消費税
大臣も五パーセントか消費税
新聞に次の事件が待っている

横浜市　長島亜希子

誤字 脱字 部屋の暗さのせいにする
利口ではないがバカにもなりきれぬ
入らないかもしれぬ墓だが磨く

鳥取県　山内芳江

簡単に借りたお金が首をしめ
種蒔いてもう花の夢見ています
茶を出され値切る気持が失せてくる

堺市　梶本哲平

腹立てることも愚かな政官財
危機管理できぬ二代め三代め
世界から見た日本はマシュマロか

八王子市　播本充子

逃げて行きそう好調を口にせず
子の世界そんな馬鹿なが大手振り
結局は和食に還る迷い箸

大阪市　川久保睦子

グッドバイお茶碗一つ割りました
母が逝き父は黙って酒を飲む
うら返すお好み焼きに八つ当り

八尾市　山本宏

出来すぎた話で眉が乾きます
良薬ときけば何でも試すのみ
撫でさする他に術なし母介護

羽曳野市　内田さとみ

貼り薬夫の優しい手を借りて
緊張の糸はりつめた赤い服
紫陽花に語りかけてる朝の雨

松江市　松浦登志子

休むこと悪の時代に母は生き
シミのない白い肌への投資増え
梅たわわ首九〇度作業中

横浜市　菊地政勝

言いやすき部下への指示は速射砲
幸せは我が庭にあり妻と居て
夕焼けに多分明日も平和な日

大阪狭山市　伊藤尚子

口説かれて断わり切れぬ役をうけ
紫陽花を見ていて雨もまた楽し
後先を考えないでよく喋り

尼崎市　野瀬昌子

疑いはよそう私も傷がつく
父ちゃんの稼ぎで足りぬ教育費
署名捺印紙一枚にしばられる

唐津市　松本圭

美しい人に道きく知らぬ町
菊とバラ　チューリップなら知っている
夫に効く超能力を妻は持ち

尼崎市　岩倉キク子

五パーセントお前は何処で何してる
二親の逝きしあの日もさみだれよ
天国は遠いところと思ったが

岸和田市　亀井皎月

健康なだけの取り柄が消えて行く
変らない昨日も今日もまた明日も
好物のはいる胃袋二重底

唐津市　宗弘

佗び寂びは知らず軽々年を喰う
いつからか山の匂わぬ水を飲む
少々の悪人面が親しめる

松江市　浦辺静江

寒暖が極端すぎて迷う肌
掃除機は気分次第でよく動く
母の日にささやか過ぎた夕ごはん

鳥取市　宮脇道子

鶯は誰を待ってか鳴きつづけ
二十代もどりたくない訳がある
寂しいね先が見えなく花を植え

千葉県　大川晩翠

人力車混雑緩和走り出す
宝くじ様子見てから買うことに
喧嘩神輿うらみつらみで盛り上がる

鳥取県　石谷昭恵

汗かいて貯めれば税に持ち去られ
金もある資産もあるが嫁がない
困ること一杯あって生きている

松江市　安食友子

パートナーがおろおろしては昇れない
叱られる覚悟ボンドを買いに行く
警察を手玉に取るかファクシミリ

鳥取市　冨山雄幸

欲のない人に限って金が無い
必ずの向こうにエンマ鎮座する
夕涼み綺麗な女の裏が映え

横浜市　岡田芳江

ショーウインドーに眩しいほどの海がある
主婦業が板についたら子は巣立ち
ひまわりの一輪咲いてはしゃぎ出し

八尾市　井尻民子

鯉のぼり水が恋しい日もあろう
組当番もう一回り生きてるか
何くわぬ顔で国民だまされる

西宮市　井上俊二

ＯＢ会はしゃぎ回って若返る
白百合が忘れずに咲く娘の年忌
新緑を見上げてまぶし生きている

島根県　松本聖子

旨いねと言えば毎日膳にのり
ストレスにあれもこれもと服を買い
子の電話元気と言うが気にかかり

神戸市　船津とみ子

朝刊を読むわたくしの指定椅子
衣替え身に合わぬほど太るなり
ああ女化粧時間が長くなる

横浜市　荒井広和

足るを知り年金暮しにもゆとり
頂点の椅子で私欲の秘策練る
指切りのツケに時効がありません

静岡市　増田扶美

残り火をかきたて友と小さな旅
雨しとど菖蒲の私語がきこえ来る
新緑の木々それぞれに自己主張

静岡市　中西雅

小引出し亡夫の時計も永眠す
敷きつめたレンゲ田の上寝てみたい
花粉症なぜ孫だけをせめるのか

羽曳野市　山本たけし

食べ頃のメロン切るのは難しい
八月忌見つめ直そう平和呆け
ねぎらいの言葉励みになる仕事

諫めても五感が走る五月晴れ
世紀末地球が喘いでいるのです
倖せを溶かす絵の具の多面性

岡山県　土居　ひでの

桃梨のカラスが覗く袋かけ
小雨降る姑母の命日香をたく
鯉のぼり底なき空に広く舞う

兵庫県　高見末野

職引いて遮二無二生きた傷が癒え
新緑の風を切ってるDカップ
肩書きが欲しいと思う痩せ蛙

愛媛県　安野案山子

低金利今日もごそごそ欲のぞく
鑿を研ぎ心静かに仏像彫る
偏差値が未来にかける芽どめする

鳥取市　森本和子

老妻が共に住むのを恩に着せ
凝るものが無くて淋しい一万歩
取返し利かない古稀のロスタイム

横浜市　平達也

サングラスかけ恐くなるパパの顔
殺人鬼どんな顔して世を泣かす
火事見舞気の毒ですを聞きあきる

大阪市　鈴木トヨ子

母さんが荒れると猫が怯えだす
妻の気を引くたこ焼きを買うてくる
棚ボタの夢を見ているまだ見てる

尼崎市　森安夢之助

緑色絵皿に盛れば鳥の声
頑固だと言われる人の子供ずき
北の海越えれば亡夫の眠る国

出雲市　加藤スズコ

居るだけで心休まるから夫婦
魂が宇宙に迷う無信心
つき合えばやさしい心ごつい顔

高槻市　江原秀夫

結局は深いところで許しあい
若い頃古希はお化けか夢でした
ふくらみは名刺ばかりのさいふです

和歌山県　村中悦男

ターミナル疎遠の姉に会う絆
週刊誌噂話を斜め読み
口下手があるだけの世辞自営業

豊中市　岸田知香子

逢うた日が雨で訣れる日も雨で
両替屋株屋に強い総会屋
謝ってきたとは金を置いてきた

大阪市　尾崎黄紅

遺産分けはんこ一つでかたがつき
京都市　勝山美千代

買い溜めの物に賞味の期限切れ
万歩計出番なさそな走り梅雨
滋賀県　中宗明

真っ先に家内安全神頼み
負うた子にポイステ駄目と教えられ
うたた寝は駄目よと孫が揺り起す
愛媛県　宮本末子

感激の涙はこぼれずに乾く
紫陽花の雨に厨の灯が届き
子をなさぬ定めに生きて花氷
兵庫県　仲井素水

年金へ未だ生きてます証明書
かげろうのような九十の恋心
邪心つい老いも錯覚起しそう
今治市　中村好恵

デザインより軽さで靴を選っている
やさしいが女心に疎い人
クローンに頼んで旅に出ようかな
大阪市　平井露芳

水族館水を得たのが泳いどり
少子化へ産めよ増やせの手立てなし
さやさやと竹は嵯峨野の詩をうたう
鳥取県　国森武子

何年も話せぬ姉と目で話す
姉もあり妹もあり感謝する
姉の声母そっくりになってゆく
大阪府　澤田和重

頷いてばかりやっぱり頼りない
委任状出席あてにされてない
おしっこを溜めてツアーのバスが着く
大阪市　一本勇太

無為無策雑音だけの酒の宴
中間色好きで話題の外にいる
俺よりもうまく泳げと雑魚の父
兵庫県　緒方美津子

万歩計つけているから遠回り
ワープロでらくがきしても気は晴れず
参観日代休があり胸をはり
堺市　桜井荘次

なまごみを出して話の輪に入る
風のない辻で迷っている話題
釣竿のトンボに語りかける午後
島根県　谷岡ふみ

七夕に飾るわたしの一句です
七夕へ家族の願い多過ぎる
初盆のうわさ月日の早いこと

兵庫県　西川一粲

胃カメラが裁いた酒の放浪記
景色より土産をあさる妻の旅
旅に出て妻に付合う柏餅

愛媛県　黒田茂代

日に月に追いかけられてばかりいる
子育てを終えパワフルなシニア達
さよならは去りゆく愛のひとりごと

和歌山市　木村親踏

月末のデート財布に聞いてみる
見るからに酒豪のような顔で下戸
嫁姑仲よし小よしで気味悪い

鳥取市　福田登美

戦中派勲章のない生き残り
糠清けを食べる庶民も消費税
海外の便りに軽い餓えが見え

姫路市　服部一典

金婚式病気の妻よあと二年
父の忌へ三十年も多く生き
夢ですむ願望許す失楽園

東京都　清原悦子

内緒ごとばかりで肩が疲れます
二三日経ってほんとの事を言い
すれ違う時の会話は天気だけ

岸和田市　不破仁緑

舟賃は誰も同じだ三途川
母の味やっと摑んだ妻も老い
菜の花畑しばし子になり母になり

静岡市　宇佐美寿美

母病んで心寄せ合う家族の灯
身に余ることばが雑魚を背伸びさせ
灯を消すと遙かな刻がよみがえる

横浜市　宮村ちよ路

大腸と小腸つなぐ針仕事
かたつむり老後はもっとゆっくりか
嫁の笑み良薬として生きる喜寿

岡山県　富坂志重

朝早く頑張っている洗濯機
青春の道より長い老いの道
老い淋し尾を振る姿かもしれぬ

富田林市　大橋鐘造

今日ハイド明日はジキルで忙しい
役に立つ杭から先に叩かれる
勇み足なまけ者ではない証拠

横浜市　丹下智洋子

病歴が勲章めいて長寿会
くすり飲む為に三食食べている
建て売りの横に動かぬ古地蔵

太陽が肌に水着の判を捺す
太陽を失敬してる温水器
太陽の子をファミコンが連れてゆく

和歌山県　中後清史

井戸端の話聞いてる赤い薔薇
まあだだよ　もういいよとは言わないで
平凡な頭でゆっくり歩きます

富田林市　杉本とも子

時を止めその断面を見詰めたい
気にすまいやきもきしてもはじまらぬ
携電のベルで話の腰が折れ

高槻市　左右田泰雄

毎日が慌ただしくて歳忘れ
毎日の日課は笑うことにする
一日の疲れをさすり合う夫婦

鳥取県　橋谷静江

大掃除棚のへそくり落ちてくる
煙草一服よい考えが出て来そう
終電車本を開いてよく眠る

尼崎市　中澤向西

巧妙な手がからみ合う水面下
夜の蜘蛛こっそり逃がすのもなさけ
妥協ばっかりのっぺらぼうの顔になる

和歌山市　山根めぐみ

月曜日リハビリ再開武者ぶるい
車椅子今日は好い日になるのかな
カルテにも書けぬ私の処方箋
秒読みで走る私のスケジュール
聞く耳を持たない妻でよく動く
天才も狂気どちらも変り者

八尾市　鷲見章

萌える春何も言わずに咲いている
悪口は大きいつぼに入れて置く
大声で呼びあうこともなく暮れる
さからわず風のまにまに蔓は伸び
五月雨のしみじみと降り人を恋う
このさつき亡夫に殉死か枯れそうな

出雲市　栂ミツエ

優勢の筈が妻には何時も負け
絵日記に書いた朝顔蛍狩り
旅のあと恥ずかしいほど眠れます
フルムーン宣伝のない宿に決め

唐津市　岩崎實

尼崎市　小川富江

守口市　石森利昭

横浜市　保田絹子

普段着のクラス会ならまた出よう　横浜市　後藤早智

いい夢を見よう今日から羽布団　兵庫県　安達厚

寒がりと暑がりのまま五十年
性格の違う夫婦でどこか合う　松江市　松本知恵子

理数系答ひとつがさみしいな
不如帰鳴いてる山でふっ切れる　出雲市　岡あきら

仏様相伴しますいい香気
無職でも一人前の奉賀帳　松江市　佐野木みえ

芦の湖の波しぶきあげ遊覧船
亡母の年越えて紬を出してみる　兵庫県　植村雄太郎

八という数字が好きで賭けてみる
寝てないというが鮒はすさまじい　尼崎市　内田美也子

夕映えの雲はゆっくり日を惜しむ
さくらんぼそっと拾った雨上がり　愛媛県　中居善信

新鮮が取り柄いびつなキュウリ取る
窓際でいるとだんだん錆びてくる　和歌山市　和田美寿子

孫結婚日々淋しくて曽孫待つ
白髪染め十歳若くなった老い　鳥取県　山本崇

年金で泳ぐ世間に弥陀の風
咳二つ風邪でないかと妻の声　横浜市　福田由美子

ぜんそくの発作夜中を支配する
初めての顔をしている聞き上手　北海道　中里つね一

ねんごろにお参りすれば夢に亡妻
なぞなぞを解いて爺のカブあがる　鳥取市　森明美

王冠を歯で抜く顔は乱である
花弁みなむらさきにして他人の妻　和泉市　横山捷也

本心が見えぬ貴方を覆う霧
上げた手をおろして心晴れぬまま　東大阪市　北村賢子

お別れにせめて残していい笑顔
せき止めた干潟のいのち返してよ　鳥取市　近藤秋星

長話アイスクリーム溶けちゃうぞ
一週間休園させた夏の風邪

歩き電話狭い日本なぜ急ぐ
池田市　木村一笛

好きやねんどこから見ても好きやねん
鳥取県　近藤春恵

ふところにとげしのばせて会いに行く
日立市　加藤権悟

冷凍魚海を泳いだ日を忘れ
羽曳野市　西村りつえ

ポイ捨ての男を叱る鬼瓦
尼崎市　尾宮弘治

因習の流れを変えるのは茶髪
和歌山県　中村君枝

言い訳が上手になって友が去り
三重県　佐々木森哉

何もかも薄味になり珊瑚婚
和歌山県　藤井春子

難聴でひとり合点のいい笑顔
福岡県　本田忠男

異国への便り宛名は孫のペン
倉吉市　大下智子

水切りも火あぶりもありバラの生
大阪府　団野恒

三人の孫に尽くした日曜日
尼崎市　古川正子

鑿鉋研ぐ父の背は婿養子
尼崎市　的場十四郎

バッカスと肩組む父の千鳥足
横浜市　近藤道子

サクランボ熟れて他人に貰われる
橿原市　西本保夫

ほっとひと息田植の後の深眠り
川崎市　和泉見早子

父はまだ老農らしく大地踏む

首切りの噂が会社固くする

嫌なことあって野菜を乱切りに

電話する声がしだいに乱気流

一員の顔して曽孫天の笑み

初出勤孫の口調も大人びて

歳重ね移る季節の早いこと

朝火照る折鶴蘭に蕾みる

点滴に再起の声を弾ませる

ご近所の噂話をする茶の間

何かあるなにかあるから胸さわぎ

そっとしておきたいミスにふれられる

増築の足場の中の近い夢

来てほしい来客ピックアップする

薬草に明るくなって医者と揉め

家族みな竿に泳がす雨あがり

島根県　菅田かつ子

本棚で埃被ったままにされ

さようなら何だか淋しい言葉だね

東京都　井上つよし

叱っても妻にはなつく隣の子

呑み込んで委細承知のひきがえる

鳥取県　吉田孔美子

レシートがたまり家計簿吐息する

初孫の報こんなにも浮かれちゃい

尼崎市　河津正治

にらめっこ羅漢がみんな亡母に見え

リストラの風ああ青春の志

横浜市　生坂サト子

日めくりの通りにゆかぬダイエット

逆光の写真で皺が救われる

北九州市　岡田幸生

改題に騙され買った古い本

A型の妻にO型怒鳴られる

泉佐野市　大工静子

合鍵を隠して知らぬ顔をする

鳩のほか誰も来まへん日曜日

松江市　川本畔

どの影もかなしみながら佇っている

遠茜うしろめたさが残っている

鳥取県　垳寛子

子離れの出来ない距離でつつがなし

聞きもせず聞いても返事してくれず

香川県　向山治延

もう何年車椅子押す妻も老い

五百羅漢亡母の似顔に手を合わし

大阪市　塩谷徳子

掃除だけいそいそとして子は帰り

友が来る今日はかたづけ忙しい

高槻市　執行稲子

花いらんかね素朴な絣春の使者

ことごとに杭打ちたがるあまのじゃく

豊中市　みきわきみ

不作為のくせして何が大過なく

電柱と線を省いて風景画

兵庫県　谷田多美子

父の忌と母の忌ダブる木の芽和え

一病が二病になって口達者

富田林市　欄智久

ペタペタと金属疲労かサロンパス

留守電話返事ないので頼りなし

鳥取市　山本益子

良い躾セルフサービス子も倣う

満たされた施設で老いは背伸びする

東大阪市　松山　隆

カタカナの見出しを怒る老眼鏡
里の枇杷思春期らしい頬かむり

兵庫県　中野とよ子

新緑の窓に一日居て倦まず
幸福の切符はヤジロベーが買う

岡山市　清水金太郎

頑張れと雑草同士助け合う
妻強し失意の朝も米をとぐ

鳥取市　石上悦子

犬好きの私に吠えるとは無礼
父の日に贈ったお茶が飾られる

堺市　上野楽生

僕にだけちぎれるくらいシッポ振る
本物を食べて長生きしています

兵庫県　徳平毬子

負けん気もどうでもいいや元気なら
孫に明け孫に暮れてる還暦日

吹田市　野下之男

買わんでも本屋回りでリフレッシュ
カミさんがうまく仕込んだ伝書鳩

鳥取県　権代康女

懸命に生きた自分に胸を張る
胸に住む鬼が時々顔を出す

広島県　山本示風

草鞋履き五十三次してみたい
正直な百姓さんが馬鹿を見る

倉敷市　家守政子

体型は盆栽ならば値打ちもの
出る時は美人のつもり美容院

庫津市　江川青琴

老犬は肥満になってねてばかり
お年頃光って見える孫娘

横浜市　明渡トヨ子

頷いて返す言葉を考える
世が狂い喜怒哀楽の怒が多い

大阪市　島崎孝一

平成に雷落とす親父なく
ローカル線なまり言葉に亡母の影

島根県　槻谷仲子

若夫婦孫中心のお付き合い
エネルギー女豊かなおしゃべりも

枚方市　大舁隆広

エレベーター扉の方を向いて立ち
大病の話みやげに復帰する

大阪府　井上千代子

汗水を流した金も同じ利子
七転びしたが八起きが出来ず老い

ふり向けば靴音ばかり春の闇　東大阪市　今岡貞人

八方美人広げ広げてひとりぼち　高槻市　小林一閑

風鈴を軒に吊るして風を呼ぶ

平均寿命医療費ともに引き上げる

第15回 夜市川柳大会

とき 8月3日（日）午前11時から

ところ 堺市総合福祉会館

兼題と選者

「奥様」奥田みつ子選
「高い」高橋夕花選
「朝」大内朝子選
「希望」山本希久子選
「三」三宅保州選
「笑う」河内天笑選
「代る」春城年代選
「勇気」一本勇太選
「新しい」新家完司選
「小さい」小島蘭幸選

会費 二〇〇〇円・各題二句・出句締切午後1時

◎懇親宴は5時―7時「犬吉」会費四〇〇〇円

残暑お見舞い申し上げます

翠洋会

橘高薫風　住谷石舟
高杉鬼遊　高杉千歩
稲本凡子　田中正坊
石原靖巳　谷口義
井上照子　津村志華子
井上源一　寺井東雲
指宿千枝子　中村叡子
上田佳秋　長浜澄子
梅田宣司　西出楓楽
岡本久峰　藤井正雄
奥田みつ子　藤村宏子
北田綾子　古川喜美子
栗谷春子　古谷ひろ子
黒田真砂　堀江光子
古今堂蕉子　松永会美
児玉蛙　山本希久子
小林周信　米田恭昌
清水絹子　渡部さと美
柴田英壬子

秀句鑑賞

―水煙抄

―7月号から

藤井正雄

百態の靴が改札駆け抜ける

荒井広和

通勤のラッシュアワーを東京で経験した私には、この句以上のすさまじいものでした。

スーパーの籠重くする子の帰省

川島良子

「明日帰る息子へ愛の米をとぐ」古い拙句ですが、いずこも同じ親心を感じました。

年金で暮らししぶちん板につき

篠原いつふみ

「しぶちん」関西弁が旨く生かされて、諸物価高騰・消費税アップに対応して当然こうなることでしょう。

実力を持った二番手三番手

早川盛夫

折角勝ち取った椅子も、うかうかしておれず、会社でも勝負の世界でも常に厳しい局面に立たされている。

全自動男が洗濯好きになる

越智青園

誇張が許される川柳で、洗濯が好きにはなれないが、全自動って大変便利でいいものだと思いました。

スイッチを入れずに騒ぐ初歩のミス

大村正雄

日常よくあることで、新しく買ったパソコンが作動しないので、故障かと早合点し電源が入ってないのに気がつきほっとしました。

中立の僕に火の粉が飛んで来る

安野案山子

会社でも家庭でも、とばっちりをよく受ける。何の因果か訳が分からないままに。

一戸建てどうだどうだと鯉のぼり

軸丸勝巳

念願叶ったマイホームに、青空高く鯉のぼりを上げる。意気揚々、わが家の春を謳歌。

腕組んで正座に負けている胡坐

藤田芳郎

負けを悟ってふてぶてしく腕を組み、胡坐をかいている様が旨く描写されている。

耳よりな話は欲が目を覚ます

乙倉武史

老若男女を問わず、自分に都合の良い話には欲が先行して乗り気いっぱい。

いい友といい酒酌んでいい話

西岡豊

川柳の表現にはリズム感が大事で、「いい」を三度もリフレインした佳句。

砂時計老いの鼓動に早すぎる

稲葉洋

年齢とともにバタバタするのは好まないのに、砂時計は少々忙しく思う共感句。

転んでも身綺麗ならば助けられ

結城明玄

美人でなくとも、身奇麗な人なら他人を退け進んで助けてあげます。日ごろから身なりには充分意を用いましょう。

越す家の最後に採れた豆の味

豊田羊子

永年住み慣れたわが家を何かの都合で引っ越さねばならなくなって、愛着ひとしおの感じを豆に表現された佳句。

湯豆腐の湯気が優しい夫婦箸

加藤権悟

老夫婦だけで寂しいが、睦まじくつつく湯豆腐の湯気の中に幸せがある。

これ以上小さく切れぬ試食菓子

村中悦男

おしゃべりの楽しい人の側に寄る

井上俊二

湖畔抄

八木千代選

疑わず出されたお茶は飲んでいる　八尾市　村上　剛治
ありふれた今日をくるりとフライパン　和歌山市　木本　朱夏
自分から裏まで見せることもなし　富田林市　藤田　泰子
独唱の時は見事な笛の音だ　米子市　鷲見　正子
取りたてて善いこともせず黄昏れる　和歌山市　堀畑　靖子
嵐が去っても暫くは臥したまま　島根県　松本　文子
聖書から飛び出た鳩が戻らない　和歌山市　川上　大輪
善悪のはざまの縄が切れている　米子市　林　荒介
皿を割る爽快感が怖くなる　和歌山市　古久保和子
毎日が初めて貨車は野に向かう　鳥取県　鈴木　公弘
八月をまだ意識するのどぼとけ　藤井寺市　高田美代子
こころの穴で静かに眠れハリネズミ　鳥取県　新家　完司
大切なもの大切に置き忘れ　寝屋川市　森　茜
茶柱の和みはノーベル賞もんだ　兵庫県　遠山　可住
そろそろと本音が混じる腹式呼吸　西宮市　牧渕富喜子
軽食が続き人間軽くなる　米子市　政岡日枝子
さり気なくメロンを腐らせてみたい　和歌山市　川上　富湖
バス停に毒草伸びて恙なし　鳥取市　石上　悦子
お悔やみがはっきり言える年になり　松原市　小池しげお
線香の煙は外へ出たがらぬ　海南市　三宅　保州

道草をした人なのだ温かい　米子市　青戸　田鶴
梅壺を覗く日課になっている　八尾市　高橋　夕花
玄関から内では顎でつかわれる　岡山県　小林　妻子
何でもない今日が終え　計る体重　和歌山市　榎原　公子
ストレスが溜まり法螺まで錆びついた　鳥取県　谷口　次男
小手毬のまさか謀反は考えぬ　和歌山市　福井　桂香
くじ当たり隣静かになりはった　和歌山市　福本　英子
うしろ指さされたらすぐ振り返る　倉吉市　松本よしえ
円座にも順位ひとりを値踏みする　和歌山市　桜井　千秀
どしゃ降りが好きだ流れて消えるから　米子市　茂理　高代
ふたしかな記憶と雨の街歩く　吹田市　山本希久子
しまいこんだら二度と陽の目を見ない本　寝屋川市　江口　度
戻らねばならぬ道だと道しるべ　羽曳野市　芦田　絢子
わたしのポケットまで伸びてきた政治　米子市　林　瑞枝
ほんの近くで住んでいる娘と糸紡ぐ　尼崎市　春城　年代
マイナスの道かも知れぬ　なお歩く　西宮市　奥田みつ子
その人のくらしが覗く足の裏　八尾市　宮西　弥生
わたしを責める小さな水の音　和歌山市　岩本美智子
よけられぬ波で真っ向から挑む　米子市　木村富美子
その先を知ろうと草も木も伸びる　綾部市　藤田　芳郎
老人車苗木一本購うてゆき　弘前市　斉藤　劦
夢の樹につくつくほうし啼いている　和歌山市　野々　圭子
雨音の聞こえぬビルにある暮らし　兵庫県　大谷幸次郎
修理して使えば愛がわいてくる　西宮市　西口いわゑ
もう寝ようオレンジ色の月が出たから　鳥取県　林　露杖
折り返し点から敵意消えている　砂川市　大橋　政良

甘い水飲んで油断のない蛍
暗闇のわたしを探す蛍かも
落とし蓋の下で女の業が煮え
面構え達磨大師の上をゆく
風に逆らい葦はきりりと立っている
暮れやすく俎上に上すものえらぶ
紫陽花の凜と定めに逆らわず
ニッポンのなにもかにもが狂ってる
身籠ったリンゴの花が光り出す
踏まれても僕のタンポポ立ち上がる
生い立ち記　繰れば変わらぬ茄子の花
藁一本つかみ損ねて流される
母老いて童話の国になった居間
ガラス皿に女盛りたいものがある
こじんまり暮らし後頭部がゆるむ
流されているのか宙に浮いている
手を挙げて貧乏くじを引いている
何色にも染まるつもりのない白だ
貴重品考え過ぎず納っておく
どうしても言えない嘘を噛みこなす
なんとなく哀しいもんだネオンの灯
茂っても枯れても里の山は山
まとめ役人の火かげん水かげん
機上から見てはいけない富士を見た
溜息を鏡の前でつく姿
生年月日忘れ余生の灯をともす

唐津市　田口　虹汀
鳥取県　乾　隆風
倉敷市　小野　克枝
弘前市　一戸　ツネ
倉吉市　淡路ゆり子
米子市　白根　ふみ
大阪市　津守　柳伸
豊中市　田中　正坊
富田林市　中井　アキ
弘前市　中山　雅城
岡山県　矢内寿恵子
大阪市　鍛原　千里
唐津市　久保　正剣
米子市　石垣　花子
鳥取県　田村きみ子
米子市　澤田　千春
松原市　玉置　重人
守口市　結城　君子
貝塚市　池田寿美子
和歌山市　吉村さち子
大阪市　桝本　露児
出雲市　竹治ちかし
和歌山市　山根めぐみ
横浜市　宮村ちよ路
鳥取県　土橋はるお
尼崎市　春城武庫坊

幕閉じるまでは渡せぬ玉手箱
一人で食べ一人で遊び一人寝る
美しい女に会うため生きている
身の内の哀を集めて流す川
オープンの花屋の花に負けている
左手は支えるために空けておく
抛物線土に還る日近いよな
ラッピング手渡すまでの自己主張
あてのないこれからだから塵払う
エンピツの構図に書いてない予算
勝ち気故　勝負事には手を出さぬ
じっと目をのぞいて猫に隙がない
頑張れと子にプレッシャーかけている
大げさなため息妻の演技だな
そのときが来ればと思うことを書く
あじさいが好きと聞いては踏み切れず
タレントの葬儀タレント派手に泣く
ちょっぴりと一人の祭り泣けそうで
幸せの女の形に嵌めたがる
棘のないバラが花屋で売れ残る
逃げ水に幻惑されて来た足だ
母子草　あなたも抜けぬ草むしり
六月の鬱まな板でぶつ切りに
翔ぶ鳥もとべない鳥も餌をやる
なぐさめは心の闇に棲むほたる
満ち足りた淋しがり屋が飲むコーヒー

高槻市　乙倉　武史
堺　市　志田　千代
鳥取県　土橋　螢
西宮市　門谷たず子
大阪市　神夏磯典子
鳥取県　上田　俊路
泉佐野市　稲葉　洋
横浜市　岡田　芳江
川西市　松本ただし
鳥取市　植田　一京
羽曳野市　川田　晋
横浜市　菱田　満秋
和歌山市　山口三千子
八尾市　村上ミツ子
鳥取県　西原　艶子
和泉市　岡井やすお
箕面市　岩津ようじ
大阪市　日阪　秋子
横浜市　丹下智洋子
箕面市　椎江　清芳
弘前市　高橋　岳水
寝屋川市　籠島　恵子
尼崎市　長浜　澄子
羽曳野市　田中　透太
奈良市　米田　恭昌
松江市　川本　畔

人間くさい遺言を書き生き延びる
無に還る雨を味方と思うとき
竜宮が見えそう海も凪いでいる
情報過多なにを信じてよいのやら
風たちが支えてくれる坂がある
スランプへ鉛筆ばかりよく折れる
どの顔も今日を占う寺の門
留守番で庭のあやめとする読書
赤ちゃんの寝息きいてる母の背な
しあわせが転んでいつも見当たらず
ふくろうが森のしじまを深くする
娘の恋はアップルパイに似た甘さ
仕方なくコーヒーに凝るひとり者
目印の最後の星を決めておく
昔々おいしい水が湧いた井戸
五色まで下げてる虹のダイエット
雨期乾期記憶が闇へ消えてゆく
ダンベルでポパイになってゆくわたし
翔ぼうかなまだ勢いのあるうちに
缶ビール開けてふたりの時間帯
泣きやんで女謀反を考える
二三枚暦を剝いで無為無策
ひまわりの愛は束の間真の闇
あかさたな女は耐えることを知る
寒い私に薔薇一輪という情け
早起きの褒美神秘な雲の芸

弘前市　佐治千加子
大阪市　三浦千津子
香川県　木村あきら
大阪市　本間満津子
鳥取県　橋本多哥由
今治市　塩路よしみ
兵庫県　北川とみ子
茨木市　藤井　正雄
堺　市　上野　楽生
兵庫県　中野とよ子
熊本県　高野　宵草
和歌山県　杉山　精子
寝屋川市　岸野あやめ
米子市　中井　ゆき
京都市　都倉　求芽
今治市　矢野　佳雲
三重県　佐々木森哉
横浜市　川島　良子
鳥取県　石谷美恵子
和歌山市　宮口　克子
倉敷市　田辺　炎六
今治市　月原　宵明
出雲市　石倉芙佐子
羽曳野市　吉川　寿美
岡山県　山本　玉恵
米子市　木村　春枝

武士道の本買いに行く新社長
綿飴の前で坊やに根が生える
青い鳥二の足踏んだばっかりに
おなじみの旨い店あり街動く
贅沢な隙間風吹く倦怠期
紫陽花の挿穂に余命考える
金の無い今が一番うまくいき
若い血に燃えた手帳は捨てられぬ
気をへそに集中させてへそルック
期待して期待つづけて老いにけり
白いクロス銀のフォークがかしこまる
小糠雨ゆっくり老いる生命線
風の便りなおさざ波の立つ心
傷ついてやがて優しい虹になる
眠気誘う本何冊か持っている
ひざまずく姿で法話聞いている
今日もキラキラ今日が一番若いから

唐津市　仁部　四郎
黒石市　相馬　一花
富田林市　片岡智恵子
寝屋川市　平松かすみ
出雲市　園山多賀子
大阪市　北　勝美
大山市　早川　盛夫
鳥取市　美田　旋風
大阪市　渡部さと美
唐津市　山門　タミ
和歌山市　楠見　章子
大阪市　川久保睦子
寝屋川市　堀江　光子
鳥取県　土橋　睦子
枚方市　前　たもつ
愛媛県　中居　善信
今治市　中村　好恵

村上剛治さんの疑わぬお茶には斬りつけられた思いでした。よく考えてみれば疑いだらけの世の中、何からなにまで安心できる事は一つもありません。それでも生きている限りは、たくさんの哀しみに遭いながら缶コーヒーでも他所のお茶でも飲む、そんなふつうのことを大きな背景で書いてあります。**木本朱夏**さんのフライパンは鮮やかなものです。今日もまたいつもの定型で明けては暮れるのかと呟いて誰もがキッチンに立つのですけれど、ここに魔術師の登場。小道具はフライパンでした。日常を非日常に変える、川柳もフライパンですねぇ。**藤田泰子**さんの裏に同感します。風通しすることは必要ですが、わざわざ見せる趣味はありませんものね。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (79)

橘高薫風

その福田山雨楼の「編集の窓」を読むと▽本号は意外の延刊となった。主幹の病気と編集に携っているわれわれが旅行その他の止むなき用務のため事を欠いたのである。▽陶泓居松竹梅のつどいは乱耽記の通り、大変なごやかな風流たっぷりなものであったが僕は年末からの風邪で欠席、正に千歳一遇の機を逸した。などとあるので、今回は小さな記事にまで目を通すことにした。当時の柳界の様子が窺えるので後世に役立つ記事は書き止めて置くのはいい事だ。

「誹風松竹梅のつどい」は一月七日陶泓居（芦屋の食満南北居）で開かれ、灘の松竹梅を飲みながらの作句と隠し芸の披露で、庵主を入れて十名の参加、病の路郎先生も出席、「松竹梅」の選をしておられる。

よせ書のこれで松竹梅になり　東魚
松竹梅はたきが派手に使われず　艸楽
松竹梅におい夫人もまた匂い　乱耽
貧しくも松竹梅は床にあり　汀柳

もう一つの席題「上戸」は庵主南北の選。

女にももてて上戸のよく語り　緑雨
陶泓居下戸は入るなと書いてなし　正光
靴のひも結ばせ上戸まだ行く気　路郎
鰭酒を半分残す泣上戸　正光
ことしこそ死ぬと上戸の面白さ　南北

一月十七日に「橋本緑雨氏祝賀の夕」なる功労章授与式が川柳雑誌社倶楽部で催された。川柳雑誌の第二巻八号より事務所を引き受けて雑誌発行に尽力された貢献による。

また「上汐町から」の欄には各地からの便りが簡潔に紹介されている。次に一部を抄出。

▽京都の子鬼、甫三、司郎、黄子朗、治一郎陸平の諸君は一月三日城崎温泉に行かれた寄書を頂きました。
▽名古屋三香会の可香、呂香、世香の三君は一月三日本社事務所、路郎主幹宅へ来訪。
▽村田周魚氏は三日伊勢大廟へ参拝されました。
▽富士野鞍馬氏は一月五日東京を出立、二十日頃まで北海道へ旅行されました。

一人旅冬のビールに味があり　鞍馬
▽白柳子居新年小集十日に催され寄書を頂きました。
▽小川百雷君は山村夏子嬢と岸本水府氏夫妻の媒酌で華燭の典を挙げられ、そのお祝の会は十二月心交社食堂で催られました。
▽橋本緑雨夫妻は一月十八日紀州白浜温泉に遊ばれました。

温泉へ二人で来るは始めなり　美那子
白浜は松原続きに湯の匂い　緑雨

▽岸本水府氏は十九日BKより「八百八橋」を放送されました。
▽阪井久良伎翁六十七回誕辰祝賀会は二十五日、東京王子扇屋に於て催されました。
▽本社八束支部のある島根県津田村が松江市と合併されたため支部も松江支部と合流されました。尚同支部は本年五周年を迎えるため目下記念大会の計画が着々進捗しています。
▽剣花坊句碑建立の基金募集を発表されました。建立期日は昭和十年秋の予定、場所及び代表句の選定は未定、募集基金一口金五十銭とし〆切は五月末日、柳樽寺川柳会宛。
▽福田山雨楼君は一月下旬松阪、和歌山へ出張されました。

社告の欄に「岡田某人君は本社同人として入社され社章78を交附しました」とある。

女性コーナー

茜香の女

西出楓楽選

頑張れよなんてドラマの外にいる
性格は陽気と答え疲れ気味
しあわせな顔につくっていく化粧
愛も憎も流して海の塩辛さ
曖昧な返事に隙が見当らず
うっかりと振ったシッポがたためない
すこし健気にわたしを責めるそば枕
病人らしくしろと言うから治らない
この星にお礼を言ったことがない
白内障治りストレス殖えました
思い出の数だけバラを買ってくる
連れあいと言う言葉ふと温かし
限界を知って鳥が去ってゆく
口車に乗るところころよく転ぶ
流れをかえるための寝返り打っている
若葉マークの愛にたっぷり水をやる
すぐ底が見えるボキャブラリーの袋
とっておきの顔を鏡台から探す
ひとりの刻を大事に生きる酔芙蓉

八王子市　播本　充子
大阪府　大森　年子
八尾市　大内　朝子
今治市　村上久美子
寝屋川市　堀江　光子
鳥取県　岩崎みさ江
西宮市　門谷たず子
鳥取市　坂田和歌子
和歌山市　山根めぐみ
横浜市　保田　絹子
羽曳野市　芦田　絢子
大阪市　三浦千津子
和歌山市　福井　桂香
米子市　石垣　花子
鳥取市　森　明美
和歌山市　木本　朱夏
和歌山市　川上　富湖
和歌山市　古久保和子
吹田市　山本希久子

手作りの袋に老母は忍をつめ
疲れたと言わずに止り木を探す
バラの刺まさかの時の銃だろう
息苦しくなって来たので模様替え
マイナスをプラスに変えている笑顔
忘れては困る事から忘れてる
月光にマイナス思考追い払う
お互いさまの思い違いかあじさいよ
菜を刻む妻の心が読めますか
一人じゃないとカーネーションに諭される
よく回る口をポカンと見てるだけ
諦めてしまえば恐いものがない
つけかえる面がないから素顔です
石積んで積んで自分を見失う
染まりやすいが迷彩色になりきれぬ
欠点を個性的だと褒められる
まだ逝けぬつくろい物が溜めてある
今は過渡期　豆の煮つまるのを待とう
自然体で歩けば楽になってくる
ぬるま湯に浸り悦が上がらない
端っこを歩いてゆっくりする余生
山の鐘　今日を昨日に追いつめる
流れ星わたしの終もこのように
反省の時間をくれた夕茜
あじさいが入梅を待つ色になる

大阪市　鍛原　千里
藤井寺市　高田美代子
米子市　政岡日枝子
富田林市　藤田　泰子
西宮市　西口いわゑ
倉吉市　淡路ゆり子
西宮市　奥田みつ子
尼崎市　春城　年代
横浜市　岡田　芳江
大阪市　日阪　秋子
和歌山市　福本　英子
大阪市　神夏磯典子
鳥取県　さえきやえ
大阪市　稲本　凡子
米子市　白根　ふみ
鳥取市　植田　一京
寝屋川市　井上すみれ
倉敷市　小野　克枝
米子市　青戸　田鶴
出雲市　園山多賀子
出雲市　石倉芙佐子
寝屋川市　太田とし子
今治市　野村　京子
尼崎市　長浜　澄子
横浜市　福田由美子

うそをつく鏡が並ぶ美容室
妻のおく栞の頁読んでいる
肩の荷がおりて喫水線かわる
頼られていますため息ついてます
黄門さまのお出ましを待つ世の腐敗
生活のリズム五七五に変える
水溜まりわたしを強くしてくれた
新しい夢が見たくて種をまく
大正二桁　不倫賛歌へ物申す
バレンシャが黄ばむ母の忌近くなる
見抜いてるポーカーフェイスの羅漢さん
そうだそうだと風鈴揺れる無責任
胸の扉ひらいてくれた白牡丹
それが長所　小言のすえに褒められた
お酒出てやんわり一矢とんでくる
家事みんな忘れて回る菖蒲園
うすうすは知ってて知らぬ顔で聞く
赤信号　風といっしょに立止まる
縄とびの子に明日がある夕茜
出欠は椅子か畳か聞いて決め
サービスのつもりだろうかよく喋る
双方の言い分左右交差させ
花の声に覗いた家のあたたかさ
能面の古色悲しい女彩
子は育ち秒針のない腕時計

守口市　結城　君子
鳥取市　石谷美恵子
寝屋川市　籠島　恵子
鳥取県　西原　艶子
岡山市　川端　柳子
和歌山市　山口三千子
八尾市　高橋　夕花
米子市　澤田　千春
和歌山市　桜井　千秀
和歌山市　岩本美智子
大阪市　川久保睦子
八尾市　村上ミツ子
米子市　林　瑞枝
大阪市　藤田頂留子
大阪市　渡部さと美
八尾市　生嶋ますみ
松江市　浦辺　静江
今治市　中村　好恵
熊本市　永田　俊子
大阪市　本間満津子
倉吉市　野口　節子
大阪市　松尾柳右子
大阪市　町田　達子
横浜市　宮村ちよ路
鳥取市　石上　悦子

不器用にくれた指輪で縛られる
風船に肺活量を笑われる
梅らっきょ漬けて姑さんつつがなし
愛想の悪さを味が庇う店
十戒を破りロマンの花ざかり
楢山へゆっくりゆくと決めました
糠床をまぜたところへピンポーン
脚光の後のギャップは真暗闇
姿よりハートで生きる人が好き
ふっ切れた鏡の顔が晴れている
強烈な刺激　孤独な失楽園
寅さんが好きで他人と他人つなぐ
適齢期　姉だ妹だ言ってれず

鳥取市　福田　登美
岡山県　富坂　志重
和歌山市　細川　稚代
横浜市　丹下智洋子
岡山県　矢内寿恵子
今治市　塩路よしみ
寝屋川市　森　茜
和歌山市　森口　美羽
米子市　永井三津子
大阪市　小泉　久子
大阪市　津守　柳伸
八尾市　宮西　弥生
鳥取市　前田　一枝

充子さんの句―そう言えば私達は、安易に「頑張れ」を使い過ぎているかも知れない。時によって言われた側は、無責任に下駄を預けられ、つき放されたような気分に追い込まれるであろう。ちなみに、うつ病の人への「頑張れ」は禁句で、よけいに症状が悪くなるそうだ。**年子さんの句**―人間の性格はひとことで割切れるものでなく、長所と短所は表裏一体であり、短所を卑下することはない。本来でない陽気さを前面に出し、引込みがつかなくなった戸惑いが、下五で過不足なく表現されている。**朝子さんの句**―その日の気分によって化粧がめんどうで、女にうまれたことをうらみたくなる。しかし、そんな時こそ気分を引立てるため化粧が必要と言えよう。作者の前向きな生き方が伝わってくる。**久美子さんの句**―ためらわず言い切ってあるところに説得力がある。「海の塩辛さ」の新しい発見にひかれた。一年間の投句、有難うございました。

吟　課　題

裏

池森子選

お金持ち専用とある裏の門　好恵
裏階段鬼の出口につけて置く　潮華
裏側に回ると妻が待っていた　伊津志
裏方に自負ありエプロン放さない　シマ子
裏道で生きる男のサングラス　美羽
おもしろい噂の裏に泣かされる　狸村
鏡の裏に母を隠した跡がある　富喜子
わたくしの素顔鏡の裏に置く　和重
裏を読む哀しい眼鏡かけている　時弘
目の位置を変えると見える人の裏　京子
裏口へ回りその奥いい話　羊子
つぶやきの一語に裏をかぎつける　愛論
悲劇の裏にひょいと隠れている喜劇　みつこ
人の世の裏側許り見て孤独　ひで
裏側で影が主役になりたがる　富美子
その裏が読めない姑の含み針　寿美
階段の裏あらためてから上がる　諷云児
裏側で裸になっている本音　剛治
裏返した私を干してみたいもの　保州
裏切って長いトンネル長い冬　正雄
サングラスの裏にいるほんとのわたし　省子
裏の畑に幸福の種を蒔く　劦

軒裏に来年実る種袋　しげお
裏通り犬にきかせているピアノ　とし子
金糸銀糸裏は誰にも見せませぬ　典子
温かいはなしの裏を触るくせ　隆盛
信じたら裏は覗かぬカタツムリ　仁緑
九回の裏球場の真っ二つ　芳郎
散華したいのちは裏に刻んでる　勝巳
裏窓は傷の深さを語らない　勇太
好奇心裏から人を料理する　政良
冷や奴裏も表もない暮らし　たず子
裏店のおしゃべり好きな植木鉢　宏
裏道に疎くて風を見失う　哲子
コーヒーが冷たくなった裏話　黎之助
打った手が裏目に返る北の波　(海)洋
九回の裏に出るべき人が出る　ちかし
佳
トリックを裏に美しい笑顔　達子
裏ばかり見てひまわりを忘れてる　俊路
ふと思う虹の裏には亡父がいる　美津子
ライオンが裏山にいる飢餓の国　楽生
ぎしぎしと肋の裏で風が病む　美代子
人
いつも嵌まる裏山のブラックホール　日枝子
地
本音知りたくば開けよ裏表紙　克枝
天
裏話見事な花の中にいる　中野とよ子
軸
わたくしを裏切るもう一人のわたし

かむ

野口節子選

大ものが一枚かんでいる認可　正雄
生きている幸せいつもかみしめる　圭一郎
この坂を越えるまではと奥歯かむ　剛治
激論は岩かむ波のように飛ぶ　計光
岩をかみあぶくとなった波頭　玉恵
羽交い締めされて審判員をかむ　帆雀
先の先読んで一枚噛んでおく　良
気配りの対面仁丹かみながら　杜的
飼い犬にかまれ天狗の目が覚める　旋風
ふんぎりのつかぬ別れに爪をかむ　英子
あの人が一枚かんでいた迂闊　諷云児
かみ合わぬ商談少し窓を開け　あらた
負け戦耐えて男は爪をかむ　圭
日向ぼこ昔の恋をかみ砕く　きみ子
わだつみの声かみしめる終戦忌　(稲)洋
かみついて居づらくなった正義漢　晋
かむ程に味が出て来る里訛り　武史
昭和史の辛苦をかんで来た手足　権悟
ライオンをかむとメディアが寄ってくる　正剣
よくかんで脳細胞を刺激する　朝子
唇を噛んで男が耐える席　宵明
無理解も奥歯で噛める齢になり　公一朗

塾通い父は欠伸をかみころす　黎之助
砂をかむ思いが寒い社会面　重　人
言い勝ったもののご飯に砂があり　久美子
青いのがやたら噛みつくまつりごと　御　前
役人が一枚かむと銭がいる　正　子
不似合な果実をかんでからもつれ　潮　華
かみ合わぬ日もあり回る夫婦独楽　和　枝
ものさしの違う母娘でかみ合わぬ　ますみ
かみついてくる部下を持つ社の活気　雄々
かむ靴をまた母さんが買って来た　はるお
歯車もやっと馴染んで共白髪　(海)洋
唇をかんだ無念をばねにする　甚　一
かみ合わぬ意見とにかく酒にする　恭　昌
塩ふって胡瓜三本食べて寝る　和歌子
ふるさとの味をまるごとかんでいる　劦

佳

シェパードをガブッとかんだ八十歳　次　男
ほおずきをかむと昔の音がする　典　子
粥をかむ明日の命に逢いたくて　克　枝
飼い犬に噛まれてからの失語症　幸　子
じゃれて噛むうちは可愛い犬でした　ちかし

人

煩悩の悔しさをまたかみ殺す　螢

地

八月を噛みしめている半世紀　保　州

天

かみしめてみよう毒など無い筈だ　政岡日枝子

軸

人生の重さよ砂も岩もかむ

あいまい

河井庸佑選

組紐の彩にあいまい許されぬ　章　久
あいまいな笑いでその場切りぬける　寿　美
あいまいな話で探り入れに来る　甚　一
あいまいな言葉蛇口が締まらない　勇　太
あいまいなピエロでさばく酒の席　ただし
あいまいな答ゆるさぬ子供の目　シマ子
あいまいな話に判を欲しがられ　満　秋
あいまいに出来ないたちで嫌われる　美代子
あいまいにしてるが平和守ってる　一　風
あいまいな返事へ不審抱いた妻　善　信
あいまいな古代をさぐる移植ゴテ　潮　華
あいまいな中の言い分聞いてやる　しげお
あいまいな天気に咲いた七変化　雅　城
あいまいな返事で濁す板ばさみ　政　良
あいまいな自分に腹を立てている　富喜子
あいまいな地図で迷路に迷いこむ　諷云児
あいまいな笑いが墓穴深くする　恭　昌
あいまいな言葉やさしくバラの棘　秀　夫
嫌いではないが好きでもないという　保　州
あいまいに聞いて溜めてる見栄と無駄　四　郎
あいまいな二人を笑う角砂糖　権　悟
肯定も否定もしないカタツムリ　一　花

あいまいな記憶を辿る探し物　大　輪
あいまいに生きて漂流する私　めぐみ

劦

あいまいに話しておこうバラの刺　劦
あいまいな言葉のうらにある野心　英壬子
あいまいな粗品に透けている野心　鉄　治
あいまいな男と見てる遠花火　(海)洋　倫　子
あいまいにうまくまるめる年の功　晴　翠
自分史にあいまいな日をたぐり寄せ　弘
あいまいな噂は風に乗りたがる　黎之助
あいまいな返事に礫とんでくる　岳　水
どちらにも染まる白旗持ち歩く　精　子
あいまいな答えの中にある本音　狸　村
あいまいな返事に困るくすり指　杜　的
あいまいな答へコーヒー冷えてくる　時　弘
あいまいな男に愛の灯は貧さぬ

佳

あいまいにしてるときっとツケがくる　重　人
あいまいな答えで明日へ生きのびる　みつこ
あいまいな竿でも蔓は命がけ　虹　汀
あいまいな父が譲れぬ鍵を持つ　克　枝
あいまいに割れて消えゆくシャボン玉　たず子

人

あいまいな道から壁につき当たる　隆　風

地

父の樹はあいまいな風寄せつけぬ　京　子

天

あいまいな遺書に残した父の謎　亀岡　哲子

軸

あいまいに結着付ける風が吹く

初歩教室

題 ― 入れる

吐田公一

川柳は落穂拾いに似ていると思う。誰にでも目につく実っている穂は、簡単に採れるだけに面白味も少ないし、喜びも少ない。一粒一粒を大切に苦労して集めた落穂には、それなりの深い味わいと喜びがある。

川柳も同じで、みんなの見落しがちな落穂に目を向け、取捨選択しながら一句一句をものにする努力の成果が、功を奏した時の喜びはまた格別と思う。

このように落穂拾いの中にこそ川柳の味があり、これを拾い上げる「眼」こそが、川柳眼といえるのではないだろうか。

添削句

○お抹茶を入れる手捌きうまい嫁　政子

川柳は主として人間を詩う。人間関係とか心の動き、暮らしを。手捌きうまいだけでは人間関係が詠めていない。

▽茶を入れてひととき和む姑と嫁

○正論を考慮に入れることにする　多哥由

会議の情景が想像できるように

▽末席の正論入れる社のピンチ

○茶を入れて法事の経の中休み　志華子

原句のままでは説明だけに終始している。

▽茶を入れて思い出語る一周忌

○梅雨晴れに薫風入れる窓を開け　登美

下五に訴求力がない。薫風を入れることに対するドラマがほしい。

▽薫風を入れ遠来の友を待つ

○動か無い証拠見事に手に入れる　義男

原句は見事が不必要。趣旨は異なるが

▽冤罪を救う証拠を手に入れる

○何よりの一服家の茶を入れる　苑子

何よりが余分。ほっと一息入れる因＝家事仕事等を入れると情景に広がりが出る。

▽一服を入れて茶の間の旅帰り

○上等の茶入れる時は気配りを　益子

上五に品がない。また気配りを必要とする対象（相手の様子や動作など）を表現する必要があると思う。

▽ひと仕事終え気配りの茶を入れる

○窓をあけ春風入れて娘待つ　久子

登美さんの句と同じく、窓あけて風を入れるは冗長

▽春風を入れて待ってる里帰り

○出し入れの自由な孫の貯金箱　利徳

参考句も説明句だが、原句を活かすとすればせいぜいこのくらい

▽出し入れが出来て溜らぬ貯金箱

○心どこ枢に入れる菊の花　タツヱ

詠まれている内容は理解できるが、上五がややひっかかる。

▽哀しみと追慕を入れる棺の花

○思い入れふくらみ過ぎて火の匂い　茂代

原句も相当、インパクトがあるが

▽こうなれば悪女を通す思い入れ

○一人だけなら入れた酒樽みんな水　馬洗

原句の意が解しかねる。一人合点の句

▽酒倉に入りワインの息吹聞く

○紫陽花に出番近づく梅雨に入る　笑子

中七が粗雑

▽紫陽花が活気づいてる梅雨の入り

○大物を入れるつもりで買った魚籠　捷也

見付けはいいが、残念なことは買ったとするより、その結果が大事であり、そのことが川柳になる。

▽大物を入れるつもりの魚籠が空

○薬用の入浴剤で暖まる　崇

原句は当然のことを述べているだけで、これが説明句と言われる所以

▽名湯の入浴剤で旅気分

○入れ知恵をされたの女パフ叩く　睦子
〝てにをは〟の添削
▽入れ知恵をされて女はパフ叩く
○籍を入れるこれで二人は幸せに　晩翠
参考句というにはお粗末だが
▽籍入れて名実共に二人連れ
○情報に惑わかされる老の耳　トき
入ってくる情報の取捨選択を誤ると、なけなしの老いの貯金も危なくなる時代
▽情報過多惑わされてる老いの耳
○入り日背に母を待つ子動かない　まさ
ひとりぼっちの情景が彷彿とする。このドラマ性をもう少し敷衍（ふえん）できれば申し分なかったのだが—
▽鍵っ子が入り日背に待つ母の影
○鍋の中好みの味を目分量　サト子
「長年の勘」を詠み込むと
▽味付けもしっかり母の目分量
○停年のカバンに虹も折り入れる　明美
下五を単純化すれば
▽停年のカバンに入れてあった虹
○応接間世辞聞きあきて風を入れ　りつえ
発想は実にいい。また下五の表現も立派。ただありきたりの文言かも知れないが、聞き流すの方が適切ではないかと—
▽応接間世辞聞き流す風を入れ
○ボランティアまたもメンバーに入れられる　一典
一言、感情のある言葉を入れると
▽張り切ってメンバーに入るボランティア
○引越は嫁姑の意見入れ　省子
事実とは異なるかも知れないが、引越しとするよりも新築の方が、間取りのことなど訴求力がつくのでは
▽新築へ姑の意見もとり入れる
○恐い顔お茶で和ませ本音聞く　一乗
上五がいわずもがなの表現
▽お茶入れて本音引き出す聞き上手
○若い日に入れてもらった道つづく　美恵子
宗教か趣味か、その「道」はわからないが、上五に難
▽趣味の会入ってからの遠い道
○小袋に櫛に口紅まだ女　よし子
▽口紅をバッグに入れてまだ女
○銀行へ金入れに行き時間切れ　美寿子
銀行へ預金に行ったら閉っていただけでは「あ、そうですか」というだけのことで、川柳とは言えない。
▽預けるにせいないほどの安い利子
○旅鞄入れた荷物をまた調べ
名無しの権兵衛。投句される前には必ずチエックを忘れないように。さもないと折角の作品が〝没〟の運命となりますよ。

佳句

年金にいじめが入る低金利　八十八
いい噂小声で耳に入れてやる　幸次郎
勘定に入れてなかった不意の客　剛治
お守りをポッケに入れる親ごころ　宗明
投入れの薔薇一輪に夢を追う　雄幸
入れ物を持たぬ散歩の蕨取り　玲子
小包に親の思いも入れておく　公一朗
受け売りの話に気持少し入れ　ミツ子
（あまり尾鰭をつけられては—）
農繁期一息入れる茶の旨さ　ミツオ
（上手にまとめあげている）
コーヒーに入れる砂糖にふと迷い　徳三
（糖尿病は恐ろしい）
新しい風を入れてる若い嫁　啓子
（下五がやや気になるが—）
姑の話皮肉たっぷり入れてある　宏
（嫁の立場で聞くと—）
君を待つみどりの風を部屋に入れ　まさと
（なかなかロマンのある句）
逝く母の棺に入れたいものばかり　弘一
（五月に母を亡くした私には—）
立ち話犬も仲間に入れてやる　トヨ子
（愛犬家の横顔が彷彿と—お見事）

私の句

ライバルの背中を視野に入れておく

追悼川柳大会

麻生　路郎　三十三回忌
麻生　葭乃　十七回忌
中島生々庵　十三回忌
西尾　栞　三回忌

路郎・葭乃、生々庵、栞の四先生を偲ぶ追悼川柳大会は六月二十八日、大阪市天王寺区のたかつガーデン（大阪府教育会館）で行われた。この日、午前十時過ぎから小雨そぼ降る中を参会者が続々とつめかけ、午後一時の開会時には、予想を上回る二百七十余名の参加で八階のホールが満席となった。

会場正面には祭壇が設けられ、阿弥陀絵像軸を中心に路郎のブロンズ像、四先生の名札と花が飾られ、別のテーブルには小出智子さんのスナップ写真があり、気付いて合掌する人の姿も見られた。

初めに西田柳宏子相談役が開式を宣言、次いで橘高薫風主幹が「昨夜来の雨も小止みとなり、全日本川柳協会会長の仲川たけし先生、東野大八先生には遠方からお出でいただき、また、ご高齢の直原玉青先生もお迎えできたことに、厚くお礼申し上げたい。情熱の人路郎、包容の葭乃、謹厳の生々庵、そして和を以って貴しとされた栞の四先生ならびにこれまで川柳雑誌・川柳塔を支え、その発展に貢献された先輩柳人に深甚な追悼の意を捧げたい。今から十年前、高野山で三先生の追悼川柳大会を開き、今回は私が主幹としてこの会を催すことができたことは光栄だが、理事長の小出智子さんはこの日を待たずに幽明境を異にされた。ここに四先生ともども心からご冥福をお祈りしたい」とあいさつした。

法要

つづいて仏教音楽のBGMが流れる中を法要に入り、薫風主幹が路郎、西村梨里さんが葭乃、中島一彦・恭代さんが生々庵、西尾舜介・美与子さんらが栞の四先生へそれぞれ献華した。ついで導師の浄福寺住職で路郎の孫にあたる西村哲夫師が入堂、合掌して「三奉請」、参列者一同が黙祷する中を「敬礼文」「三帰依」を読経した。

法要はひきつづき荘厳なふんい気のうちに進行、導師が「俺に似よ俺に似るなと子を思い」（路郎）、「福寿草　松にしたがいそろかしこ」（葭乃）、「浮き草は浮き草なりに花が咲き」（生々庵）、「温泉や坐り羅漢に寝る羅漢」（栞）など、四先生の遺句を奉唱する間、薫風主幹、麻生家、中島家、西尾家の遺族が焼香を行った。

おわりに一同合掌する中を導師が正面に立って念仏を唱え、法要を終了した。

なお、今回の大会参会者に対する記念品（粗供養）として、四先生の直筆をそれぞれ表紙に印刷した用箋が贈られた。

おはなし

この日の「おはなし」は、『川柳塔』誌の表紙を毎号、水墨画で飾ってくださっている日本南画院理事長の直原玉青先生で、九十五歳の高齢にもかかわらず、現役として活躍されている。前々日にスリランカの旅から帰られたばかりのところを来会、大要つぎのような含蓄のあるおはなしをされた。

「本日は四人の先生を追悼する集いということで、たいへん結構な催しだと思う。私は、中島生々庵先生に絵をお教えしたので、特にご縁が深い。

人間がこの世に生れることにも因縁があり、不思議な縁によって生れてきた。そして人間には、目に見えない心の世界があり、この精神と肉体があってはじめて、人間としての存在がある。

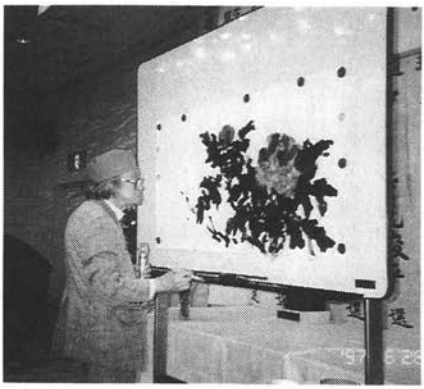
ところが最近、精神が失われて物体だけの世界になりつつある。今の時代にこそ反省して精神の世界を取り戻さなければ、日本の未来は危ないのではないだろうか。俳句や川柳の役割は大きく、真実を取り戻す運動が、この中から興らねばならないと思う。

また、助け合うことを忘れて自分だけうまいことをしようというのが最近の世相だが、相互に助け合うことによってはじめて、物ができるのである。水と墨という相反するものが助け合うということが、水墨画の中にはっきりと表われている。助け合うことによって生命が生れ、ハーモニーも生れる。

昨今の科学の進歩はいちじるしいものがあるが、それが人殺しに役立つというのであれば、もはや文化と言うことはできない。人間を生かす科学であることを願いたいし、人間を生かす心をもってお互いに助け合うことが、何よりもたいせつであると思う」。

つづいて先生は、壇上の白板に張られた紙に向かって、富貴図と言われる牡丹の花を揮毫された。水と墨に筆をにじませながら描く約十五分間のパフォーマンスに見とれるうちに、美事な牡丹が全紙いっぱいに咲き乱れた。

次いで仲川日川協会長、山本同事務局長、東野大八氏があいさつを行った。



川柳大会

川柳大会は午後二時から河内天笑副主幹の司会によって開かれたが、開会にさきだって月原宵明氏、都大路川柳社奥山晴生氏、川柳塔おっぱこ吟社、ふあうすと川柳社土田欣之氏、鵜かご川柳社からの電報が披露された。

披講は川柳塔きゃらぼくの八木千代さんをトップに、各選者の四先生への追憶談をまじえながら進められ、月間賞は坂田和歌子さん（鳥取市）に輝いた。

（記名―射月芳・月子）

兼題「松」　八木千代選

松かさを見るとついつい拾う癖　文
松と城ひきたて役に立つわたし　信子
夏雲に松は孤高の紳士なり　義子
ふるさとの松は枯れずにいてくれた　八重子
子の描く松は太陽突き抜ける　かすみ
振り分けで歩きたくなる松並木　頂留子
友だちはみな村を出た松ぼくり　正坊
松のこと松に習うて生きてます　ミツ子
ここは日本と叫び続ける島の松　雄次郎
玉手箱松の小枝に置いてあり　千楢
落魄や松がどんどん伸びてゆく　楓楽
動物の形の好きな園の松　たもつ
松ぼくり明るい暗示してくれる　英壬子
松はみどり冠木門から出る明治　房子
松ぼっくり開く少年の手のひらで　笑子
別姓へ松葉の神話など消える　典呼
ラフカディオハーンと同じ松を見る　楽生
常緑の松をとことん信じ切る　石舟
断崖の松は男の決意かも　武

消えて行く音を聞いてる松の露　喜久蔵
松ぼっくりに阿呆になる顔見てもらい　楓
背景の松をこころにとめておく　希久子
父の思い通り曲がらぬ鉢の松　洞庵
車庫の隅松の切株泣いている　健吾
尊厳死を考えている鉢の松　恵子
盆栽の松はバンザイしてみたい　朝子
松ヤニは抗議の涙かも知れぬ　金太
松の根を労ってやる先祖の血　(田)良子
枯れた松の跡に赤ちゃん松植える　完司
平山郁夫に描かれて松倖せか　いさむ
老いてなお雌松床しくそろかしこ　隆盛
羽衣の松に男を吊りさげる　湖風
松の木が曲る遊歩道がまがる　草丘
樹齢百年松のみどりが道標　泰子
神と松深いしじまで結ばれる　(沢)和子
もたれ合う友を持ってる松林　日枝子
リストラにあった屋根より高い松　菜々
襖絵の魁夷の松が雫する　完次
風除けの松には父が棲んでいる　蘭幸
天を地を指して気遣う松である　諷人
見越しの松も悪人もそして秋　幹斉
岩の松ぜい肉全部ふり払い　幸生

佳

太郎見送り花子見送り夫婦松　洋
三代の屋根を支える松丸太　荒介

松の実をポロポロ零し風が止む　美代子
苦を拾う楽を拾うて松の位置　(森)恵美子
松林さわさわ誰か探してる　夕花
人
空海の耳にはいつも松の風　田鶴
地
巨き山私は松の木に過ぎず　俊平
天
松風がふくとき視野はモノトーン　森子
軸
見るものを見た百年の松並木　(八)千代

兼題「歩く」　寺尾俊平選

この歩みに悔いなかりしか無かりしか　晴美
もうよいと神が言うまでただ歩く　咲二
歩には歩の思いで一歩ずつ歩く　湖風
チクタクと歩いた魚の目の悲鳴　冬葉
定年の呪縛とかれた日の歩み　楓
コンパスの違い他人の倍歩く　(福)英子
寄り添うて妻と歩いたのは昔　みね
勘のいい男が一歩先にいる　〆女
いたわりが出てから歩幅揃うなり　(楠)昭子
黙って歩く男がほしい時もある　勇太郎
でぶっちょの医者から歩けと言われても　哲平
集団で歩くとデモをしたくなる　洋敏
どこまでも歩くと幸せに出会う　緑良

ゆっくりと歩く鎧は着けたまま　尚子
歩けるを少し自慢の歩く会　雅楓
賛成の指にたかって僕も行く　豊太
子はすでに曠野へ歩むふかい雨　一
道草をした分寿命延びました　まさよ
山越えてやっと歩幅が合うてきた　菜々
歩き続ける土の鼓動を聞きながら　千春
クローン人間が歩く黒い影曳いて　倫子
ひと駅を歩く充実した思い　千津子
太陽があたるときっと歩きだす　信子
旧道を歩み詩人をこころざし　菁風
今に見ておれと粗大ゴミ歩く　(田)良子
歩くたび傷つき歩くたび癒える　香子
男から逃げて満月の下歩く　弥生
大切な人の荷物とついていく　茜
森を歩いてこころの灰汁を抜いてくる　朱夏
妻と歩いて妻を忘れておりました　希久子
ひとり歩くふたり歩いてなお淋し　みつ子
この頃は妻の歩幅に負けている　千歩
国境を歩いて通る事がある　田鶴
脚色をされて噂は歩き出す　桂子
口説かれながら歩いたことを思う径　天笑
同行二人ただひたすらな花へんろ　シマ子
歩行許可出た日に借りた妻の肩　たけし
諦めて歩くとバスに追越され　ふみ
確かな足どりで恋がやってくる　文

自信ある亀を待ってる落し穴　鐘造
転ぶなよ笛は太鼓を歩かせる　(森)恵美子
暗闇を歩けば何か踏んづける　智久
佳
ルーズソックス自己中心にして歩く　叮紅
雲の上歩くみたいに子をまたぐ　一歩
目立たない服で目立たぬよう歩く　完司
絶好調　虹を歩いてみせようか　求芽
踵から歩く自信のある男　(古)和子
人
社宅から人事がひとり歩きする　ミツ子
地
君の通夜終り風と歩いている　蘭幸
天
ベッドからつたい歩きを羨まれ　草丘
軸
また明日があるから歩き続けよう　俊平

兼題「こども」　小松原爽介選

叱ってる筈をこどもに見下ろされ　美房
銀婚なお子供のような妻でよし　光代
あどけなさが日毎に褪せる名子役　香子
泣きたい時に泣けるこどもにかえりたし　美代子
こども皆妻の味方で孤立する　一風
匙投げたこどもに縋りつく余生　諷云児
二度のこどもシナリオにない紙おしめ　(池)恵美子

ハンバーガーの味にうるさいこどもたち　(森)恵美子
痩せこけた子等と築いてきた戦後　緑　良
こどもたち祖母の手造り味をほめ　トメ子
親ばなれ出来ぬこどもに子が出来る　冬　虹
子供部屋次元の違う風が吹く　清　芳
改札でこどもに齢を言い聞かす　いつふみ
こどもからいつも仕入れる流行語　玲　子
カーネーションこども五十になりました　喜美子
こども御輿を担ぐ子供がいなくなる　章　峰
怒られる度にこどもの背が伸びる　しげお
子供から大人階段かけあがる　希久子
故郷の風に抱かれて子に戻る　剛　治
子供にはこどもの世界手を放す　昌　美
わたし似のこどもの癖は叱れない　能　子
よその子を見ると遺伝がよくわかる　弘　一
万華鏡こどもに還るすべもなし　楓　楽
託児所へ寄るチャリンコの朝を踏む　雄次郎
子は一人たらい回しの憂いなし　てる
爪を噛むこどもの裏を聞いてやる　完　次
子作りは車のローン終えてから　菜　々
子の価値観　鍬形虫を抱いて寝る　(川)絹　子
後添いをキューピッドしたのは子ども　瑞　枝
泣き虫の子供やさしい人になる　完　司
親離れもう還らない竹トンボ　ひさゑ
勲章も疵もこどもに見せておく　富　湖
台所事情が子供から洩れる　(古)和　子

適当にやれがわかってきたこども　草　丘
子はかつて天の子地の子だったはず　定　子
あの子もこの子も私に似るいやな子　杏　子
こどもと遊ぶ未来が解けていく感じ　日枝子
幼児期の絵の中にいる大人たち　冬　葉
少子化のこどもの部屋をどう飾る　年　代
それぞれに切符を持って子は育つ　嘉代子
神童のその後は誰も知りません　なみ
子を叱る時の訛りは母ゆずり　美津子

佳

児を抱いて母へ戻ってゆくおんな　紀　乃
いつまでもこどもでいたい競走馬　尚　子
その人の中のこどもを愛おしむ　泰　子
燃えつきた拳こどもに還れぬか　喜久蔵
天使だったころを忘れているこども　朱　夏

人

こども向きの漫画で試されていたか　晴　美

地

こどもにはでかい夕日を見せておく　天　笑

天

波頭こどもに帰るときがある　荒　介

軸

こどもと呼ぶ十一文を履く男　爽　介

兼題「波」　藤本　静港子　選

波浪注意麻生路郎がやってくる　俊　平

輪廻転生次はやさしい波に乗る　大　輪
戸籍謄本波が静かに打ち寄せる　輝　子
波に負けじと地球を摑む貝ひとつ　洋
波にのり龍宮城へ行ったきり　いわゑ
光琳のえがく波なら越えてゆく　田　鶴
波のりの上手い貴方についてゆく　天　笑
海峡の波は一言多くなる　しげお
真っ白い波に打たれている祈り　紀　乃
おさまった波に油断をしてしまう　能　子
さざ波のような暮しに馴らされる　(沢)和　子
波立たす話題を提げてくる他人　晴　美
花束を投げると海は凪いでくる　清　芳
波が攫った赤いサンダル帰らない　年　代
脳死論　波は法規の外にある　荒　介
荒波に性善説が揺れている　靖　巳
波を背負うて弥陀の後ろをついて行く　武庫坊
大波の底につぶやくものがあり　まさお
よそ様の波はでっかいのが愉快　六　点
ポーカーフェイス波立つものをふところに　(池)恵美子
あなたとの波長を携帯電話持つ　満　秋
波風を立てて沈んでゆく噂　諷云児
波の気ままのたりのたりが牙を剝く　正　匍
突然の辞表山よりでかい波　雄次郎
わたくしも波も愚かを繰り返し　(楠)昭　子
波風がおさまって履く男下駄　完　次
傷ついて男はたくましい波に　楓

矢面に吹く風ばかり波ばかり　澄子
青年の波が左へ向きたがる　咲二
大波小波いつもゆっくり漕いでいる　艶子
海峡の怒涛を越えるとき男　嘉代子
大物は大きい波の下にいる　完司
抱き合うて波打際の貝になる　蕗児
排水溝にも逆波が立っている　(八)千代
ひとつまみの塩にきこえる波の音　春子
波が来て又来てあとに残る老い　鹿太
おだやかな波を丸太で掻き回す　帆雀
絵になりたくて波は時どき吠えてみる　可住
波乱万丈生きてこんなに痩せました　扶美代
波静か入り江を出られないイルカ　(古)和子
気やすうに波足もとへ来てくれる　千津子
波浪目深にかぶり熱砂の一滴に　森子
波がしらまだ自分史は書いてない　比呂史
波還る遺す言葉はもう持たず　一
そうめんがおいしくなった波の音　(森)恵美子
平凡な波がだんだん好きになる　熊生

人

大罪を波にあずけて泳ぎ切る　和歌子

地

胸の辺りでどんどん好きになる波だ　富湖

天

波の音がする晩年のテリトリー　蘭幸

軸

牙むいたゆうべをけろりっと渚　静港子

兼題「目」　礒野いさむ選

老いる目へ読みたい本が攻めてくる　なみ
目に見えぬ敵が一番恐ろしい　鶴丸
目に余る落書こする無人駅　幸夫
何となく秘密つかんだ目の動き　りつえ
傷心の目に鮮やかな花ざくろ　みつ子
蛸の目が明石大橋語り出す　東雲
辞めてなお刑事のままの目が哀し　美房
狐目の男いまだにつかまらず　笛生
町衆の目でだんじりは駆け抜ける　金太
目くばせがイエスのサイン出している　武庫坊
目を見ればあなたのいけずわかります　勇太郎
目がついているイチローのバットには　まさと
医者の目で矢張り気になるモジリアニ　弘一
野に下りて人間らしい目の光り　愛論
美しい目で点数を稼ぐ美女　文秋
君は見たか絵筆を持ったピカソの目　蘭幸
空洞の目が縄文を語り継ぐ　鹿太
吊り広告の美女とウインク交わし合う　ますみ
新世紀この目で確と見るつもり　泰子
真贋を見抜く目に逢うれしい日　まさよ
その時の心で恐い仁王の目　典子
ジュサブローの人形の目からこぼす愛　さな恵
痛い目に会った北浜後遺症　雄次郎
オークション目の利く敵が一人いる　たつお
炭坑の崩落を見る目に涙　一風
日本のうなぎカンヌで目を細め　正一
アトランタ自分を褒めた目がきれい　睦子
今も何処かで誘拐魔の目が笑う　叮紅
嫉妬から憎悪に変わる目を意識　翠公
目からウロコ落とす仏の名が並ぶ　(森)恵美子
どう見ても鬼の目でないモンタージュ　隆盛
ぶっそうな街だうしろに目が欲しい　夕花
太郎次郎花子目に入れ母は逝く　章久
銀行がきっと驚く目出し帽　富湖
目の上の瘤とれたから助走する　冬葉
水着ショー目線の位置が定まらぬ　花梢
日曜日パパの目馬と走ってる　(山)君子
予定には入れてなかった一目惚れ　(沢)和子
ビル谷間お地蔵さまのやさしい目　光子
恋は盲目失楽園を読み返す　昌美
社内ラブ目と目で話する二人　恭昌
あなたしか目に入らない恋の罠　天笑
ホステスの目はハンターとなる日暮れ　一粒
浜に立つ龍馬世界を見つめる目　弥生
目が点になって訃報を聞いている　美代子

佳

謎はまだ解けず写楽の目が嗤う　朱夏
日本人がいます土門のカメラの目　楽生

裏切らぬ盲導犬の目が頼り　清芳
何にでも挑戦きらり輝く目　ルイ子
塾がえり明日をになう目だろうか　ダン吉
目を見張る絵に逢う個人美術館　軸　いさむ

兼題「似る」　橘高薫風選

真似ているのじゃない似ているのだった　汲香
アンパンのような雲だと師を想う　㈠和子
キムタクに似てもなんの得もなし　弘一
似た話と聞いてりゃ何だ俺のこと　三男
曽根崎署の前　寅さんとすれ違う　咲二
シンクロとイルカの芸は似る　違う　草丘
猫抱いた姿が亡母にそっくりだ　希久子
他人から見れば似ている兄妹　正坊
父と子が似た顔重ね肩車　はな
真似ずとも自画像ピカソの絵に似たり　恭昌
がめつさがだんだんと似た喉仏　澄子
モナリザの笑みに似てきた妻の謎　楓
癖までが似てきて母を喜ばす　アキ
似たような意見ばかりで芯がない　とし子
昨日今日似て非なる日よ芥子の咲く　哲子
気の強さだれに似たのと聞きにくい　信子
入道雲亡父の怒った顔に似る　太一
瞑想やああガンジーに似たるかな　俊平
父に似てちちにそむいてばかりいる　森子
出世していつしか嫌な奴に似る　健吾
小錦に似た嫁さんを連れてくる　雄次郎
顔ほどに性格は似ず姉いもと　㈡君子
怒鳴ったら父とおんなじ声になる　天笑
夏桔梗つぼみふっくら亡母に似る　㈢君子
似たような過去が溶け合う昼の酒　稚代
父の背に似ていて強し夏木立　シマ子
淑女に似た魔女にお酒を誘われる　一風
あの日の路を今も空似の人が行く　頂留子
似たものの夫婦で牙が抜けていく　喜久蔵
似た者に夫唱婦随でなってくる　満秋
旅に出て故里に似た絵を拾う　たず子
父さんに似てへん人を好きになり　あやめ
誰に似たのか我が家にひとり博士号　蘭幸
厳父にはなれず痩身だけが似る　まさと
千字文書き上げ少し師に似たり　菁居
貴乃花阿修羅の像に似ておかし　てる
手厳しい妻に似ている好きな女　太茂津
母に似た運命で母を追いこせず　輝子
身の上が似ているだけの絆なり　由多香
亡き妻に似ていてとても手が出せぬ　完次
花揺らぐ母似の頬の観世音　一
我が影も方哉に似て洒臭し　完司
儚なさは似る睡蓮もあじさいも　㈣千代
宇宙とや嗚呼さぎ草が驚に似る　可住
五百羅漢どれもどれもが亡父に似る　さよ子
そういえば祖父の達筆誰も似ず　玲子
親に似ぬ息子一番出世する　蛙
風が吹く如し阿闍梨は風に似る　岳人
亡き父母に似たる穂高の道祖神　柳伸

妻に似ぬ看護婦さんを所望する　秀

和歌子

日の丸に似ている自衛隊の旗　薫風

（清記―希久子）

懇親宴

川柳大会後の懇親宴は、同会場で午後五時半から百十四人の参加によって開かれた。

ピアニストの野田ちひろさんが奏でるショパンの「プレリュード」、バッハの「主よ、人の望みの喜びよ」の静かな鎮魂のメロディーが流れる中、黒川紫香相談役が発声する献杯によって開宴された。

各テーブルでは、来賓や他柳社の役員・同人が本社の役員・同人らと歓談し、川柳大会とは一味違った和やかな熱気が会場いっぱいに広がり、小林トメ子さんの十八番の歌と踊りや西村哲夫さん、田頭よしこさん、新家完司さん、奥谷弘朗さんらの物真似や歌声がひびいて、いよいよ宴を盛り上げた。

追悼川柳大会参加者

総数　二七四名
順不同・敬称略

青戸田鶴　秋元てる　朝倉尚子　飯西ミサヲ
浅野房子　芦田静江　油谷克己　生嶋ますみ
阿萬萬的　尼れいじ　井伊吉三　池田恵美子
以倉菜々　池　森子　池永正匍　礒野いさむ
石原靖巳　井尻民子　泉比呂史　指宿千枝子
板尾岳人　板垣草丘　一本勇太　岩倉キク子
伊藤定子　伊藤　武　稲葉冬葉　岩佐ダン吉
岩本笑子　上田佳秋　上野楽生　岩本美智子
牛尾緑良　氏林洋敏　内海幸生　上村さな恵
卜部晴美　榎本吐来　海老池洋　太田とし子
大内朝子　大橋鐘造　大森一甲　太田扶美代
岡本久峰・奥谷弘朗　奥田良子　岡本吉太郎
尾畑晴代　籠島恵子　加島由一　緒方美津子
梶本哲平　片岡湖風　金井文秋　奥田みつ子
亀岡哲子　川上大輪　川上富湖　梶川雄次郎
河内月子　河内天笑　川原章久　片岡智恵子
川端一歩　川端六点　川見絹子　門谷たず子
神原　文　岸　桂子　吉川寿美　神夏磯典子
橘高薫風　木本朱夏　楠　昭子　鴨谷瑠美子
楠見章子　黒川紫香　黒田能子　川久保睦子
小糸昭子　小島蘭幸　児玉　蛙　川島瓢云児
後藤正一　小西幹斉　小林周信　神原まさと

小山太一　小山紀乃　近藤豊子　岸野あやめ
酒井一壺　坂上高栄　桜井千秀　北岡波留吉
佐藤一粒　沢田和子　澤田千春　木太久正一
椎江清芳　塩満　敏　志田千代　久谷まこと
島元ふみ　清水絹子　清水潮華　小池しげお
清水利武　新家完司　住谷石舟　古今堂雀子
高杉鬼遊　高杉千歩　田頭良子　古藤八重子
高橋夕花　武田帆雀　立蔵信子　小林トメ子
田中正坊　田中輝子　田中みね　小林由多香
田辺鹿太　玉井豊太　玉置重人　小松原爽介
玉置英子　辻川慶子　坂田和歌子　坂田和歌子
恒松素子　津守柳伸　寺井東雲　嵯峨根保子
寺尾俊平　寺岡はな　寺川弘一　篠原いつふみ
寺田甚一　天正千楠　東野大八　柴田英壬子
遠山可住　都倉求芽　中井アキ　瀬戸かつみ
中後清史　中川　楓　中川　一　瀬戸まさよ
中野欅子　中野健吾　中原汲香　園山多賀子
中原瓢人　長浜澄子　仲平昌美　高須賀金太
中南杏子　柳楽鶴丸　西出楓楽　高田美代子
西原艶子　西村幸子　西村哲夫　綱木けい子
西村梨里　野坂なみ　萩原典呼　冨山ルイ子
服部春子　濱野奇童　中井三重子

林　荒介　林　瑞枝　原さよ子　中田たつお
原　章峰　春城年代　板東倫子　長縄嘉代子
樋口冬虹　菱田満秋　平田香子　西口いわを
福井桂香　福岡雅楓　福本英子　西田柳宏子
福元　稔　福田満州　藤井計光　西村りつえ
藤井正雄　藤岡花楠　藤田泰子　野村太茂津
藤村亜成　藤村〆女　芳地狸村　橋本多哥由
坊農柳弘　細川稚代　堀　良江　長谷川春蘭
堀江光子　堀端三男　前たもつ　春城武庫坊
前田咲二　前田登子　牧浦完次　平松かすみ
桝本蕗児　松永会美　松原寿子　藤井一二三
町田達子　水谷笙子　光井玲子　藤田頂留子
宮木一夫　宮口笛生　宮西弥生　藤本静港子
村上剛治　籾山隆盛　森　茜　古川喜美子
森　茂美　森井菁居　森下愛論　古久保和子
森田熊生　八木千代　山崎君子　堀江としを
山門幸夫　山門タミ　山本翠公　前川千津子
山本義子　結城君子　吉岡美房　政岡日枝子
吉川晋吾　吉村一風　吉本菁風　松本正とし
米田恭昌　欄　智久　和田恭子　宮園射月芳
和田光代　箕浦喜久蔵　宮崎シマ子
宮本かりん　村上ミツ子　村山勇太郎
森川まさお　森中恵美子　八十田洞庵
山川日出子　山口三千子　山本希久子
山本たけし　山本ひさを　吉岡きみえ
吉田あずき　吉村さち子　仲川たけし

参加者の感想

追悼大会に想う

菱田満秋

平成九年六月二十八日、台風八号が九州から近畿地方を襲うという天気予報にも拘らずたかつガーデンに集った路郎師、葭乃奥さん、生々庵、栞両前主幹の遺徳を偲ぶ二七四人の中の一人として私も横浜から駆けつけた。

それぞれに四人の先生方への想いを持たれて来場された中に、古い柳友の元気そうな顔を見てタイムスリップするのも止むを得まい。

私の川柳は西宮の明和病院に入院中、小浜牧人さんに誘われて始めたものでした。転院後、橘高薫風現主幹、故河相すゝむ、吉本菁風などの錚々たる作家が水谷鮎美、西尾栞両先生の指導で育ったのを知りましたが、昭和三十一年に若柳潮花、黒川紫香両先生の推挙で不朽洞会員になりました。その時に路郎師にいただいた一枚のはがきは額に入れて、座右の銘として読んでおります。それには

拝啓　不朽洞会へ入会されたことをよろこんでいます　川柳は不断の努力が必要なのであって　いかに熱心であっても途中で休むとダメですからいそがずともよいから句を身につけることです　宗教の宗教くさいのがダメな様に川柳の中に溶け込んで下さい　路郎生

生活に追われて川柳を一時休んだ私を予見しておられたのではないかと身の縮む思いがする。ご恩に報いるなどと大袈裟なことではないが、師の念願とされた川柳の普及と、関東地区における川柳塔誌の拡販に努めることを遺影に誓って合掌いたしました。

間奏曲

寺尾俊平

台風が来るという予報の中で麻生路郎・葭乃・中島生々庵・西尾　栞先生の追悼川柳大会が開かれたが、参加者が二百七十名を超えた。台風という予想できないアクシデントに襲われたのに拘らず、予想をはるかに越える大盛会であった。大阪に向かう新幹線の中で心配していた台風の影響など杞憂に過ぎなかったのである。次から次へと受付に群がる人達の表情は、今日の天候とまったく逆に晴れ晴れとしていた。ほっとしたのは私より薫風主幹をはじめとする大会当事者であったであろう。〝やぁやぁ〟と挨拶を交わし合っている人たちの表情は明るかった。

私はこの大会の選者として壇の上に立たせて頂いたが、壇上から拝見した参加者の皆さんの顔が、まるで備前西大寺の会陽の群衆のようにびっしりと会場を埋めていた。披講するたびに、その会場のそこかしこから呼名される顔が一瞬私の目に入る。ちょっと誇らしげに、少しはにかみながらの明るい表情であった。私もある種の感動があふれ、句を読み上げる心が揺れ動いた。

披講を終えて椅子に座ったとき、ふっと思った。この大会は過去の路郎先生から始まった川柳交響曲の次の交響曲につながる間奏曲だなと思った。

つまりこれから先も延々と続くであろう、川柳塔交響曲のそのつなぎ目の、間奏曲が今日の追悼大会なのだ、と独りで思い続けていた私である。

句会が終わって懇親宴に入ったとき、その始まりにピアノの演奏があった。緊張から解放された私の心に、流麗な曲と想いが流れてきて、路郎、葭乃、生々庵、栞先達の顔がピアノの音と共に流れてきた。

あぁ、次の交響曲はもう始まっているのだとそのピアノ演奏を聞きながら思った。

（川柳「塾」塾長）

川柳塔らしさの中で

政岡日枝子

台風八号の足音を背中に聞きながら、米子を出ました。その時点では、米子が暴風雨にまき込まれるなど思いもせず、上本町に着いた途端、台風の事は忘れていました。何故なら、「川柳塔社」の旗を見付け、宮園射月芳さん、小池しげおさんをはじめ、川柳塔の方々の顔があったからです。嬉しかったし、ホッとしました。これで「たかつガーデン」まで迷わず行けると…。

路郎先生、葭乃先生、生々庵先生、栞先生の四方の追悼川柳大会ということですが、栞先生しか存じ上げませんので、来賓の先生方のご挨拶の中から四先生方のお人柄などに触れさせて頂いたのですが、偉大な方達の敷かれたレールの上に、今こうして座らせて頂いているのだと、有難く拝聴させて頂きました。

時々、天笑さんの方から台風情報が入り、松江、境港の風速三十七米、関西方面へ進んでいるという。私達、米子勢が台風を連れてきたのかと思っていたら、「嵐の路郎師」と聞かされ、路郎先生の情熱が嵐を呼んだのだと安心しました。この嵐の中、二七四名という大勢の方々を迎えられて、薫風先生はじめ塔本社の方々のお気持、いかばかりかと、深く感慨にふけっていると、先程までの西村哲夫導師とは思えぬ「森進一」がとび出したりして、川柳塔らしい和やかな雰囲気だと心温まる思いでした。この大法要に出席出来たことを幸せと思いました。

台風一過の今、大阪での事を思っています。

孫ひまご弟子うち揃い

木本朱夏

麻生路郎師の胸像と、六月二十二日急逝された小出智子先生の遺影が見守る会場で、追悼川柳大会の懇親宴は開かれました。

路郎師、栞先生のご遺族はじめ番傘、ふあうすと、時の川柳各柳社の主幹、東野大八先生、寺尾俊平先生方の御出席のもと、参加者百十余名という盛会でした。

日頃は顔を合わすことの少ない各地の柳人のさんざめきが会場を満たすころ、天笑さんの司会のもとに余興隠し芸が披露される。

先ずは小林トメ子さん。つけヒゲつけ鼻で「うちの女房にゃヒゲがある」を踊られる。つづいて奥谷弘朗さんの物真似「月形半平太」。おふた方の熱演に会場は大爆笑の渦。

負けてはならじと笛生さん、叮紅さんも大ハッスル。楽生さん、れいじさん、完司さん番傘の田頭良子さん等々、玄人はだしの物真似あり、歌あり、皆さん川柳だけでなく隠し芸の腕前もなかなかのものでありました。

中でも圧巻は西村哲夫師の物真似。大会に先だって行われた追悼式で朗々とした美声で回向をされたその自慢のノドで、森進一が本日の回向をされたなら…という趣向。さすがに日頃の読経で鍛えたノドの素晴らしさ。

アンコールの大喚声に応えて「おふくろさん」を熱唱。心なしかお顔まで森進一に似てくるから不思議。泉下の路郎師、葭乃夫人もさぞかし驚かれたことでしょう。

―古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子―と路郎師は詠まれました。路郎師を直接存じ上げない柳人が多いなか、台風接近のニュースも忘れて、倶会一処の楽しいひとときを過したことでした。

「今ここに智子先生がいらしたら…」と、胸に迫るものがありましたが、森中恵美子先

生のご挨拶のあと無事散会となりました。

風雲に乗って

新家完司

波浪注意麻生路郎がやってくる　寺尾俊平

右は当日の入選句の中で印象に残った一句。路郎、葭乃、生々庵、栞四師の霊魂は、季節外れの台風8号の風雲に乗って来られた。いや、四師の気魄の集合が時ならぬ風雲を呼んだ、というべきか。

たかつガーデンの大会場には台風をものともせぬ面々が詰めかけ、二百七十四名の出席に慌てて椅子を追加する一幕も。

一週間前に逝去された理事長小出智子さんの優しい遺影に見守られながら大会は順調に進行。いつもと変らぬ大会運営でありながら献花の時のバックグランドミュージックや、懇親宴の始まりのピアノ演奏等に新しい試みが感じられ、裏方の皆さんのご苦労がしのばれる。いつもお客さんのような顔をしてサッと来てサッと帰ってしまって、何のお手伝いもしていないのが心苦しい。

お手伝いをしなかったお詫びに飲み食いだけは率先して、と勇んで懇親会に臨んだが、さすがに「食いだおれの大阪」だけあって充分に吟味された抜群の料理の数々。しかも、私の好物ばかりで思わず知らず、食い過ぎの飲み過ぎ。司会の天笑さんに乗せられてまたまた蛮声を張り上げてしまった。次回は静かにしておこうと深く反省中。

なお、薫風主幹選の秀吟（月間賞）は我が鳥取県勢の坂田和歌子が獲得、台風の原因のひとつはここにあったと納得した。

御芳志御礼（順不同・敬称略）

仲川たけし・礒野いさむ・ふあうすと川柳社
藤本静港子・時の川柳社・小松原爽介・山本翠公・西尾家・東野大八・葉文館出版齊藤俊輔・芦田静江・八木千代・川柳塔きゃらばく舟木与根一・伊藤定子・川柳塔鹿野みか月・中原諷人・中原みさ子・中原汲香・木本朱夏いずも川柳会・西宮北口川柳会・打吹川柳会竹原川柳会・川柳塔おおとり・川柳藤井寺・中田たつお・堀江正朗・堀江芳子・河井庸佑西村哲夫・寺尾俊平・松川杜的・石倉芙佐子中島一彦・山門幸夫・山門タミ・西口いわゑ坂手有子・月原宵明・二宗吟平・山本希久子熊本川柳会会長高野宵草・川柳塔おっぱこ吟社・井上照子・翠洋会・奥田みつ子・川柳塔まつえ吟社

第21回 茗人賞川柳大会

とき　**8月24日**（日）午前10時半開会
ところ　白兎会館
（鳥取市末広温泉町556）
おはなし　川柳塔社副主幹　河内　天笑　氏
題と選者（各題2句・午前11時半締切）
「策」　吉岡美房　選
「爪」　宮西弥生　選
「眠る」　小島蘭幸　選
「穴」　尼　れいじ　選
「馴れる」　小林　由多香　選
「糊」　政岡　日枝子　選
「鉢」　石谷　忠良　選
会費　2000円（作品集呈）
＊昼食は各自でお願いします
懇親会　3000円（希望者）
投句　1000円を同封、**8月15日**までに左記へ
鳥取市相生町3丁目204　森田熊生方
（電話0857—23—4672）

うみなり川柳会

エッセー

薬あれこれ

田中正坊

今から三十年ほど前だったと思うが、はじめて人間ドックに入った。大阪府成人病センターであったが、いろいろな検査をした後、検査結果の申し渡しがあった。ほとんどの項目についてシロで、一つだけ過酸症（胃酸過多症）がチェックされた。これは、病気とは言えない体質的なもので、対策を聞いた時、ドクターから勧められたのが、「新・三共胃腸薬」であった。私の常備薬第一号で、ずっと愛用している。

もともと消化器系統が弱いことから、これと姉妹品の消化酵素剤「新タカヂア錠」（三共）を随時、服用しており、整腸剤「強ミヤリサン錠」も欠かせない。前二者の三共製品はどこの店でも売っているが、ミヤリサンは宮入博士が開発した特殊な酪酸菌製剤で、大きな薬局でしか扱っておらず、その薬効は抜群である。この三者でほとんどの症状はカバーできるが、昔ながらの和漢胃腸薬である大峯山の「陀羅尼助丸」も捨てがたい。

次は栄養剤だが、さまざまなものを試用したあげく、湧永製薬の「キヨ・レオピン」一本にしぼっている。これはビタミンB_1、B_{12}に肝臓分解エキス、ニンニク抽出液を処方したもので、成分を見ただけでも効果の方は分かるはずだ。もとよりちゃんとした医薬品だが、指定の薬局でしか販売していない。

これは女性には用のない薬である。その名は漢方製剤「八味丸」。カネボーやツムラからも発売され、健保適用となっているが、私は昔から第一薬品製造のものを使っている。ある高名な薬学博士がこれを強く推奨したと聞いたからである。成分は地黄、山茱萸、山薬、澤瀉、茯苓、牡丹皮、桂皮末、加工附子末の〝八味〟で調剤されている。薬効は老人性疾患一般と言うことになっているが、私自身の体験によると、前立腺肥大と白内障の進行を緩和することに尽きる。これも一般薬局にはなく、通信販売によって発売元の壮快薬局から購入している。

続いて「メラトニン」。〝奇跡のホルモン〟としてアメリカで注目を浴び、我が国でも講談社から翻訳本が出版されている。要するに脳の中心にある松果体から分泌されるホルモン＝メラトニンを人工合成したもので、免疫機能を高める抗酸化物質といわれる。その有効作用についての研究がさかんに進められているが、確実に立証されているのは睡眠促進効果で、私自身のここ半年間の人体実験でも、最良の睡眠薬と認められ、十数年来、服用してきた精神安定剤から解放された。入手の方法は、アメリカから個人輸入する以外にないが、驚くほど安価である。

飲み薬だけでなく、外用薬についても触れておきたい。傷には「クロマイP軟膏」（三共）が効く。戦後、一部で万能薬としてもてはやされたクロロマイセチンに類する成分を含んでいる。もう一つは、口腔用「ケナログ」。これは輸入薬だが、大きな薬局では扱っている。総義歯ということもあって、私はよく口内炎を起こすが、この薬を塗布して眠れば、たいてい一夜で治る。

私は薬品について専門的知識はないが、薬種問屋の息子で、幼い時から薬のことについて見たり、聞いたりして育った門前の小僧である。父がよく言っていたことばを紹介して結びに代えたい。「万病に効く薬がないように、万人に効く薬もない。自分で試してみて自分に合う薬を探し出し、それを根気よく服用することが薬と付き合うコツである」。

追悼　小出智子さん

平成九年六月二十二日歿　71歳
法名　智光院浄誉妙重大姉

小出智子さんを葬送

西田　柳宏子

〝川柳塔のお母ちゃん〟と呼ばれ、みなから親しまれ、慕われた川柳塔社理事長小出智子さんをこんなに早く葬送しようとは…。

六月二十二日午後七時から通夜が営まれたが、小出家前の狭い通路や式場乗願寺前は、弔問者で溢れた。翌二十三日の葬儀当日は、夜来の雨も上がってホッとする。午前中に小出家に着いた私は、受付標示や掲示チェックを行っているうちに、諷云児、笛生、美房、武庫坊氏らの顔がそろって会葬者を待つ。

昼過ぎから参列者が続々と詰めかけたが、一般、川柳関係の混雑もなくてスムースに受付を処理することができ、準備した椅子席はすべて弔問者で埋まった。葬儀は順調に進行し、弔電の披露、代表・一般焼香もとどこおりなく終り、最後のお別れとなった。多くの人たちの花で埋められた智子さんのお顔は、ふっくらとして紅もさされ、微かな笑みさえ見たように感じた。やがてご遺体は参列者一同の見送る中、瓜破斎場へ向かった。当日寄せられた弔吟の一部は、ご遺族の要望もあって柩に納められたことをおことわりしたい。

なお、通夜・葬儀の川柳関係の会葬者は併せて百四十名で、本社から役員・同人、各川柳会代表が参加したが、他柳社からは番傘川柳本社副幹事長森中恵美子、時の川柳社主幹小松原爽介、川柳文学社主幹波部白洋、点鐘の会代表墨作二郎、葉文館出版社長斎藤俊輔、美研アート社長山本久美子の各氏にご参列いただいた。

最後に智子さんのご冥福を心からお祈りして報告をおわりますが、何かと不手際がありましたことを深くお詫び申し上げます。

智子さんのこと

八木　千代

あじさい寺の冬を想像せぬことだ　智子

多く残された智子さんの句の中でわたくしのいちばん印象の深い作品です。

正直にいって私がまだ叙情に傾く句ばかり発表していた頃で「叶わないなぁ」と呟いたことを憶えています。

その智子さんが私より若いのにたった一人で川を渡ってしまわれました。前夜のこと、闇夜でない限り欠かさず月を仰ぐのが好きなのですが、湿度のせいかオレンジ色のまるで昔のランプのようなものさびしい月の表情に何かかすめるものがあったのです。いっしょけんめい打ち消して屋内に戻ったのですが、今度はひどい眩暈に襲われて家族を心配させ

てしまいました。「ご存じでしょうか」と、何とも沈んだ声で奥田みつ子さんからの訃報。六月二十二日午前二時十一分、と絶句しながらの電話があったのはその翌朝です。前日にもその前もしばしば花束を持って見舞われていたとか。「病気のほうはいいのだけれど、食欲がないのよ」と電話のたびに伺ってはいて、時折お口に合うようなものを送らせては頂きましたが。今度の大会の前日に出て必ず逢いに行くと決めていました。もうもう後の祭りです。私は何にもしていないのです。あんなに信じ合っていて、いつも助けて貰っていたのに、遠く住んでいるというのを理由にして智子さんの病院にも行ってないのです。「渺湖抄だけは頼みます」と何度もなんども電話をしてくださった時さえ「退院なさるまでよ。預かるだけですよ」「渺湖抄の名前を変えてください」「いいえわたくしもあの名が大好きだから変えない。それに返すときに困りますもの」「千代さん嬉しいアリガトウきっと治るから」とのやりとりがあのひとにとってはどれだけ重いものだったか、その心すら測れぬ愚かな私でした。

智子さんごめんね。旅のたびに誓い合った「二人がかりで恵美子さんに追いつこうね」半ば本気で、冗談めいたあなたの真剣な瞳をこれからも瞳孔に刻みつけて私も向こうの岸にゆくまで、川柳塔で暮らします。

「智子さん、智ちゃん、ほんとうにさよならなんでしょうか」。残念でたまりません。

紫陽花の背から静かな声がする　千代

諸行無常

金井文秋

私が智子さんと知り合ったのは昭和三十年を何年か過ぎた頃だったと思う。川柳ではなく、本屋をしていた時に、雑誌をお買いになったお客さんとしてであった。その後、子供さんの本や雑誌をいくつか買って貰った記憶がある。その後の拘わりも長く続いていた。

その頃から智子さんが川柳に関心を持って居られたのかと、一度聞いてみようと思っていたのだが、とうとう聞き忘れてしまった。

川柳との出合いは、松江梅里さんが亡くなられたので、南大阪の句会を梅里さんの家でするわけにも行かず、皆と相談の上で、私の家に近い乗願寺で開く事になった。

句会場の看板が、目に付かぬはずがない近い場所であった。誰が句会をやっているのか見学させて欲しいと覗かれたのが川柳との出会いである。それから、宮尾あいきさんや、河野君子さんも加わり、自称生野三人娘で、寄ると川柳の話題で花が咲いた、一番楽しかった頃であったろう。

その後、智子さんは独特の感性と積極性でぐんぐん川柳の腕を伸ばして行かれ、智子川柳として一家を成していかれたのであった。句集に「七十はさほどに遠きことならず」と言うのがある。去年会った時に、ほんまやなあと笑っていたのだが。

お迎えがさほどに遠くなかったとは。噫

私より十五も若い智子さんだから、私が死んだ時は追悼文を書いて貰えると思っていたのに逆になった、諸行無常とはこの事か。

慟哭の思い

板尾岳人

六月二十二日早朝五時三十分、訃を聞く。

あなたは此の世を去られました。

あなたのような方でも亡くなられるということは私は信仰のある人間なのだけれども、謎のような気がする。それはあなたに対する神聖な理事長を補佐すべき私が義務を全うしなかったからかも知れない。

智子さんが死んだ、この事は事実だ。もう何処へ行っても智子さんの顔は見られない、逢われない。あなたの死が何かの錯覚のように思われてならない。あなたの死はあまりにも早く来たようですね。何か急いで死んで行ったような気がしてなりません。まことに光を放って巨星の落下する音を聞く思いです。

どうか浄土から永遠の清い眦をひらいて命より愛していたかも知れない川柳の移り変わる姿を見守って下さい。

私達はあなたのその自然死のような絶対の閑けさを思うと羨ましくなります。

悲しい、とても悲しい、でも私は泣かない。

冥想、冥想を生みて殆んど文章にならず、静かに成仏せられんことを。ナムアミダブツ

安らかに眠れや
塔のお母ちゃん

河内天笑

小出智子さんはもう居ない。なんと厳しいことだ。そしてなんと勿体ない人物をなくしたものだ。私にもそしてわれわれの川柳塔にとっても大打撃だ。いまの私には思い切り残念がるより他ない。目を瞑ってあの智子さんを思い出そう。

平成8年4月高野山にて（夫常晴氏写す）

ひたひたと心に入ってくるあの優しい披講のお声。艶やかではっきりと句が聞きとれてそしてとても愛情に溢れた抑揚で一句一句を丁寧に語りかけられた披講は当代随一であった。「智子ぶし」というのは少し軽率かも知れないが、彼女は一つの披講の「節」を持って居られた。

メンズファッションビルの近くにはいくつかの居酒屋があります。他社から客人が遊びに来られた句会のあとなどきまって十数人で居酒屋に崩れ込みますが、そんな折いつもつき合って下さるのが智子さんでした。お酒もそこそこ飲ける方です。ついつい私もメートルが上がる方で「アンタクルマやろ、その位にしとかなアカン」。嫁はんの言う事は聞かんでも智子さんに言われたら「そや、もうやめとこ」という具合に素直になれたのです。

ふところの深さと優しさ
にんげんの大きさとやさしさ

智子さんを語る時いつも「優しさ」がついてくるのです。NHK学園の川柳春秋に自選五十句を載せる際二〇〇句ほどを句箋に書いて五十句を選んで戴きました。その中の一句に「相談はいつもおんなじ人にする」を選んでいただいたのが印象的です。「しっかりしなはれや」と今背中を叩いてくれてるような気が致します。最後に智子さんの隠れた素晴らしさ。素晴らしい軸吟のいくつかを本社句会から拾いました。

大根をどっさり漬けて冬ごもり　S60117
どっちにも言い分があるもつれ糸　S6377
故里の小川は今もメルヘンだ　H1101
冬眠からそのうち覚めることだろう　H238
お隣のピアノが腕をあげている　H446
今がいちばん若いと思う風の中　H617
まなうらに一人の姿とどめて　秋　H7101
わたしの芯を吹き抜けてゆく北の風　H818

先生と歌った大阪市歌

桜井千秀

「浪速の宮の昔より、代々の栄えを重ねきて」私達世代の者が大阪の小学校へ通っていた頃、全校生徒が式典の度歌ったのがこの大阪市歌。今、私はこの歌を口遊びつつ溢れる涙を抑えることが出来ないでいる。

もう八年位前のこと突然、「小出智子ですが千秀さんとこの近くに木本八幡宮があると思うのですが」と電話。木本八幡宮は私の家の二階からよく見えるので、その由を告げると「私が嫁いで来て間もない頃、小出家の先代が八幡宮に献灯籠を奉納してあり、姑さんに連れられて参拝、その後気になりつつ尋ねる機会がなくて」と聞き、私は早速八幡宮の幾つかの献灯籠の中で「小出仙次郎」の文字を見つけすぐお電話を差し上げました。先生は和歌山の生れで小学校は大阪、私も生れは和歌山で大阪の小学校と話が弾んで、二人で声を揃えて歌ったのがこの大阪市歌でした。

二人で歌うと忘れかけていた部分も思い出されて来て最後まで、大阪と和歌山を繋ぐ電話で合唱したのでした。その節お約束した通りその後先生は来和、佐藤奏月さんもご一緒だったので私は堀畑靖子さんを呼んで、四人で加太の淡島神社へも参拝してきました。

その時先生が何気なくおっしゃった「もう今度は二度とこちらへようお参りしないかも知れない」の通りお招き出来なくなったのです。先生を囲んで和歌山の川柳塔関係の女性ばかり集まって頂き、八幡宮の客間で句会を開きたいと計画を立てながら、実現出来ぬまま先生は帰らぬ人になられました。私はこの大阪市歌を、これからもずっと心の中で歌って行こうと思います。受話器の向こうで楽しく歌ってくださった先生を偲びながら…。

お出迎え

高杉鬼遊

昭和五十九年の春のことだった。病名不詳のまま私は八尾の徳州会病院に入院していた。小出智子さんが見舞いに来られ、紫のお守り袋を頂戴した。それまで数日つづいた原因不明の発熱がその夜から平熱になった。翌朝、主治医の回診があり熱の下がったのに不思議な顔をされた。私はお守りのご加護だと判っていたが、主治医にも妻にもそれを言うことができなかった。小出智子さんと八木千代さんが山陰「かむろ大師」へ、快癒ご祈祷まで上げて下さった心のこもったお守りである。

智子さんとの交流は永い。川村好郎、清水白柳氏お二人の薫陶をうけた時代から、また橘高薫風主幹の第一期副主幹を私と同時に指名されたこともあって同じ道を歩いてきた。

智子さんが理事長に指名された時には、深刻に悩んでおられた。責任感の重さは信頼度に比例する。「鬼遊さん、どないしよう」と何度聞いたことか。「どうと言うことないが」と何度言ったことか。ずいぶん無責任な返事だったと悔やまれる。

この六月二十八日の追悼川柳大会を案じながらどれだけ心配していたことか、闘病と苦悩の半歳だった。その大会を前に六月二十二日に幽明境を異にされるとは、何ともやり切れない。

告別式の当日、早いめに出かけた。柩に合掌していると同行の千歩が線香の立ち消えに気づき火を点した。智子さんが呼んでいたのかも知れない。責任感の強い智子さんだ。「追悼川柳大会」に合わせて、麻生路郎先生、麻生馥乃先生、中島生々庵先生、西尾栞先生をお出迎えにこの世を旅立たれたのだ。川村好郎先生も清水白柳先生もお連れ下さいね。

住みなれた生野区勝山南の家並の路地を静かに霊柩車か1353が遠ざかる。

さよならも言わずに逝っていいですか

嵐の中に散る名花

―小出智子理事長への悼辞

東野大八

麻生路郎御夫妻・中島生々庵・西尾栞諸先生の追悼大会に、傘寿過ぎの身を老妻同伴で参加させて頂いたのは六月二十八日の大阪はたかつガーデンの広い会場であった。

折からこの日は、台風8号が関西一円を襲った暴風警報下の最中であったが、なんと会場は二百七十余人の人いきれで、故人の諸先生方の御遺徳が偲ばれ、われら二人は感無量であった。

〝嵐を怖れぬ路郎や〟とこの大会準備でまさに疲労困憊その極にありとお見受けした橘高薫風主幹の玄関先での一言に、当方ホッと安堵の胸を押さえて、〝全くその通りやな〟と打ちうなずくだけであった。

しかし、この挨拶の中で〝小出智子理事長が亡くなりはったんや〟の一言に、ガツンと頭上へ一撃のように鉄槌が下され、思わず愕然と身震いした。

路郎先生や、栞先生の追悼大会やというのになんということだ。全くこの一言に、しばしは絶句して、返す言葉もなかった。

実のところ、その前日に薫風主幹から一言小出さんの死を知らされていたことだが、乗り換えの連続で、老軀よれよれの頭では、エッ、と愕きながらも、まさか、の想いが一瞬たちどまったままで、無理矢理にさり気なく装っていたものの、大会会場の玄関先のこの悲報は、場所が場所だし、関係者の人々の中から直接耳にしただけに、そのショックは強烈だったわけだ。

やがて腰を落ちつけた私の脳裡に、ニコヤカな智子さんの…いや〝智ちゃん〟と呼びつづけたあの日、あの時のニコヤカな彼女がどっとばかり湧き上がり、思わず涙をこぼした。

休憩室に入っても、この人の死が全身を駆け抜け続けてさっぱり落ちつけなかった。

小出智子追悼記が、他にたくさん寄せられるだろうが、率直にいえば私自身が、文字通り塔内切っての女流ながら塔本社理事長としての彼女の肩書からして、惜しみても余る人材を失ったのだ、という衝撃がいつまでも、長く心の底に残った。

智子さんは、常に謙虚で、控え目ながら、相対しても常に人懐こいお人柄で、東北の弘前での、一つの台座に向い合った折の会話の一つ一つがまざまざと甦った。じかに、二人っきりで柔らかな会話を交わした―私にとってはこの時が最後の智子さん…いや〝智ちゃん〟だったのだ。

「智子さんを役員にせな、塔はあきませんで、智子さんを…」と言い続けていられた、この地の波多野五楽庵さんの一言も、昨日のようにまざまざと甦った。そうだ、そうだ、と強く相槌をうちつづけたこのおれ。

川柳塔の前身だった川柳雑誌の頃から、われら麻生路郎門下の「力」の支えは数多い秀れた女性群の、練達の作句力にあったことは麻生葭乃先生を頂点に、川柳界中でもよく知悉されていたことである。その女性作家のジャングルの芯のような存在であったのが他ならぬ小出智子さんであったことは、一門中誰もが認めるところであった。

麻生路郎一門の追悼大会への、嵐の日ものかは馳せ集まった人々の間に電光のようにさしつらぬいたこの悲報は、私の場合だけでも、永久に忘却できぬ忌日であったわけだ。

小出智子本社理事長…永遠に安かれ―。

私は今、このことだけを念じつつ、混乱する頭でこれを書いた。そして老軀身障の身を孤軍奮励されている橘高薫風主幹への、心からなる人の和の実践に努められんことを心底祈念して、一老相談役たる私の、小出理事長追悼の言葉としたい。

第２回川柳塔まつりで

弔電（敬称略・順不同）

番傘川柳本社・大阪川柳人クラブ・ふあうすと川柳社・川柳塔社・熊本川柳会・いずも川柳会・大原川柳社・西宮北口川柳会・川柳塔おおとり・川柳塔鹿野みか月会員一同・川柳塔おっぱこ吟社・鳥取県川柳作家協会・うみなり川柳会・川柳ねやがわ会員一同・川柳塔きゃらぼく一同
川柳塔わかやま吟社牛尾緑良・むらくも川柳会藤井明朗・川柳塔唐津支部田口虹汀・弓削川柳社浜野奇童・ＮＨＫ学園理事長沖清司・川柳展望社天根夢草・とっとり川柳会坂田和歌子・竹原川柳会岡本清水・寝屋川市川柳協会山本三郎・番傘川柳本社梶川雄次郎・川柳ささやま遠山可住
中尾藻介・黒川紫香・月原宵明・八木千代・中原諷人・中原みさ子・中原汲香・岩本笑子木野由紀子・松本文子・小島蘭幸・山内房子橋本多哥由・松原寿子・恒松叮紅・榎本吐来

弔吟

ひとり私は静かに開く「蕗の薹」　永田　暁風
花ざくろ濡らして雨はもらい泣き　墨　作二郎
バーグマンの帽子の似合うひとだった　森中恵美子
あじさいの色美しく旅立ちぬ　秋元　てる
蕗の薹梅雨のさなかを惜しまれて　浅野　房子
君の句をしのぶ読経がなお続く　阿萬　萬的
遺されし句集を開き梅雨さむし　安藤寿美子
浄土ではゆっくりしいや五七五　板尾　岳人
五七五極め旅立つ蕗の薹　稲葉　冬葉
鈴の音もかすか永遠なる国へ立つ　岩本　笑子
川柳塔の母さんの忌よ紫陽花忌　奥田みつ子
サギソウの一羽が空を舞い給う　片岡智恵子
早過ぎる別れに巡る走馬灯　門谷たず子
七十一あまりにせわし黄泉の旅　金井　文秋
足跡をのこして旅を急がれる　川島諷云児
万巻の中に選びし君は星　川端　一歩
出来るならついて行きたやあの世まで　北野　久子
失いし星に梅雨空なお冥し　木本　朱夏
手に温かく蕗の薹読み返す　黒田　能子
蕗の薹まだ焼香はしていない　小池しげお
美しい湖がある　あなたがいる　小島　蘭幸
煙草屋を曲がりあなたの喪にならぶ　小林　一夫
雨しとどああ旅立を嘆くごと　桜井　千秀
霹靂や今朝はあじさいほろほろこぼれ　田中　薫
さようなら川柳塔のお母ちゃん　田中　正坊
緑陰の雨に濡れてる蕗の薹　田中　透太
智子さん慈母観音となり給う　高須賀金太
智光院浄土の句座に花が咲き　高杉　千歩
柳界の母梅雨空へ旅立ちぬ　津守　柳伸
智子さん野仏のごと今いずこ　友碇　雅子
六月の花にさそわれ旅立ちぬ　西口いわゑ
梅雨晴間待ってたように逝き給い　西田柳宏子
雨よ降れ悲しみ流し尽くすまで　西出　楓楽
夏形の風に訣れ言葉を見失う　野村太茂津
紫陽花の今日はなみだをためて咲く　春城武庫坊
師のまなざしのことにやさしく刻まれて　春城　年代
蕗の薹天も惜しみてしぐる雨　日阪　秋子
お月さま智子さんいまどの辺り　古川喜美子
心中の祈りとどかず蕗の薹　牧渕富喜子
智子選ともう書くことのないショック　宮口　笛生
天空に月はしばしのかくれんぼ　三輪　式美
悲しみに耐えて無情の雨に立つ　山口三千子
紫陽花はむらさきのまま天に昇る　山崎　君子
あし跡を辿れば出会うふきの薹　山本希久子
やさしさをなぜ散り急ぐ沙羅双樹　吉田あずき
あじさいの彩まで涙色に見え　米田　恭昌

小出智子50句

草を踏む緋の絨毯にまさりけり
母の瞳にこの母鳥も苦労性
蝸牛このときめきがわかるかい
長男の写真が少し多すぎる
お年玉無駄な言葉は添えぬもの
北国の訛りがとれぬ好きな人
道を聞くだけにも人の選り好み
失った指輪のように忘れよう
にぎりめし母の祈りのかたちして
友達と一緒に齢をとってゆく
七十はさほどに遠きことならず
いつまでの女と思う春の傘
一緒には死ねない夫婦茶碗かな
静うた夜も枕が二つある
食欲がないとは言うたことがなし
合格をしたのか会釈してくれる
夫にもお伽噺をしてあげよ
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
夫より包容力のあるポスト
小説の終りのように死にたしと
流されたとこで小さな花をつけ
古いものが弱くて老母を哀します
失敗でふくらんでゆく雪だるま
月見草ひとりの湖をもつひとに
人には情けお地蔵さまによだれかけ
胸のバッジと討ち死にをするまでだ
背伸びしてひっくり返りそうになる
銀色で描く故里の冬景色
俎板の上でそおっと眼を開ける
花屋よりこころの通う果物屋
ビラを配ると人の心がよく見える
心配は海苔が湿ったほどのこと
南座のあたりが好きな女たち
妻とした約束だからすぐ忘れ
可愛らしい鼠に描いてやりましょう
忘れられてゆく焙烙もゆきひらも
トイレから出てきた顔は正直な
うちの酒が美味しいなどと言いはじめ
五十九歳これから川へ洗濯に
生きるべし玉葱の芽が出る如く
夫婦にも黄門さんの来る時間
バーグマンのような帽子も被ずじまい
短冊に小さな過去が書いてある
今にして子が膝に居た頃はよし
ほっとした処に置いてあるみかん
展示会娘が一人欲しくなる
身の上ばなし程よく電車空いている
引き出しを出るに出られぬ花の種
魂はハンドバッグに入れてある
名曲をゆっくり聞いている仏

寺澤みど里さんを偲ぶ

青戸田鶴

五月八日正午過ぎ寺澤みど里さんは帰らぬ人になられ、みんなでお別れにかけつけました。お顔はつらかった闘病の苦しみもなく、今にも話しかけられるようなおだやかな顔でした。パッチリとした瞳の美人だったみど里さんは、旅立ちのよろこびといった雰囲気さえ見せて、クリスチャンだった清々しい生き方が感じられました。

高校の先生で書家だったご主人を亡くされて二十年にもなりましょうか。

共に歩んだ道で楽しさわかち合い

よくご一緒に川柳塔の大会で大阪に行ったり、高野山の句会、句碑建立で四国にもご一緒しました。まるで修学旅行のような楽しさで最後は竹原の大会でした。竹原の街でおしゃれなセーターを買って、うれしそうだった笑顔がまだ消えません。作句に対する真剣さはほんとうに頭の下がるような熱心さで、良い句を沢山に残されました。

まだ生きる希み大きな瞳が語り

昨年九月の終りごろ入院され、年末には退院されて、一時はお元気そうに見えましたが、病魔はやさしいみど里さんを天国に連れ去ってしまいました。二男一女の子宝で、ご長男の奥さま、嫁がれているお嬢さん、お孫さんたちの献身的なご看病で、呼吸困難になりながらも、幸せな一生でしたと一人一人に感謝され、「天国でも川柳を作ります。さあ忙しい忙しい」と言い残して旅立たれたように伺いました。私共も大切な大切な仲間を失った淋しさは日ごとにつのるばかりです。

柩の中ゆり起したい友の貌

最後に作られた句は教会の小冊子にのせられた「春きたりなば」の十句が遺作となりました。

病室の窓百日の浮き沈み
いち日が長い透視の結果待ち
雲間から覗く明りに神を見た
遠雷は神の警笛だとおもう
きたりなば春きたりなば掌を合わす
万歩計明日はあすはと譲らない
讃美歌の愛に溺れゆく日暮れ
螺旋階段空を信じてついてゆく
触れるたび底びかりする皮表紙
常磐木の森にゆだねている月日

これからもあじさいの季節になると、みど里さんのやさしい瞳を思い出すことになります。どうぞ安らかにお眠り下さい。　合掌

あの世までこの薄化粧消えないで

追悼句

梅雨空のみどりの雨に濡れている　荒介
小暗闇あじさいの白　白きまま　千代
召されゆく人美しきみどりの絵　日枝子
衣ずれの音天国の階のぼる　なみ
主のみもと花やすらいて咲いている　亜弥
百合一輪今もほほ笑む森の中　千春

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

岸和田川柳会　長谷川呂万報

役者だな黒を上手に白と言う　基
名役者出てきただけで笑わせる　路子
沖縄を売って総理の役者ぶり　ダン吉
鏡台の顔が役者になっている　狸村
合格通知仏に見えた郵便屋　穣一
ビッグバン郵便局に預け替え　呂万
郵便貯金いま安心をして預け　甚一
古手紙慕情の頃をいよよ焼く　洞庵
銀行不信郵便貯金に切替える　萬的
クイズ出すハガきせっせと書いている　柳宏子
長話ようやく終る俄か雨　洋
子のためにようやくお酒止めました　東雲
ようやくに越えた山坂喜寿の年　敏光
気がかりな残った長女縁薄る　信博
恥曝しやっと税務署納得し　文時
セーターがようやく出来て彼待たず　苑子
娘に聞いてようやく合点コマーシャル　辰郎
ようやくのチャンスに迷うあかんたれ　鹿太郎
豊作で安い落札泣く農家　昭二
落札で陰で力が支配する　浪速子
談合があって落札すんなりと　弘象
落札を疑惑承知で社に尽くす　一齋
がらくたの落札値付のおもしろさ　冨士子
落札のいびつな壺を床におく　さち子
ひやかしで出した指し値が札に落ち　白光子
ぶっちゃけた話をしてる落札日　一弥
立派だと褒めてもらった子沢山　盛之
伴走とフルマラソンを走り抜く　松風
その姿立派と思う蟻の列　ひで
立派にもならず普通の人がいい　金太

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

信じてた川に時どき叛かれる　マツエ
花嫁の父を泣かせて式終わる　坊太郎
大海は雑魚もヒラメも区別なし　吟笑
見送りの妻点になり大漁旗　かおり
南風がきて戦友の雄叫び聞こえそう　あきら
更年期下駄と草履の夫婦仲　正雪
もめ事が嫌で置いてる車間距離　よしみ
険しくも後へ戻れぬ八十路坂　治延
お笑いの裏に悲劇のメロドラマ　放任
貝拾い小波後を消してゆく　文仙
瑞穂の国蛙も泣かぬ圃地がありもたれ合う人といさかい繰返す　輝夫
初孫で十二の干支が勢揃い　ひかり
雑草も明日に向かって生きている　はつ恵
ドカン一発久しく妻に抱きつかれ　なみ子
マイホーム妻の笑顔が待っている　チカエ
酔いが覚め口の軽さを悔いている　いさむ

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

もっと出よ隠された悪もっと出よ　香住
度の合わぬ眼鏡のようなくい違い　欣史子
抽斗に女は隠す泣きぼくろ　喜美子
くもったままの眼鏡で食べているうどん　あずき
もう二度と逢えぬ煙に掌を合わせ　清芳
幸せの返事くるまで戸をたたく　シマ子

川柳クラブわたの花　吉村一風報

水溜まり高い青空水鏡　道子
疑いがはれて嬉しいうまい酒　君江
動燃が事実の口をおさえてる　春子
合格の少女が跳んだ水溜まり　幸枝
金運の神へ標札磨いとく　一風
かたくなに事実曲げない父の背な　隆盛
三歳児お年玉から知恵がつき　友甫
生きざまの事実を握る指の彩　朝子
水溜まりチャプチャプ遊ぶランドセル　ますみ
幸せもお金もほどほどの暮し　幸子
解決をお金ですましほっとする　トシエ
釣って来た鯛疑いの目で見られ　まさと
松の木に桜が咲いて事実とは　明子
減食はお金の残るダイエット　けいこ
生い立ちに私ひとりが知る事実　いつふみ
金抱いてだんだん心冷えたのか　春江
アスファルト水溜まりさえ奪い去り　知佐子
ほどほどの愛とお金で昼寝する　美代子

花びらを一つ浮かせた水溜まり　民子
生きていく事実パソコン習ってる　明
疑いの目で見りゃみんな疑わし　八寿子
おつかいをまわり道さす水溜まり　宏
甘い水飲んで疑い深くなる　剛治
金の生る木がだんだんと痩せてくる　ミツ子
レジに立つ男の財布のぞかれる　鬼遊

川柳岩出　児島与呂志報

進言のペン重くなり軽くなり　悦男
遊び過ぎ母がつけてた夜叉の面　春子
健康で働ける事幸せだ　英子
働いた軍手は夫の掌の形　精子
遊びごと知らぬ勝気な母の針　保子
家族にも寝顔見せない割烹着　アサ
ワープロに株奪われた朽ちたペン　和子
働いてただ働いて五十年　正義
働いて女でいたい夢捨てず　昌子
まだ逢えぬペンフレンドに弾む胸　千鶴子
ペン先が過去と未来を喋りだす　愛子
ベルが鳴り仕事の鬼の顔となる　重徳
働いて子育て終り畑仕事　哲雄
働いてなお働いて日が暮れる　たねえ
働いた後でお金はついて来る　ふみえ
研修という名のもとの漫遊記　正直
角ばったペンが彼氏の型で来る　与呂志

岩美川柳会　羽津川公乃報

大風に西瓜のテント飛んで逃げ　希久代
風吹いて笑い転げる安普請　薫
風向きが変わると味方敵になり　単車
調子付いて女の尻を追いまわす　一夫
調子よい今の自分をラップする　美恵子
整体へ行って調子がなおくずれ　和歌子
結婚を境に調子狂いだす　公乃
胃の調子悪いが酒はよう止めん　蟹郎
誰とでも話合わせる調子者　節子
輝いて女は調子に乗りやすい　多哥由
うば桜調子はずれの唄うたう　信子
調子づくまでに舞台の幕が降り　孝男
体調が良いから医者に行ってくる　忠良
本調子で鳴くうぐいすに嫉妬する　きみ子
騙されているとも知らぬ調子者　芳江
五月雨に調子合わせて代を掻く　螢
調子よい寝息極楽まで行こう　大漁
その調子リズムに乗って勝ち進む　睦子

川柳東大阪　森下愛論報

ふたつみつ秘密があった句読点　ばっは
点一つ抜けてまっせと字が笑う　太郎
弱点を握られ反論ままならず　頂留子
満点の妻も女として不満　太一
転んだら無事では済まぬ老いの足　文秋
万札に転ぶ女のつけ黒子　柳伸
転ぶ度ヒントを摑み立ち上がる　度
七転八起耐えて勝者の顔となる　良伸
転んでもポッケの夢は放さない　朝子
句読点やたらに多い老母の文　柳宏子
身を粉にしてリストラと言う非情　恭昌
藤の花ゆらり花粉の季も移る　三重子
もくせいの香り古里思い出す　庸佑
職業の香りが服に付きまとう　東雲
とりとめたいのちは花の香にむせぶ　雅文
みそ汁の香りにファイトもらう朝　一志
思慕を抱く限りは消えぬ移り香よ　湖風
母の忌に母の香りの部屋に座し　愛論

大原川柳社　矢内寿恵子報

とんちんかんな返事も出てる憩いの場　みずえ
花見客うぐいす憩う枝がない　さちこ
憩う日は留守の電話に切りかえて　すみえ
一杯のお茶が和ます憩いの輪　やすこ
憩う日もなかった母の縞もんぺ　玉恵

佳句地十選（7月号から）

宮西弥生

希望の数だけ絶望を味わった　史風
原爆ドーム世界遺産で生きつづけ　マサコ
西日射して海はやさしい母となる　比ろ志
何時までも水に流さぬ国ばかり　吉太郎
百歳の寝息ときどき確かめる　たつお
折々の花が見送る無人駅　佐代子
おとなになったんだ心をバラ色に　恒明
右の手で握手左の手で謀反　石舟
どんどんと茶髪も混じる村祭　トシエ
返り咲く望みは捨ててない机　諷云児

独り居てすべて憩いの日が暮れる　あやこ
草に寝て雲の流れを追うてます　辰江
きっと来る好調信じ切っている　悦子
好調な男にたくす夢のかず　妻子
好調な道にもあった落し穴　巴子
大会が終りしばしの憩いもつ　喜美子
山荘に憩う一夜が短すぎ　こふゆ
人生の節目ふし目を憩いつつ　敏子
老人の憩いすまなく行く句会　朝代
大会の絶好調に酔うている　みさえ
故郷は憩いの場です母の膝　たづ子
井戸端の憩いを残す古い街　あすなろ
鶴一羽折るひとときの憩いかも　和子
永遠の憩い柩の中にある　寿恵子

川柳塔ふくべ川柳会　橋本多哥由報

キスするかもらっきょう一つだけにしょう　和歌子
ただという安い空気に生かされる　春恵
血液もみどりに染まるハイキング　ひろ子
らっきょうは福部の産が日本一　一夫
停年のカバンは虹も折りたたみ　明美
ハイキングコースになった花の森　きみ子
次々にカバンを変えても芽が出ない　美恵子
伸び過ぎた爪が気まずい嘘をいう　螢
穴のあいた安い帽子を捨てられぬ　睦子
ハイキングコース先祖の墓も入れ　あけみ
らっきょうのマラソン村も活き返る　孝男
ハイキング心を洗う風が吹く　信子
安物の油料理で腹が出る　薫
貧乏性安いと言えば目が変わる　輪多朗
言いすぎて気まずい二人夜の雨　昭恵
らっきょうをくばり恩師を偲んでる　多哥由

川柳大阪　坊農　柳弘報

ナイーブな心いつでも持ってます　中3　圭
記念にともらった指輪が入らない　まゆ子
煩悩に目覚めて風の音を聞く　信酔
金婚の記念に浸る夫婦風呂　喜楽
爽やかな笑顔が僕のビタミン剤　照月
この写真唯一母と逢える顔　川童
捨て切れず倉庫で眠る記念品　叭笑
思い出も記念写真も色セピア　青道
爽やかな笑顔の裏が見抜けない　雅巣
ナイーブさあったんですよ私にも　かよこ
長女の齢で数える夫婦道　良花
ナイーブな父虎きちで夢を追い　一風
爽やかな風石仏のほほを撫で　洛酔
記念日は水掛不動で待ち合せ　美すゞ
初キッスそんな記念もありました　朝子
記念日の番茶がうまい老夫婦　希久志
爽やかに門から駆け出る一年生　比呂志
旅記念花と優しさ胸に活け　柳昌
ちょっぴりと惚気感じるいい会話　美花
追伸の言葉に心あたたまり　しげお
追伸で書く紫陽花に夏がある　元紀
日本一大阪ドームに座って見　三十四
ナイーブな妻と思っていたのだが　ダン吉
もう一度生まれ変われば妻と添う　一歩
ナイーブな犬誰にでも尻尾ふる　まつお
爽やかな風に合わせている歩幅　笑風
さわやかな風雑念がふっ切れる　鉄心
さわやかな朝本日も靴軽し　金太
愛妻の味聞かされるあほらしさ　重人
金婚式いまだ惚気を言う元気　柳弘

竹原川柳会　時広　一路報

甘酸っぱい恋をしてます十八歳　高3　史子
自転車で朝一番の風を切る　高1　千枝
連休の最後は父にとってある　蘭幸
連休がやって来た僕の気も知らず　笹舟
連休を散財する人稼ぐ人　静佳
連休を悠々すごす老い二人　蝸牛
楽でない三百六十五連休　菁居
はすかいに笑顔を作る朝鏡　淑子
体まかせ天気次第の農をする　清水
お蔭様他人の飯は宝物　喜久恵
酒よりもフルーツがよい歳になり　勲
フルーツを盛れば料理活きてくる　美佐雄
お弁当うさぎりんごが跳ねてくる　比呂子
一枚の絵のフルーツに酔わされる　一枝
昨日よりもっと素敵な夢を追う　夏喜
昨日まで夢をみていた宝くじ　年子
昨日とは違う砂丘の貌を観る　貞子
ときめいて昨日も今日も旅にいる　栄恵
さざなみの立った昨日は忘れよう　房子
ポキポキと昨日をたたむ傘の骨　喜美子
ジャンケンポン昨日の敵も輪に入り　節夫

昨日より上手になろうほめ言葉　笑子
昨日から今日が生れてくる日の出　静風
二十代昨日で終りまだ嫁さず　一路

三幸川柳教室　三宅保州報

ファン伸びニュース和歌山街の顔　健三郎
棒グラフ伸ばす女の持つ依怙地　孝子
影伸びるきっと私を追い越す気　和子
フォレストシティー裸になって伸び悩む　貞子
アンテナを伸ばせばそこにある虚飾　秀男
花鳥風月歩幅が伸びる万歩計　三千子
格式の高さと住んで気が抜けぬ　百合子
かと言って同居となれば考える　みね
天上天下どこに住もうと阿弥陀の掌　美智子
やどかりはローンのいらぬ家を持つ　正甫
どの国に住んでも朝はきっと来る　桂香
白蟻と同居骨までしゃぶられる　千秀
張り裂ける胸を花びら撫でてゆく　満洲子
割り切れぬものへ不信の石を積む　昭枝
妥協して割り切れぬ夜の目がさえる　和代
脳死論俺の意見もまとまらず　章子
ひと言が仲間割れした苦い過去　敏子
割り切ったつもり淋しい春の宵　かず子
腹割った二人に溶けてゆく根雪　公子
ペアカップ割って昨日を振り向かぬ　朱夏
真っ二つに割って見せたい胸の内　保州
白いブランコ揺れてる庭は夢の夢　登美子
白無垢が少し染まって里帰り　嘉平
父の便り余白が何か言いたそう　正一

大根の白さだあれも疑わぬ　当代
傘寿なおカッポレ踊る白い足袋　鉄治
ポケットで白い封筒さわいでる　起世子
冤罪は晴れても髪は白くなり　町子
おふくろの髪は白くてやわらかい　親踏
仮の世の仮の住処に胡坐かく　初子

溝口川柳会　小西雄々報

ことのほか祖父母うれしい初節句　豊枝
巷にも節句祝って粽の香　信敬
泳ぐ鯉子供の夢と親の見栄　康女
有りったけ料理を食べた祝い膳　正光
鯉のぼり泳ぐ家数減ってきた　智恵子
自慢げに泳ぐ隣の鯉のぼり　静江
鯉のぼりプライドつけて泳ぎます　弘子
鯉のぼり急いで上げて田植する　久子
たくましい子に育つよう大幟　鈴江
パーティーのような祝いをする節句　雄々

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

プライバシー杭打ち凌ぐ嫁の城　稲子
杭を外すと世論斜めに渦を巻く　武庫坊
急流に身じろぎもせぬ父の杭　節子
頑丈な杭隣との高い塀　ルイ子
濁流を切り裂く杭の力こぶ　泰雄
活断層に抗議の杭をたたき込む　比ろ志
友禅ながし杭カラフルな絵にとける　静江
遠からずくる老醜は蹴散らそう　英一
補聴器をはずせばうるさくない街だ　宵草

回り椅子まではるかな固い椅子　〆女
遠距離を鈍行でゆく旅マニア　波留吉
ひそひそ話とっても風に乗りたがる　あきら
ひそひそと影だけ動く悪企み　紫香
ひそひそ話壁の耳には戸は立たず　秀夫
ねむそうな声でひそひそ熱帯魚　茶の子
巻かれても素朴な杉は伸びている　東雲
海の風素朴になれと言うように　艶子
素朴さが旧家と分かる床の軸　白渓子
素朴さを都会の風にはがされる　克治
メイストーム過ぎ駅の素朴な落日　薫
時化の海老母一心に祈るだけ　かおり
酸欠の街ですてきな恋拾う　マツヱ
やませみの子育て見つつお茶を摘む　獏沓
肩書が取れて身軽になる名刺　庸佑
保育器に背伸びしている自己主張　高栄
思惑とはちがった方へ行く流れ　よ志子
ややこしい橋は渡らぬことにする　重人
足の爪ばかりが伸びて五月病　澄子
ふくらんで割れる人生シャボン玉　大輔
ライバルが大物だとは知っている　しげお

川柳はまでら　井上喜酔報

日本の無茶がジャングル丸裸　三四郎
無茶を言うどこかの国に困りはて　凡兵
無茶喰いを止めて胃袋上機嫌　千流
孫の無茶怒りもせずに笑ってる　正信
無茶聞いてばかりで日本情けない　宙宙
無茶苦茶な女は夏の赤い爪　与呂志

目立ちたい若さの無茶が目に余る　雅巣
無茶をした仲間の訃報淋しいね　源五郎
無茶をする夫に妻が居てくれる　笑風
万歩計無茶はするまい古希の坂　しげお
笑われた無茶でも恋は実を結び　喜酔

川柳塔わかやま吟社　宮口　克子報

狙のくぼみに沈む妻の飢え　めぐみ
細い腕しっかり生きてきた自信　克子
塩加減秤のような妻の指　金太
天国へ夢と炎を持って行く　寿子
ありがとうを忘れて僕が飢えている　ダン吉
飯粒を拾う飢えてるからでない　良
主義主張通して愛に飢えている　千寿子
つまらない野心で地球が飢えている　冨美子
好き嫌い言えてる時は飢えてない　美子
酔いがさめ青菜に塩の武勇伝　高夫
塩嘗める職場に老いの翳が濃い　愿
夫逝きて塩一つまみ抜けたよな　修子
もり塩に亡母の教えが生きている　君枝
細い目を描き入れコケシとの対話　鉄治
大正ロマン細いうなじの夢二の絵　萬的
細腕に立ちはだかった茨道　豊太
行間に細い炎が燃えている　稚代
真剣勝負これから先は細い道　輝子
細腕へ明日を夢見る疵のあと　公子
天国で皆会いましょう百年後　保州
天国行きの宛名は何と書けばいい　呑天
天国に居ると他人がなぐさめる　和重
歩行者天国まずは園児が大手ふり　淳太郎
天国と地獄を分ける嘘一つ　利治
一間でも天国あなたと一緒なら　紀久子
天国からときどき降りてくる神話　栄美子
天国へ迷わず行ける略図かく　さち子
一善で天国予約する庶民　泰子
叶わない恋の駆け引き天国で　育子
天国も地獄も踏んで動じぬ瞳　精子

いずも川柳会　園山多賀子報

清貧に生きて豊かな詩がある　きみえ
迷い道豊かな知恵を借りに行く　陽子
豊かさに大切なもの見失う　ひろし
豊かではないが不平のないくらし　清子
味噌汁の香り豊かな朝にする　まさえ
豊かさに溺れた果ての身の始末　芳風
豊かさの中味地球が問うている　義弘
喝采に自惚れません葱坊主　多賀子
自惚れに男を捨てた金バッジ　しま子
自惚れにアンテナ高く上げる人　満江
自惚れの亀が書いてる挑戦状　昌枝
老残もかすかな自惚れ持って生き　ふじ子
一杯咲いて花が返事をしてくれた　文子
とりあえず返事してから考える　愛子
ハイハイと優しさごっこしています　青湖
前例がございませんという返事　茂美
封を切る瞬間炎になる返事　蘭水
一つ返事で大きな荷物背負い込む　芙佐子
七十のロマン電池を入れ替える　章峰
今日生きて今日のロマンを食べてます　治代
ブランコが揺れてロマンが甦る　義良
掘り起す土にロマンの香がしみる　房子
石一つ男のロマン込めて打つ　あきら
面白い男ロマンをかき立てる　おしえ
老いてなおロマン拾って橋渡る　嘉寿恵
月桂樹真っ直ぐ伸びてまだ無冠　れいじ
年輪に樹の自負がある木目濃さ　裕
うつらうつら老樹は過去の夢ばかり　ちえ
注連縄で老樹がかせぐ神酒代　草丘
明るい話題に飢えている大樹　篤子

ほたる川柳同好会　井上　直次報

ふんぎりの一番おそいお金持ち　薫風
はみ出した線がふんぎりかも知れぬ　明光
訣れ話ふんぎりつけるのは女　佳秋
ふんぎりがついてたばこに手が伸びる　ただし
ふんぎりをつけ高いびきの夫といる　吉太郎
再就職ふんぎりつけて赤いタイ　直次
ふんぎりのつかぬ癒着のＶＩＰ口座　馬洗
ふんぎりを付けるに惜しい社長の座　方郎
ふんぎりがつかずがらくた溜めている　正安
古本を売るふんぎりがまだつかぬ　たけお
ふんぎりの悪い男はやさしそう　よしろう
ふんぎりがついてやっぱり元の道　英子
掃除機の音ふんぎりがついたらし　敞子
ふんぎりの重さに妻は気付かない　昭子
色めくも脱サラまでにふんぎれず　久子
ふんぎりをつけた女の大ジョッキ　しずえ

集まらぬ客にパンダが大あくび　正三郎
寄付集め断り切れぬ顔が来る　祥風
離合集散泣いて笑って過ぎてゆく　保子
開店に粗品目当ての客の数　桂子
満開に集まる蜂の羽の音　まみ子
制服を脱いだ集いに見る人生　キヨ子
傷心の旅はローカル線に乗る　螢柳
お互いに乗り換えもせず五十年　善守
薔薇園の香りを乗せた風に会う　竹二
そんな話に乗ったらあかんおばあちゃん　万之助
風に乗り隣のごみがうちにくる　喜美子
杳き日の雲に乗る夢風に乗る夢　久美子

南大阪川柳会　寺井東雲報

招かれて置物褒める言葉選る　庸佑
ほどほどの大きさでよい玉手箱　透太
花の名をひとつ覚えた散歩道　千里
眼鏡拭きながら応じている妥協　萬的
満員に大きな尻が幅を取る　悟郎
自信過剰大きな靴でよく転ぶ　寿美
屋外の風がうれしい車椅子　朝子
ひそひその話は大きい耳を立て　東雲
兆と言う金大きさがピンと来ぬ　文秋
可笑しくなる銀行ばくに無関係　たもつ
置時計余生をきざむ寒い音　志華子
可笑しいな帰りが遅いうちの猫　重人
良いしつけ悪い誘いに応じない　度
声が大きい辺り見回す目が叱る　秋子
応答の声もかすかなムツゴロウ　ダン吉
サクラだったんだ一番に手をあげる　恒明
主旨わかる応じたいけど金はない　哲郎
税金の行方可笑しくなる福祉　柳伸
風水占い西に黄色い花瓶おく　直子
山路で拾った石が飾られる　咲
社長とは名ばかり置物飾り物　柳宏子
屋外まで聞こえる合格の電話口　真砂
あの女が応じてくれぬテレパシー　章久
ストレスを一気にジェットコースター　頂留子
屋外は白一色の衣がえ　勝義
客筋の値踏みしている招き猫　三男
流行も可笑しいと思う最先端　清水
身内でも金の話は応じかね　智久
呼びかけに応じ地下足袋モンペ服　久峰
屋外でつけた仮面がはがれない　千梢

はびきの市民川柳会　芦田絢子報

女だと認めてくれているうわさ　絢子
うるさかった息子黙って嫁の飯　晋
難病は「症候群」で片付ける　専平
通販が満載させる春の彩　敦子
叩いたら畳むかしを語り出す　悦子
手の内を半分見せて裏をかく　獏沓
男には涙の武器はありません　敏
通夜の席涙上手に演技する　たけし
ムツゴロウの涙乾いてきたらしい　ダン吉
肝心なときに涙の武器が枯れ　かつみ
責任を果たしてほしい議員さん　はるよ
目的を果たした顔がほころびる　二南
人質も無事救出果たした大統領　四三郎
ノルマ達成タバコの味が胸にしむ　利武
金と閑ある内義理を果たしとこ　志洋
やっとこさ生きてるおばとわらび餅　みつこ
窓際に果てた男の椅子がある　重人
ちょっとだけ惚けてみんなに愛される　辰子
ちょっと夢持たせて去った遠い人　さとみ
自分史にちょっときれいな彩を足す　りつえ
髪染めてちょっと強気でゆく余生　扶美代
視野ちょっと変えて世間を丸くする　和樹
ある時は鼻持ちならぬその器量　洞庵
矢面に立てば器が狭すぎる　泰子
順番の来ない器が棚にある　一壺
器なら家内の方が上だろう　金太
器ではないと見抜いた初対面　庸佑
器ではないのがしゃしゃり出て困る　吐来
やんわりとした物腰に騙される　聡
やんわりと肩凝りほぐす母の指　美喜

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

冠が重く初夢目がさめた　八重子
草冠菠薐草と書いてみる　朗子
ベレー帽ウカンムリと呼んでやろ　天雀
冠雪の山ゆたかなり熟柿食う　紫布
静かだな今朝のオウムはおかんむり　玲子
受賞の冠取巻き達がさわぎ出す　晶子
無冠でも笑いのたえぬ家がある　弘子
冠ピカピカ偽物かも知れぬ　亜弥
無冠になりやっと素顔を取りもどす　なみ

発言に無冠の強み腰がある　春枝
冠にぴったりの頭を探す　千代
王冠はもう聞き飽きる美辞麗句　瑞枝
栄冠を他人は三日で忘れ去る　正子
冠鶴はそもそも王家から育ち　ふみ
冠をいただき壁がぬけられぬ　千春
王冠は谷間の灯には気づかない　美世
生きざまに合った冠なら似合う　てい子
冠がずれて風向きが変わった　繭
手作りの王冠競い聖夜劇　寿々子
冠毛で飛ぶタンポポの陣とりだ　富美子
かまえて男無冠になって強くなり　日枝子
錯覚のまま紙の冠かぶってる　花子
冠が無いから本音で生きている　ゆき
冠をつけると手足動き出す　恵子
冠を放さぬ人が多すぎる　荒介
衣冠束帯連綿とあるまつりごと　田鶴

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

スランプを包んでくれた母の海　かつ子
スランプを友と旅路へ捨てにいく　聖子
もやもやをほぐしに娘の里帰り　好栄
実る日を夢見て土がほぐされる　ちよえ
娘の編んだセーターがありよい目覚め　英子
やりきれぬ心をほぐす玉手箱　はるみ
お姑さんのごきげんほぐす腕の冴え　鈴江
スランプに熱燗が効く縄のれん　博利
何もかも汚した黄砂憎めない　清泉
太陽を黄砂が染めている頭痛　白汀

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

シャンソンが聴ける喫茶で待ってます　義子
待ってやるゆっくり来いと亡夫やさし　てる
黄色いハンカチはたはたあなた待っている　石舟
今か今かと羽化を待ってるカメラアイ　萬的
逆立ちにするとまだ出るマヨネーズ　哲子
冷え切った愛を繕う糸がない　諷云児
生命とや他人の臓器で修理する　求芽
古ぞうきん絞ったままで捨てられる　能子
今一度絞って見ると出るチューブ　富喜子
絞ってしぼって私らしい色にする　いわゑ
手拭いを絞る力はまだ負けぬ　とみ子
胃カメラの検査をすると言う主治医　佳秋
そのまさかですと相手を喜ばす　白渓子
そのまさか信じたくない親心　柳宏子
まさかと思う事が平気で出来る孫　江美
おとなしい人が不倫の渦の中　文
DNAまさかの犯人あぶり出す　香子
背の荷物一つおろせば歩きよい　トミエ
飲んでからゆっくりと読む効能書　絹子
てのひらを返してばかり昨日今日　透太
愛想よく取った電話を切る無言　道胤
無理なのを充分知っている気まま　しげお
ねんごろに出刃研ぎます木の芽晴　春蘭
あじさいの色香に迷う男傘　鹿太
宮参りパパは木陰で欠伸する　みつ子
パスポート保険をかけたことがない　正坊
汗の手をズボンで拭いてメモを取る　曙蝶
まんなかに母が座れば座が和む　房子
鬼の目に光る泪を信じたい　澄子
潮時をのがして豆が煮くずれる　たず子

京都塔の会　松川　杜的報

ゆらりと出て来そうなり明智光秀　礫
ひそやかな歴史の声を風運ぶ　〆女
油売りの元祖の宮で眠くなる　寿美子
風も水もみどりに染めた天王山　倫子
判らない同士で誉める美術館　紫香
美術館モネの実物うたがわず　芳子
叱られてポロリと落ちた目の鱗　正坊
頂上でとれた気がする瞳のうろこ　百合子
鱗雲嫁かずじまいを悔いもせず　京子
ストレスの鱗落としに旅に出る　江美
目から鱗落として視野が開きだす　波留吉
天才の片鱗だろうかよく眠る　福子
移り香になおひかれおり眼をつむる　求芽
世は移るボクは僕だと動かない　ただし
リュックスタイルここまで来たかファッションも　達子
移る世へしかめっ面の鬼瓦　萬的
捨て犬に情けが移って離さない　庸佑
哀しみの行事が終り掃いている　豊次
落人の村公家の行事受け継がれ　吉之助
王朝へ戻す牛車のきしむ音　史風
お祭り行事が故郷へ呼びよせる　白渓子
御木曳の行事懐かし伊勢育ち　杜的
村の行事継ぐ若者が見当らぬ　石舟
母の日の母も息抜く時がない　英一

同居して耐える事のみ多くなり　笑女
花万朶逝く友留める術もなし　高栄
5パーセントやっぱり損をしたようで　美穂
土踏まずお風呂でウンとかわいがる　年代
女には女の科白桜散る　武庫坊
うぐいすが来て居り雨戸閉めがたし　春蘭

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

国訛り聞けば正義が目を覚ます　公一朗
商店街女性のものがあふれてる　實
親方も番頭手代丁稚ぐる　幸夫
待つ事がいやな相手で門に立ち　タミ
捨てるほど出てる母乳を呑ませない　高明
疑問符が日記について今日も暮れ　晴翠
油断せぬ敵を討つのが楽しみで　虹汀
茶柱に縁起かついで宝くじ　圭
さわがれていても当選する不思議　弘
孫はカード爺は診察券が増え　勝視
方言で交わす盃よく動き　四郎
愛用の桐下駄今も生きている　あき
金婚まで大人になれぬ夫婦雛　正剣

ローズ川柳会（前月号）　山崎　君子報

若葉風話し相手に恵まれる　てる
一合の米とぐ窓に若葉風　ミサヲ
マイナスに縦線一本入れられず　キク子
立ち向かう気力をもらう若葉風　みつ子
掛け値して引いときますと抜け目ない　藍
後もどりしてもう一度考える　哲子
柿若葉大きな実り期待する　トミエ
大学へ遊びにやった覚えなし　貴代子
メーデーをそっと見上げる赤いバラ　まさお
和解するつもり若葉の風抱いて　澄子
若葉萌ゆ逃避行でもしてみたし　いわゑ
若葉風自転車置場列が伸び　武庫坊
その昔市電通りの若葉陰　年代
坪庭も若葉溢れて神おわす　はつ絵
見栄を張るママの家計簿いつも赤　民平
家計費をトントンにする嫁の知恵　君子
せめて二キロ痩せシャネルの服買おう　義子
明日はもうしぼむ花にも水をやり　笑女

川柳ささやま　酒井　靖子報

この切符幸福行きのはずだった　純子
結び目を少しゆるめて機嫌とり　恵美
幸福の切符はヤジロベーが買う　とよ子
地蔵さんに呼び止められて鈴を振り　芳乃
若き日の思い出箪笥の底の底　美智子
お世辞でも褒めてくれたら買うつもり　多美子
お世辞だとわかっていても頬ゆるむ　すず子
あの頃がいちばんだった赤い靴　末野
花の香に誘われて押す車椅子　一粲
転ぶたびお地蔵さんの知恵を借る　八重子
春うらら居眠りしたかろ地蔵尊　素水
美しい糸で思い出編み上げる　とみ子
母の味消えてレンジのボタン押す　つや子
思い出はもう振り向かぬ夜のしじま　ヒサ子
目にふれるものみな思い出香を焚く　和子
思い出はバラ色だった紙おむつ　冨美
思い出の風が明治のまま笑う　可住
念を押す私の生きる道しるべ　靖子

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

疑えば妻のまばたきさえ怪し　柳宏子
疑えば藁一本にすがれない　透太
疑いの晴れたカルテにある祈り　朝子
首折れた疑い知らぬ葱坊主　たもつ
恋を知り疑うことを知りました　弘一
疑って燃えて憎んでもう他人　治也
つまずいた損から明日の絵が描ける　英一
損得の話になると大阪弁　宏
損得を言わない汗がよく光る　三男
出るとすぐ斬られてしまう損な役　剛治
生きがいと引き受けてきた損な役　祥一
あの人に損得抜きでかけてみる　八寿子
水溜まりチャンスが来たと手を握る　東雲
ワイングラスの底に残った水溜まり　泰
水溜まりはやボウフラがタップ踏み　弘直
雨止んで子等の湧きでる水溜まり　度
水溜まりとんで明日へ胸をはる　賢子
生い立ちに私ひとりが知る事実　いつふみ
隠せない事実へ愛の逃避行　柳伸
百出の反論びくともせぬ事実　頂留子
生きている事実夜明けをくり返す　ますみ
身のトゲにバラはいくたび泣く事実　夕花
裁判の流れを変えた新事実　とみを
点滅の蛍は梅雨の相聞歌　欣之

梅雨が好きだってあじさい咲くんだもん　昭　二
耳もとで蚊の声をきく梅雨の入り　春　子
つゆしとど雌雄寄り添う二上山　隆　盛
走り梅雨別れる人と沙羅の寺　洋
梅雨ごもりミシンをやけに踏んでいる　シマ子
梅雨空へあと継ぎのない鍬洗う　一　風

川柳塔鹿野みか月　　土橋　螢報

大金が溢れて困る事もなく　久　枝
よろこびの溢れる布団干している　隆　風
人柄が顔に溢れるいい笑い　八重子
幸せが溢れふり回されている　汲　香
太い指の溢れる愛に逆らえぬ　孔美子
酌ぎこぼし世渡り上手だと思う　実　満
何年も話せぬ姉と目で話す　武　子
過疎守る姉から届く山椒味噌　節　子
同じ血でこんなに違う姉妹　茂
姉の忌がめぐり一本咲いた薔薇　三千代
義姉さんという小姑に気をつかう　房　子
姉よりも妹さんがおとなびている　はるお
溝にはまったのは姉の方だった　盛　桜
更生を誓う姿に仏の目　智恵子
おだやかな姿で縁の下に棲む　諷　人
こぢんまり野良着の似合う母だった　弘　子
こぢんまり葬式代をためている　くに子
こぢんまり枯山水に石匂う　かつ乃
友達に彫ってもらった宝もの　保　子
いそいそと刻む彫刻刀の足　富久江
仁王立ちして運慶の作見上げ　きみえ
彫り直ししてくだされや目鼻だち　公　子
私を彫って子孫に見てもらう　和　子
長い世であっという間の五十年　野　草
悪友が私の尻尾にぎってる　幸　枝
花弁みな紫にして他人の妻　明　美
七転び父の姿に自負がある　睦　子
五つ紋の羽織どっしり構えている　喜与志
ひらめきが欲しくて神にひざまずく　きみ子
丁寧に某をはさむ日を重ね　螢

川柳塔まつえ吟社　　恒松　叮紅報

また探し物ですかと嫁に笑われる　太　泡
手を汚さずに儲かる仕事探してる　螢
夕やけに染まり探せぬ赤トンボ　早　苗
晩年は愛のかけらを探し合う　きみ子
いらぬ時ひょいと出て来る探し物　久　子
幸せの四ツ葉探したなつかしさ　邦　代
両手に花男冥利に尽きる刻　多賀子
バラの花両手いっぱいもらう夢　登志子
両の手に子がぶら下がる日曜日　茂　美
両手あげ命を干した屋根の上　圭詩朗
大脳空っぽ両手を組んだ日曜日　義　良
両の手で誓詞よんだのは昔　寿美子
赤を着て見知らぬ街を闇歩する　みえ
色褪せた帽子何にも語らない　桂　子
黄昏を配って早い月の色　蒼　流
太陽へ稲も色づく農の幸　房　子
遠茜うしろめたさがまだ残る　畔
いい色に人生染めて喜寿の春　登美子
平凡に生きて自然が美しい　ひふみ
平凡が行ったり来たりする器　米　子
平凡が好き平凡な服を買う　静　江
名人の一手は平凡には見えず　哲　雄
平凡な夫婦と思う朝のお茶　静　恵
平凡な名ばかり並ぶ子沢山　午　朗
孫のいる間が妻の笑うとき　俊　毅
トンネルで笑うと変に湿っぽい　友　子
ゲラゲラ笑ってごまかす癖がある　鶴　丸
笑ってする嘘なら小出しせんといて　芳　枝
よく笑う嫁で男は笑わない　与根一
暗闇に居る通り魔のうす笑い　叮　紅

川柳ねやがわ　　江口　度報

話の種尽きぬ新茶の両隣　とし子
人間の都合ばかりで選った種　恵　子
失敗を話の種に座を沸かす　波留吉
非行児の種ばら蒔いているテレビ　亜　成
生きるための飾りことばは許される　たもつ
戦いが済んで飾りをみな外す　度
会長といっても実は飾りもの　三　郎
修飾語旨く使った達筆で　一　笑
あたたかい老母の飾りは笑い皺　朝　子
飾るもの外せば楽に向きあえる　茜
訪ねてあげようこの頃見ない未亡人　礫
健康になるリハビリに耐えている　庸　佑
健康な会話に弾むレモンティー　一　風
健康なら多く望まぬ夫婦箸　時　弘
早寝早起生命線をのばしてる　黎之助

シルクロード未知の夕陽に手を合わす　英壬子
孫が来て未知の話をしてくれる　博泉
未知なるが故に楽しい余生なり　勇太朗
ガン告知未知の病に立ち向かう　ルイ子
未知の世界だから冒険してみたい　文秋
熱帯魚育てて暮らすワンルーム　あやめ
椅子も城もとれずにちびるパパの靴　頂留子
芍薬の似合うわたしの焼いた壺　かすみ
地下足袋のやっと地につく二度勤め　静江
やさしさをもらう五月の旬を食べ　冬葉
しみじみと米の味知る六分粥　光子
明日になればきっと笑える汗になる　洋
父の日は父を見直しながら酌む　小路
たっぷりの母乳で姑に見直され　高栄
世界地図1DKの壁に貼る　重三

岬川柳会　八十田洞庵報

歯の抜けた夢に不吉な胸騒ぎ　俶子
噂流し騒ぎの中で知らぬ顔　年子
ねじ巻いて元気で余生趣味に生き　里子
潮騒の調べに聴いた母の歌　朋子
話しあい意見が合わず騒がしい　ミチエ
年金へ上がる医療に騒ぎ出す　正美
特攻隊蕾のままで散り急ぎ　庄六
ねじ巻けば艶も深まる草木染め　都子
酔うてなきゃとても騒ぎの知らぬ人　令子
どの国もスキャンダラスで騒がしい　勇
祖の鯉騒ぐまい妻の癌　みつ子
騒ぐほどもてる人ではないようだ　龍弘
騒ぎつつ心はいつも覚めた人　鉄男
マスコミが騒ぐ事件の行方消え　孝子
大打者と騒いだわりに出ぬ長打　信博
ねじ一つ買いに二人で乗る電車　悦子
妻が巻くねじの加減にある平和　浪速子
へそくりを隠した場所をつい忘れ　幸子
満ち足りた暮らしの中に過去忘れ　優加
ボケに効く記事を切り抜きため込んだ　ヤエ
夏草に負けじと励む玉の汗　とみ
ねじそっと巻いて夫の陰に添う　洞庵

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

これからという時夫に先立たれ　江美
かわりばえしない景色の永い旅　満寿蔵
人生はまだこれからとイヤリング　鈴
これからはゆっくり余生楽しまん　向
タイガース貯金ができて乾杯す　まさ
人生の鼓動を刻む古時計　正治
人生はこれからレモン絞りきる　澄子
受話器から賑わいを聞く子の世帯　昌子
硬い男と信じた男軽い口　六浦
軽い靴はいてタンゴのシルバー会　十四郎
妻の荷を軽くしてやる拭き掃除　石舟
妻の肩かけた苦労を揉みほぐす　勇次郎
長梅雨におんな泪もろくなる　鹿太
悲しみを乗り越え笑顔美しい　すみ
喜寿越えを気にせず気張りよ英会話　弘治
追い越してから振り返る美人傘　夢之助
峠越すと海が見え出す県境　紫香

城北川柳会　吐田公一報

万歩計ただひたすらに歩くのみ　あきよ
リフォームのキッチン触れる手が迷い　秀夫
熱いお茶すすめてくれる寒い朝　久留美
信じ合う友ある倖せ花も葉に　春蘭
朝夕に老いを感じる事ばかり　登美子
親の役ときどき出番八十路坂　トヨ子
この次は私のクローンを参加させ　政子
色眼鏡かけて汚いものを見る　典子
役得としてもらっとくビール券　史風
癖の無い字にお人柄偲ばれる　満津子
肩書きは相談役という隠居　ただし
通り抜け今年も貨幣セット買い　美代子
なにげない会話の裏にあるヒント　佐津乃
蝶々のデートはピンクの花の下　あい子
尊厳死受け入れている息子の背　昭子
地下鉄の中で抱き合っているデート　倫子
ドングリの大将やっぱりドングリだ　とし子
呱々の声五パーセントの税を負い　高栄
緩せてゆく余生へ色を足して生く　朝子
保護色の器の中で自己主張　睦子
あたたかい色からきれる絵の具箱　一枝
言い訳は玉虫色にしておこう　寿美子
風もう凪いだ老後の菊の鉢　あやめ
棘の無い花はみな好き善人で　達子
脇役に徹して炎えるかすみ草　白峰
平坦な道に躓く老いた足　あき子
セールスの弱さ他人の子可愛がり　扇帆

亡き夫と愛をはぐくむ夢の中　八重
妥協癖鉛筆ばかりとがらせる　千歩
色紙を折って老母は子に還る　公一

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

おたがいが信じて疑わない夫婦　隼人
Vサイン出したところで目がさめる　龍人
フィナーレを飾ってくれる紙吹雪　ふさえ
欠点のない人生も味気なし　しげる
億の金抱いて疑心の森に棲む　アサ
辞令出てまた飛ばされる奴だこ　雅子
疑えば広がる嘘の恐ろしさ　哲郎
句の色紙敢えて書法にこだわらず　北歩
命名の筆でめでたいわら半紙　銀波
いつ逝きますかそれがわかればよいのです　順三
疑心暗鬼明日の風も怖くなる　ツネ
唐紙の裏で歴史がくすぶりぬ　柳々
盲点を突かれ怯える尾骶骨　花匠
欠点を互いに埋める夫婦箸　雅城
疑いが晴れて仲間の輪に入る　劦
欠点が多くて子離れが出来ぬ　黙人
再生紙ですと威張っているチラシ　一花
金策の靴が鉛と化す暮色　岳水
不調法の言葉を和紙にしたためる　花峯
紙を漉く里に寡黙な灯がともり　五楽庵

川柳塔打吹　米田　幸子報

ふらふらと思慮分別もなく歩く　明美
ふらふらとあなたに酔うた迷い道　一京
陽炎をまたふらふらと追いかける　よしえ
午前二時ふらふら起きて摘まみ食い　和歌子
若嫁が大胆不敵朝帰り　一夫
木洩れ日が胸の古傷うつし出し　克枝
ふらふらになって花見の宴終わる　順子
帽子はま深夏の日差しが恐いから　和枝
菊さして菊のいのちと根くらべ　螢
恋人を大胆にする星明り　孝恵
不要です喪服の背なになぐさめは　たけの
ほら穴の苔は日差しを見逃さぬ　玲子
何をくよくよ日本一の五月晴れ　節子
人の目を盗みゴッホの絵にさわる　勝見
大胆に言える年齢とうに過ぎ　芳光
大胆な突入だった人助け　(仙)康子
竹トンボ晴れた五月の空を飛ぶ　季芳
暇人が噂話をする日差し　弘朗
空も陸もごった返しの五月晴れ　富枝
ひもじさにふらふら乗った泥の舟　仙岳
大胆に咲いたボタンに嫉妬する　きみ子
大胆に抱きしめあった再会だ　睦子
お隣の屋根に日差しを遮られ　幸子

川柳藤井寺　高田美代子報

永遠の僕のあこがれ原節子　昭子
大スター大芸作り去り給う　宗一
苦労する役なら私　地で演れる　扶美代
手相にはスターになれる線がある　一屯
往年のスター老け役でも光り　吸江
限界の努力へ子役欲がない　キミ子
桃色で叩くと男もろくなる　和樹
不祥事の火種を叩く検察庁　三夫
石橋を叩く思案が後手を踏み　紅紫朗
叩かれた背中が亡父を恋しがる　トミ子
肩叩き振り向かせたら別の人　みのる
ワープロを叩いています呆けはいや　三郎
動かねば叩かれもせず冬の蠅　智久
胸どんと叩く男の心意気　史郎
張り切りの女が叩く帯の音　映三子
裏口へ親の心の勇み足　桂子
セクハラにされそう僕の勇み足　美房
親切を愛と感じた勇み足　政代
天国も地獄も見えた勇み足　悦子
前向きに生きる男の勇み足　花梢
勇み足の覇気に無縁で大過なく　かつみ
まっ先に春を見つけた勇み足　敦子
冗談に替えてしまった勇み足　アキ
夫婦の位置にもう戻れない勇み足　修六
輪の中にひとり紛れた勇み足　絹歌
風船の割れる音聞く勇み足　美代子
どん底で手と手つないできた絆　鐘造
研修医　教科書通り患者診る　侑子
陰口を叩いた口で賛成す　恒雄
石橋を叩いて運を取り逃がす　志洋

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

足の指ムズムズ僕は梅雨入りだ　伊三郎
ぶぶ漬けで急いで急かれて梅雨の空　一笛
梅雨しとど熟女紫陽花いろに咲く　弘治

梅雨の雷天の叱咤と聞いておく　武庫坊
生きてゆく迷いが続く走り梅雨　澄子
ホームレスの眸の中にある梅雨曇天　芳子
山仕事午後は太陽高過ぎる　向西
家事終りほっとしてます初夏の午後　正子
出る汗もげだるく午後の陽に光る　比ろ志
眠い午後お客を出しに喫茶店　渉
定年でも土曜の午後はホッとする　吉太郎
午後の陽ざしに麦わら帽子よく動く　年代
老い二人の楽しみ午後の茶が旨い　夢之助
兎小屋あのスーパーの近くです　昌子
かあさんの近いうちとはいつのこと　久子
子は遠く近い他人をたより切る　十四郎
息抜きの屋台で絆近くする　歌子
近づけば頬に血のさす文楽人形　薫
お人好しのみかんが並ぶLサイズ　とみ子
春愁やモジリアニの頸ほそく　光穂
ほっこりと開く牡丹の大らかさ　すみ
川幅の広さに少し気が休む　紫香
ふりかえりふりかえり行く長い途　ハツヱ
日の丸が傾く自虐の教科書　義芳
茶へ誘う男は別に他意はない　白渓子
耳打ちが消化不良を起してる　昭三
梅雨寒に順不同の死見送って　全彦

とっとり川柳会　武田　帆雀報

過ちを許したことが間違いだ　一夫
許すとは言わずにそっと眼をつむる　静生
許すはずそちらも膝に傷がある　粗粒
何もかも許すと言えば素っ裸　螢
孫が出来頑固親父の許し出る　正和
もう先が無いので何もかも許す　はるお
許された時には蓮の上にいる　和歌子
緑黄色たっぷり揃え母の味　よしえ
物言わず緑讃える湖面の想い　薫
ひと皿に母はパセリの役でよい　悦子
深呼吸みどりの風をただで買う　孝男
太陽がみどりに見える二日酔い　和枝
化粧まで緑にしたい初夏の彩　一枝
大仏の腰から下は風みどり　舎人
中年の魅力でママの店が混む　銀嶺
古稀近い身も中年の気で居ます　一京
中年の気概足腰ついて来ぬ　帆雀
中年よやがて産業廃棄物　大漁
中年の運を辞令が振り分ける　美恵子
中年と思い込んどるお婆さん　石花菜
リストラに負けぬ中年北に立つ　忠良
連休を番犬にされゴロ寝する　喬水
番犬が吠えても誰も出て来ない　睦子
天皇の番犬などにもうならぬ　鬼桜
作戦は先ず番犬を手懐ける　季芳
うちの番犬竜ちゃんと言う名前です　きみ子
番犬になった時から不眠症　圭一朗
番犬は警察犬のOBだ　輪多朗

倉吉川柳会　谷口　次男報

大の字にねると楽しい原っぱだ　明美
楽な路選んだ兄が苦労買い　幸子
れんげ菜の花　娘に戻る無垢な瞳　ゆり子
プライドを捨てたら楽になった鬼　よしえ
楽勝と高を括ってミスショット　玲子
楽天家だけれど胃潰瘍を病む　和枝
音楽はきらいな娘だが唄は好き　一夫
俺よりも先に極楽へはやらぬ　石花菜
老いの身にひびかぬように楽に舞う　(山)康子
幸せは自宅で静かに安楽死　次男
商魂の薬病人どこへ行く　小生
病室には極楽の楽しみがない　菩句
赤ちゃんが笑うとみんな楽しくなる　御前
極楽の近くで煙草吸っている　螢
らくらくと輪ゴムのように生きている　和歌子
楽だなぁちょっと脅せば億の金　完司
電話する声がしだいに乱気流　智子
金持ちがまだ金を欲しがり世を乱す　寿朗
極楽へ行く順番が乱れだす　かつみ
愛らしくしてる女について行く　多哥由

横浜あおば川柳会　菱田　満秋報

下積みの苦労知らない三代目　歌子
金積んで積んでお迎え待っている　省子
白内障積んどく本が嘆いてる　トヨ子
昔の知恵美事に積んだピラミッド　ちよ路
ささやかに積んだお金も孫のため　政勝
クリスマス合わせたように雪積もる　明玄
本積んで親を安心させておく　亜希子
フロンガス積もり積もって天を抜く　八重子
フルムーン宣伝しない宿に決め　絹子

カラフルに染め旅に出る長い爪　ふみ
鈍行の気ままな旅は本を連れ　広和
旅に来て許容範囲が広くなる　サト子
胴巻と暮らす世界の二十日間　達也
衣裳箱長旅用と亡母の筆　和可
病床で思い出めくる時刻表　のぶ子
絵はがきの余白を探す旅に出る　見早子
生きてきた旅で楽しい人と会う　道子
一泊の旅で揉めてる服選び　良子
近すぎて親の恩には気がつかず　羊子
近くても弾む話で家着けず　由美子
予定日も近く胎動気にかかり　純子
近海の魚の味も忘れかけ　笑子
近づいた式が無口な父にする　よし一
サイレンが不安を連れて近くなる　雅子
路地裏の内緒話は近くなる　愛生
秒読みの発射に箸を止めて待つ　潮華
近道で抜いたつもりが後になり　智恵子
旅で見る雲はわが家へ向かってる　満秋

川柳高知　川竹　松風報

傘よりも手をしっかりと握る仲　典雄
絵日傘を回して恋を呼んでいる　子龍
幸せは二人で揺れる傘の中　美々
巣立つ子がもう邪魔にする父の傘　良雄
人情の希薄を嘆く傘地蔵　三郎
幸せは私の余生茜色　幸
五月空　風も緑の色となり　功
愛一途好みの色に染まります　圭風

ほどほどでよかったなあと共白髪　孝雄
ほどほどにしないと肝臓ストをする　快風
親がしてくれたように子を育て　京子
猿真似を重ねて自己を見失う　佳風
やっと寝た孫へ手真似の嫁姑　千鳥
真似ごとでいい孝行をひとつする　松風

翠洋会　柴田英壬子報

ここはいちばん仮病使って切り抜ける　宣司
口実の仮病が一人歩きする　蕉子
美しい友の素顔をみてしまう　凡子
石投げてゆっくり敵の出方待つ　綾子
友情にすこしスパイス効かそうか　喜美子
知らぬ間に自動ドアから友が消え　佳秋
二度の職任せなさいと趣味の友　正雄
また一枚賀状を出せる友が増え　会美
紅を引き仮病いそいそ靴をはく　蛙
どの部屋も物置きにして趣味に生き　義
いい天気だ仮病でもして休もうか　千枝子
頭痛腹痛次の仮病は歯にしよう　志華子
梅雨晴れて軽やかに押す車椅子　真砂
梅雨晴れの惜しい時間に長電話　光子
正直で仮病使わぬ時刻表　東雲
愛さんさん心通じる無二の友　久峰
友だちの連れにみんなが仕切られる　千歩
梅雨晴れに朝寝のシーツ引きはがし　叡子
梅雨晴れ間働き者の親つばめ　ひろ子
男でも女でもよいお友達　鬼遊
今日だけの友の握手のバスツアー　絹子

碁敵は憎たらしいが無二の友　靖巳
戻り梅雨もうやめてほし妻の愚痴　正坊
クラス会来ぬ悪友が気にかかる　恭昌
コネの効く友達なんかもってない　さと美
探険ごっこした物置で見た夕陽　澄子
仮病つかう子が抱いている深い闇　楓楽
梅雨しとどひとりのめしを炊く仮設　石舟
時々は仮病つかって休まねば　みつ子
友達のくすり私によく効いた　希久子

川柳塔おおとり　上田　俊路報

気遣っていると忘れる時もある　崇
気がかりは息子ふたりに嫁がない　艶子
占いをあてにはせぬが気にもなり　宏章
輪を書いて飛行機雲が山にきえ　道子
絵を描いて心の隙間埋める彼　清子
締め切りが来ないと持たぬペンを持つ　由多香
縄文のくらしが土器に書いてある　幸次郎
余生への筋書き作り翔んでみる　風花
高僧の書には仏の影宿す　銀嶺
生きて死ぬ手本が書いてある仏間　みさを
入口があれば出口もきっとある　真一
手八丁口八丁で世を渡り　小生
腹は別口先だけの上機嫌　伝住
口ずさむ歌は昔を偲ばせる　登美
口下手でなければもっと上の役　敬之介
セールスの無口大口取ってくる　舎人
バツイチの口紅嘘も重ね塗る　俊路
猿が口開けて詩の餌愛のえさ　黙光

怒らせる喜ばせるも同じ口　孝子
無口から出た正論が拾われる　せつ子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

恋終えて満足顔の猫帰る　蕗児
身辺の整理おわりを潔く　知香子
海行かばリズムが変りさようなら　一笛
一巻の終りも知らず燃えている　吉太郎
この世のおわりまで生きるつもりです　寿美子
世界遺産になったピカドンのあばら骨　天笑
証人の誠実な口火を吹いて　悟郎
あっけらかん心は何時もLサイズ　ただし
特価品バンザイ　サイズ合いました　重人
Sサイズ数は仰山あるみかん　柳宏子
値が同じ大きいサイズ買っとこう　英子
六年のサイズで母に丁度よい　明光
会う度に一緒に食べる恩返し　月子
ブーメランいつも返ってくる情け　しげお
売り言葉返す言葉にすきま風　慶子
父の日に碁盤を出して待ちぼうけ　博史
飲まされた煮え湯忘れたお人好し　登代子
二人三脚たまにもつれることもある　きく子
足元の蟻を踏まないようにする　紫香
正座などしたことがない長い足　正坊

サークル檸檬　小林　一夫報

ピエロの服を一枚入れてある鞄　あずき
香港のみやげに偽のルイビトン　正坊
旅かばんふわりと消えてみたくなる　いわゑ
時間空間つめて私の旅鞄　希久子
悲喜こもごも秘めて定退後のかばん　智恵子
万緑に反乱のごと落葉まふ　雅子
センターライン越えて会いたい人がいる　楓楽
新じゃがのつるつる剝けて五十肩　薫
変り身の早さけじめを付けたペン　房子
仏壇の中からひらく杜若　千代
人の世の隅で傾く百度石　一夫

ローズ川柳会　山崎　君子報

雨の日の便りくちなしの香り乗せ　てる
古時計五分おくれもはばからず　ミサヲ
道のりはまだなかばなりはるかなり　キク子
雨蛙蛍も住める水が無い　藍
生きる芽を摘む雨上り草を引く　哲子
余生とはこんな形か無人駅　トミエ
外は雨わたし幸せ数えてる　貴代子
神代からみんな持ってる腹時計　まさお
呼吸器の止った時を忘れない　澄子
進む時計遅れる時計助け合う　いわゑ
一日中雨で日記に雨一字　武庫坊
巻き忘れると進んでしまう古時計　年代
梅雨に入りしめる仮設は虹を待つ　民平
花時計ゆっくり回れ老いの恋　君子
いい本だ雨に楽しさ貰った日　義子
お座敷へ急ぐ祇園の蛇の目傘　笑女

★七月号の川柳塔わかやま吟社の広告に中島正博さんの名が抜けたことをお詫びします。

川柳展望全国大会

日時 ／ 1997年８月24日(日)　10時30分開場
場所 ／ 舞子ビラ（TEL078－706－3711）
費 ／ 2000円

★案内状をさしあげますので下記へご連絡下さい

〒563-01　大阪府豊能町ときわ台３－４－17
天根夢草方　川柳展望社
ＴＥＬ　0727－38－1845
ＦＡＸ　0727－38－6770

柳界展望

★平成8年度の川柳みか月大賞は次のとおり決った。

昂りが渦巻いている草枕　徳田ひろ子

なお、最多勝賞は中原諷人さんに決定した。

★豊中もくせい川柳会は、平成8年度のベスト8を決定した。順位は次のとおり

①桝本蕗児②小池しげお③玉置重人・田中正坊⑤江口明光⑥阿萬萬的⑦満仲きく子・辻川慶子

★ふあうすと川柳社主幹、藤本静港子氏は、芸術文化団体「半どんの会」から平成8年度文化功労賞を受賞した。

★石川県高松川柳会主催の第2回「鶴彬」川柳大賞は次の要項で行われる。作品内容は、時代を鋭く風刺した新しい感覚の川柳で、1人2句以内をB5判の用紙に書き、投句料1000円（郵便小為替）を同封、**8月5日**までに〒929-12石川県河北郡高松町字高松ク40・高松町芸術文化祭事務局内鶴彬川柳大賞公募係へ。大賞は賞金2万円、優秀賞2点は1万円ほか。8月31日高松川柳会主催・第11回鶴彬句会で発表し、入賞作品は発表誌に掲載する。

★第4回・五呂八川柳祭全国誌上大会が次の要項で行われる。題は「道」と「雑詠」で各4人共選。便せんに各題2句ずつを書き、参加料1000円を同封、**8月10日**までに〒047・小樽市石山町3―25・松田竹生へ。賞は1～3位句入り盾、4～15位まで呈賞

★第28回奈良新聞川柳大会は**8月24日**午前10時から漢国神社会館（近鉄奈良駅西の交差点南へ50米西側）で開く。宿題と選者は、口＝福田秋雄▽汗＝石田常念▽カーテン＝鶴本むねお▽角度＝宮口笛生▽童話＝杉森節子▽赤（朱）＝中村福太朗▽菩薩＝片岡つとむ、席題＝稲垣馨（各題2句・午前11時半締切）、会費3000円（昼食・発表誌）、出席申込みは**8月12日**までに奈良市三条町606奈良新聞社文化事業部川柳係へ欠席投句は**8月15日**までに500円を添え、奈良市北市中町71杉野陸朗へ

★日本現代詩歌文学館は、全日本川柳協会・岩手県川柳連盟との共催で第1回現代柳人の集いを開く。作品募集は、軸＝今川乱魚▽暮らし＝ちば東北子▽位置＝森中恵美子▽旅＝山田良行▽魚＝万迷多（各題2句）で、投句は1000円を同封、**9月16日**までに〒024・岩手県北上市本石町2―5―60日本現代詩歌文学館「現代柳人の集い」係あて。また、集会は11月16日午前10時から同館講堂で開催、「川柳・裏もおもても」と題する森中恵美子さんの講演の後、日本現代詩歌文学館館長賞授賞式

★土田欣之句集『欣（よろこび）』発行川柳大会は、**9月28日**正午からホテル・アウィーナ大阪で開かれる宿題と選者は次のとおり。絆＝木下草風▽志＝杉森節子▽遊＝奥山晴生▽夜＝中田たつお▽鬼＝小松原爽介▽手＝墨作二郎▽地＝橘高薫風▽都＝泉比呂史（各題2句・午後2時締切）、会費2000円（記念品・句集呈）、懇親会6000円

▽出　版△

■5周年記念合同句集『ほたる』（ほたる川柳同好会刊・B6判150頁）会員36人の各15句・540句を収録、橘高薫風序文

▼訂　正▲

■**6月号**＝P106中段11行目（各地柳壇）「まっ白な面布一枚…」→「まっ白な画布一枚を子に残す」

■**7月号**＝P136第2段5行目（編集後記）「確かに何遍も…」→「**確**かに何遍も…」▼表3（作品募集欄）課題吟『プライド』選者名「新家実司」→「新家**完**司」

▼おことわり▲

■**6月号**＝105頁上段19行目および■**7月号**91頁下段（佳句地十選）9句目の「捨てようと誰も言わない亡母の杖」▽■**7月号**34頁（川柳塔）下段2行目「骨拾う窯冷静な太さです」を本人の申し出により削除します。

8月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎いくしま	1日(金)午後1時から 夜・飛ぶ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代
堺川柳会	3日(日)午前11時半開場 **夜市川柳大会** 本号P78参照	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑
川柳塔まつえ	9日(土)午後1時から 賑やか・湖・涼	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔わかやま	10日(日)午後1時から 腹・先祖・知る	近鉄カルチャーセンター　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
八尾市民川柳会	10日(日)午後6時から ため息・豆腐・先祖・心配	八尾市文化会館4F　近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
西宮北口川柳会	11日(月)午後1時から 応援・黙る・重い・自由吟	西宮市立中央公民館　阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2－19－515　山本義子
ほたる川柳同好会	12日(火)午後1時から 太る・過ぎる・うなずく	豊中市立蛍池公民館　阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3－10－28　井上直次
南大阪川柳会	15日(金)午後6時から 空虚・草餅・口下手・区域	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
岸和田川柳会	16日(土)午後1時半から 愉快・予感・落胆・流行	市立福祉総合センター2F　南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村
川柳ねやがわ	17日(日)　正午から メルヘン・店員・穴・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
もくせい川柳会	18日(月)午後1時から 魂・乾く・しなやか・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
高槻川柳サークル卯の花	21日(木)　正午から 迷信・そわそわ・染める・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3－8－8　川島諷云児
東大阪市川柳同好会	23日(土)午後6時から 投げる・苦しい・アリバイ・敵	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	24日(日)午後1時から 八月・わくわく・パートナー・学ぶ	羽曳野市立陵南の森公民館　近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
富柳会	28日(木)午後1時から 西瓜・置く・自由吟	富田林市立中央公民館　近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1－10　池　森子
京都塔の会	**29日(金)**午後1時から 瀧・脆い・線香	ハートピア京都　地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★本誌に〝川柳こぼれ話〟として「川柳と外来語」についてまとめたことがあるが、今度、全日本川柳協会が編集する〝川柳ミニ事典シリーズ〟の一つとして、『川柳カタカナ語辞典』を編んで考えさせられることが多かった。

★私がカタカナ語（最近では、外来語とは言わない）に関心を持つようになったのは、中学校の英語の時間に教師が〝パイプ〟という言葉を例にあげ、カタカナ語の美しさとその効用を説くのに共鳴して以来である。

★やがて戦争が激しくなると、英語はもとよりカタカナ語も〝敵性語〟として排斥され、野球などのスポーツ用語までが、ぎこちない漢語に改めさせられたのをにがにがしく思い出す人が多いだろう。

★最近では、さすがにそういう風潮はなくなり、新聞・雑誌ではむしろカタカナ語の使用がやや過剰気味であり、各種の専門用語に至っては、何の注釈もなしに熟しないカタカナ語がまかり通っている。

★川柳においても、まだ一部に抵抗はあるものの、カタカナ語の使用が着実に増えてきている。しかし、新奇をてらって乱用したり、正しい意味を知らずに誤用しているケースも少なくはない。川柳家は、日本語の一部であるカタカナ語を身につけるようにしたい。

★理事長の小出智子さんが亡くなった。川柳塔の代表的作家の一人であり、絶えず後進の指導に気を配った方であった。心からご冥福をお祈りしたい。（正）

ひとこと

まあだだよ

ダンナに関するご近所の奥さん方のご意見はこんなものらしい。「ダンナ、生かしとかなきゃ駄目よ。何もしてもらわなくても、目を開けていてさえもらえばいいの。死なれたら年金半分になるわよ」

逆に、私たち仲間が集まるとよくこんな話になる。

「今ごろ女房に先死なれたら、目も当てられんわなあ。死ぬんやったらもっと早う死んでくれな。後釜の来手のあるうちやないと」

以上、「秀句鑑賞（同人吟2月号から）」の中の板東倫子さんの次の句に触発され、つい書きたくなった「ひとこと」である。

もういいかい
まあだだよとは死ぬ話

あははと笑った後で、うーんと考えさせられる秀句である。

岩津ようじ

▼またまた酒の話で恐縮ですが、今回はいわゆる「地酒」について書いてみたいと思います。百貨店の酒売場や酒のスーパーなどでは北は北海道から南は九州まで、さまざまの清酒が売られている。では何をもって地酒と呼ぶのか、私はその地方へ行って飲む、その地方産の酒をいうのだと思っていた。

▼だが今日では、灘・伏見以外の地方産の清酒を、地酒と言っているみたいである。最近かなり減っては来たが、いまだに地方で酒を注文すると、灘や伏見の大手の酒しか置いていない店があり、これでは全くの興醒めである。

▼また北海道旅行の際、どこの旅館・ホテルでも、札幌の「北の誉」が出て来たのには驚かされた。思わず「北海道には北の誉しかないのんか…」と、怒鳴りたくなった。記憶に残る地酒では、熊本・山鹿の「千代の園・朱盃」、大分・九重の「八鹿（やつしか）」、三陸・宮古の「千両男山」などがある。

▼どれもが純米酒か、吟醸生貯蔵酒であった。いずれにしても、サケはコメの芸術品であり、酒造りは文化でもある。呑んべえが育ててゆかねばならぬ。（金）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**10月号**）　地名　　雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人 ・ **誌友**　マルで囲んでください。

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　西田柳宏子選
渺湖抄（3句）　八木千代選
茴香の花（3句）　宮西弥生選
課題吟（3句）
「店」　江口有一朗選
「柿」　岩本美智子選
「かじる」　上田俊路選
初歩教室「触る（さわる）」　吐田公一担当

11月号
課題吟「味」「かなう」「気付く」
初歩教室「作る」

本社8月句会

とき　8月7日（木）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター3F
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
兼題「忘れる」　川上大輪選
「発見」　池森子選
「マンション」　木本朱夏選
「現役」　河内天笑選
「稲妻」　橘高薫風選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　500円　投句料　400円

本社9月句会　8日（月）予定
兼題　「洗濯」「指輪」「茶碗」「祈り」「あじさい」

夜市川柳募集

第3回「群」　藤田泰子選
ハガキに3句　8月末締切
投句先　〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「覗く」　森中恵美子選
ハガキに3句　8月10日締切
投句先　〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表　8月23日（土）午前11時5分
からラジオ第1放送（予定）

定価　六百円（送料84円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成九年八月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　美研アート
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六六―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

「川柳塔」への投句について

①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
②渺湖抄・茴香の花欄および一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
③各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成九年八月一日発行（通巻一日発行）

第三回 川柳塔まつり

川柳塔社の恒例行事として第三回「川柳塔まつり」を実施します。要項は次のとおりです。

とき　10月3日（金）午前10時から

ところ　アウィーナ大阪（なにわ会館）
△近鉄上本町・地下鉄9丁目下車▽

△同人総会▽

議事　平成8年度事業経過報告・同会計報告・同会計監査報告・平成9年度事業計画案・同予算案・役員人事・その他△質疑応答▽

△各賞表彰▽

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を午後1時から挙行

△記念句会▽

各賞表彰式に続いて開会。午後1時半投句締切。兼題・選者は9月号で発表。午後4時半終了予定

句会費　1000円（記念品贈呈）

△懇親会▽

とき　午後5時－7時　同会場で開催

会費　6000円（事前申込制）

宿泊　7000円（申込みは川柳塔社事務所へ）

川柳塔社

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530 大阪市北区浪花町9番4号
TEL・FAX(06)372－1178

雑誌　05703－8